
前世の記憶

黎奈

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

前世の記憶

【Nコード】

N3261M

【作者名】

黎奈

【あらすじ】

前世の記憶をとあるきっかけで思い出してしまった陽魔。

平凡な生活を送っていた陽魔はこのことにびっくり仰天。

陽魔の人生は大きく変わる。でも自分と同じように前世の記憶を持っている陽香と出会い、受け入れ始める・・・ワクワクドキドキのファンタジー。

前世について

俺は前世の記憶がない。 いや、なかったと言うほうが正しいか . .

前世の記憶がないのは、当たり前だとみんなが思うのは当然だよな。

俺も実は先週まで前世の記憶がないのは当然だと思っていた。

そりゃあそうだ。なんだって、生まれ変わる前の記憶だもんな。

ただでさえ、小さいころの記憶もつい先日言われたことも忘れるよ
うな奴なんかに前世の記憶なんて覚えているわけがない。

理屈から考えてもありえない話だ。

だが、ありえない話のはずがありえてしまうことになるのって、い
つも突然で何の脈絡もなく、くることってあるんだよね。

ここで分かった奴もいるだろう。

まさか！？とおもうやつもいるかもしれない。でもその『まさ
か』なんだな。

自己紹介が遅れたが、俺の名は、幽鬼^{ゆうき} 陽魔^{ようま}っていうんだ。

結構、前向きな性格で平凡な学校生活を送っていたんだ。一週間前
までは . . .。

一週間前、思いもしない出来事が起こった。

そのせいで俺の人生は俺の前世の奴に持っていかれた。

くそー、あんのやろー、俺の人生返せー、このまま平凡な人生を
送っていきたくったのに！

そう叫びたかった。

でも叫んだって何も変わらない。

もう起こってしまったことは起こらなかったことにはできない。

俺は持ち前の前向きな性格を発揮して受け入れることにした。

第一章 前世の記憶の欠片

一週間前、俺こと、幽鬼陽魔は、交通事故にあった。

その日、俺は学校の帰り道だった。やっと終わったと気が抜けたときだった、トラックが俺に衝突しそうになったのは。

・・ぶつかる！？・・やばい！！

とっさに目をつぶった。が、いつまでもぶつかるような衝撃は来なかった。

恐る恐る目を開けると俺に衝突寸前のところでストップしたトラックが目映った。

最初はそう思った。

が、正確にはストップしたのはラックではない。
時間の方だ。と気づいたのはそれから後の話だ。

話を元に戻すが、最初は本気でトラックがぎりぎりのところでストップしてくれたと思い込んだ。

しかし、冷静に考えるとおかしいことがいくつかある。

一つは、もしほんとにトラックがストップしてくれたのなら、ストップするときの急ブレーキの音が耳に響くだろうということ。
が、俺には周りの雑音すら聞こえなかった。

特におかしいと思うのは二つ目だった。

それは、トラックが本当にストップしたのなら、もう動くはずである。なのに今も止まった状態のままだ。

おかしいと首をひねったとき、ギギイ とトラックの何かの音が聞こえた。

ちょうどそのとき、視界が歪んだ。景色が変わっている。俺は一瞬気を失っていたようだった。

一瞬気を失っただけで景色が変わるそんなことあるかと思うのも無理はない。

が、本当に景色が変わったのだった。

目の前は雲ひとつない青空！ 何事！？と思いとっさに下を見た。

「！？」

俺は宙に浮かんでいたのだった。浮いているという感覚はまったくない。おかしい話だが、足元に自分を支えることができるものの上にいる感覚すらある。

俺は目の前で起きていることすべてが理解できなかった。

唯一、分かるのは、「生きている」ということだけだった。

どうしたらいいのかわからない俺はその場に立ちすくんだ。

急に下の景色が一変する。まさにそのとき、左目に奇妙なものが見えた。

「！？」

何だこれは？

右目では左目で見ているものが見えない。

左目で覗いているものはこの世界とはまるで次元を超えた、別世界

のものだと思った。

何か見える。ただそれだけ。何か風景が見えるだけでほかに何も無い。

風景が時間が過ぎるたびにさまざまなものを見せる。

最初は見ていて楽しいと思えるほどの風景だった。

それが何か黒いものに覆われその風景をまるで別のものに変えてしまった。

その風景は俺の心に深く残るものとなった。

左目からは、じきに何も見えなくなった。

右目と同じような風景が映っている。雲ひとつない青空だった。

まだ俺は浮いていた。

いつまで続くんだと半ば思っていたところだった、いきなり異形な風貌をした者が現れたのは。

髪の色は淡い青、人の形をしているが顔も漂わせる雰囲気も人とはかけ離れているものだった。

マントのようなものを羽織っていて服装や体格とかは分からなかったが。

俺と同じように宙に浮いている。

俺とそいつの目が合った。そいつの視線が俺の左目だけをみつめてきた。

「きさまは誰だ？」

俺が問う。

「・・・俺の名は、ゼレナル。お前を・・・幽魔を探していた。」

異形のものが名乗った。

・・すっかり日本語が話せるんだな。
と気楽に思いつつ、

「幽魔って誰だ？俺は幽鬼陽魔って言う名前だぞ。」

といった。ゼレナルはその言葉に動じた風でもなかった。

「お前の名は確かに幽鬼陽魔だ。だがそれと同時に幽魔なのも確かだ。」

と落ち着いた口調で言った。

「どういうことだ？」

ゼレナルの言っている意味が分からない。

「・・・つまり、お前の前世は幽魔なんだ。」

こいつ、どうしたんだ？何をわけの分からないことを言っている。

「は？前世？何を言っているんだ？」

「お前は空を飛べないはずだ。そうだろ？」

俺の質問には答えず話題を勝手に変えた。

「あ、ああ。普通なら飛べない。」

「じゃあ、何で飛んでいる？」

「わからん。気づいたときには浮いてた。」

「それさ。普通なら飛ぶことも浮くこともできない。なのにお前は浮いている。それは前世の幽魔の力なんだ。」

「は？じゃあなに？おれは前世の奴のおかげで俺がここにいると
いたいのか？」

「そうだ。お前は前世の記憶の欠片を持っているだろう？一部の
のだが、左目で見たはずだ。」

「確かに何か見たが・・・なんでゼレナルが知っている？」

「お前、気づいていないのか？その左目色が右目と違い青い炎のよ
うな色になっているんだぞ。」

「は？そんなわけ・・・っ!？」

俺は言葉を飲み込んだ。

ゼレナルが差し出した鏡で俺の左目が青い炎のような色合いになっ
ているのを。

「それを見てまだ信じられないか？」

第二章 前世の瞳

俺の目を見ても信じる事ができなかった。
右目は俺の目なのに。

今日、学校から出る前までは左目も右目と同じ色だったのに。

だが、信じるしかなさそうだ。

「正直、信じられないが、信じるしかないんだよな。」

信じたくない。だが信じるしかない。

矛盾した二つの思いが心の中で葛藤している。

「お前の目は、前世の瞳が刻まれている。その目こそ前世の記憶が一部分戻った証拠だ。

今は淡い青色の炎のような色をしているがやがてその炎ははっきり映し出されるだろう。」

ゼレナルが言う。

「一部分？全部戻ると俺の目は前世の俺の目になるのか？」

「そうだ。もつとも、全部戻ればおそらく右目も左目と同じ運命が訪れるだろうが。」

「はあ？ふざけんなよ。左目だけでも厄介なのに右目もおかしくなっちゃうのか？冗談じゃねえ。

学校はどうすんのさ？こんな目だと、不審に思われるだろ？」

マジに困る。いったいどうすんのさ？

こうなったのは全部俺の前世の奴のせいだ！俺はそいつを恨む。

「その心配はない。左目だけなら眼帯すればいいさ。その目は隠さないとな。それにだ、お前の目が両方とも前世の瞳になるには気の遠くなるほど長い時間がかかる。そうすぐにはならない。

まあ、もしなったら、俺の世界に来い。」

「ゼレナルの世界？」

「そうだ。何のために俺がお前を探しに来たんだと思っている。お前の都合を考えていないわけでもないが俺のほうも非常にやばいんでな。」

ゼレナルは真剣な口調で言う。

本当にやばい状況なんだと思った。

俺はゼレナルに聞こうと思って口を開こうとしたとき、視界が歪んだ。

あのときの歪んだ感じとは違う。
意識ももつろうとしてきた。

俺を支える何かの圧力が突然消えた。

俺は下にまっさかさまに落ちるはずだった。

ゼレナルが俺の腕をとっさにつかんだおかげだった。

俺はこのとき、気を失ったのだ。

ゼレナルは気を失った陽魔の腕を自分の肩に寄せ、かついだ。

ゼレナルは少しバランスを崩した。

そのとき突然、ゼレナルのそばに現れた奴がゼレナルを助けた。

「ゼレナルちゃん。何で一人で勝手にいちゃうんだよ。心配するじゃんか。」

突如現れた奴がゼレナルに言う。

「その名を言うな。怒るぞ、ゼルデ。」

ゼレナルはゼレナルちゃんと呼ばれることを拒否した。

「そっちこそ、ゼルデって名前を略すなよ。僕にはちゃんとゼレラルデっていう名があるんだからさ。怒るぞ僕も。」

ゼルデと呼ばれたものが者がいかにも怒っていない口ぶりでゼレラルデと訂正した。

「ほんと君は言葉遣いが悪いんだから。そんなだと、モテナイゾ。」

ゼレラルデがゼレナルをちやかす。

「ほっとけ、俺はモテるとかそんなこと考えてもないし気にもしない。」

冷たくゼレナルが言い放つ。

「そう？ほんとには気にしてるんじゃないの？幽魔のときはそうだったじゃないか。」

こんなに君のこと僕は大事にしてるのに・・・幽魔の後世を探すって諦めもしないで・・・」

ゼレラルーデが少し悲しそうに言う。

「それは・・・」

言葉を濁すゼレナル。

「それは仕方のないことだったけど・・・それにしてもこの子、幽魔にそっくりだね。もしかして性格も一緒だったりする？」

ゼレラルーデが話題を変えた。

「少し似ている。こいつの中に眠る二重人格はもしかしたら幽魔そのものかもしれないな。」

「そっか。じゃあゼレナルちゃん、幽魔のときと同じように恋をするの？」

いきなり、ゼレラルーデがとんでもないことを言っただけだ。
ゼレナルは顔を赤くする。

「こ、恋などしない！！・・・何度も言ってるがその名だけは言っない！」

ゼレナルはゼレラルーデを怒鳴りつけた。

「あゝ、ごめんごめん。でも顔赤くなってるよ・・・ふふ、かわいい」

ここでさらにゼレナルの顔が赤くなった。

「!?!」

「すぐ顔が赤くなるんだねっ。ふふふ。・・・さてからかうのはそれまでとして、どこまで話したの?この子に。」

ゼレナルは自分を落ち着かせて

「まだそんなに話していない。本格的なことは明日だ。」

といった。

「僕も手伝おうか?」

「余計なことはしないでいい。」

ゼレラルーデが聞いたがゼレナルはあっさりそれを冷たくあしらった。

「君がなんと言おうが僕は行くからね、君は僕をとめることなんてできないからね。」

ゼレラルーデはゼレナルに言い放った。どうやら、どうしてもゼレラルーデは行く気らしい。

「ちい、勝手にしろ、だが変なことは言わせないからな。」

舌打ちし、ゼレラルーデにくぎを刺すゼレナル。

「はいはい。わかったよ。」

守れそうもない口調で言うゼレラルーデ。

(絶対何か言うな、こいつ)と心の中で思うゼレナルであった。

第三章 ゼレナルの幼馴染

陽魔は意識を取り戻した。

そこは陽魔自身よく知っている自分の部屋だった。

まだ視界がぼやけている。

「目が覚めたか？」

突然声をかけられた。

「あ、ああ。・・・はぁー、夢じゃないのか・・・」

俺は声をかけてきた者に返事をしてため息をついた。
声をかけてきた者はゼレナルだった。

「何だ、そのため息は。俺はお前をここまで運んできてやったんだぞ。少しは感謝しろ。」

怒っているのか、あきれているのか微妙な口調のゼレナル。

「あ、そういえば俺、気絶したのか・・・悪かったな、運んでくれてサンキュな。」

ゼレナルに素直に礼を言った。

「べ、別に。お前があそこで落ちて死んでもらわれたくはなかったからしたまでだ。」

ゼレナルが照れたように言う。
それを俺は不思議に思った。

俺がしゃべろうとしたとき、突然何かが現れた。

「ゼレナルちゃん、お・待・た・せ。例のものもって来たよ。」

声とともに現れたのはゼレナルと同じく異形の者だった。

髪は、ブロンド。背が高く、ゼレナルとはまったく違う印象を俺は受けた。ちなみにゼレナルは背が低い。

・誰だこいつ？・それより、ゼレナルちゃんってゼレナルのことか！？・・・・

「ゼレナルちゃん？」

俺は誰だと思つ以上に気になったことを聞いた。

「ゼルデー！」

ゼレナルがいきなり大声で叫んだ。

「ん？君、知らないの？実はゼレナルちゃんは・・・」

それを気にした風でもなく俺の質問に答えようとする。

「言うな！！いい加減にしろ！！だからお前は来るなといったんだ！！！」

ゼルデと呼ばれた者の声を一番聞きたいところでゼルナルがさえる。

「こいつはゼレラルーデ。略してゼルデだ。それとこいつの言うことは聞くな。自分までおかしくなるぞ。」

ゼルナルが本当にいやそうな顔をして説明する。

「俺、幽鬼陽魔。まあ、よろしく。」

一応自分の名を言って挨拶した。

「あ、僕はゼレラルーデ。ゼレナルちゃんの幼馴染なんだ。あと、ゼレナルちゃんが言うほど僕、そんな変な奴じゃないよ。」

「はあ。」

どう反応していいか分からず俺は頷いた。

「自覚がないんだお前は。それより、例のもの持ってきたって言ったな。早速出せ。」

「はいはい。まったく人使い荒いんだから。」

ゼレナルが急かしそれに応じてゼレラルーデが半ば呟きながら、ごそごそとポケットのようなものから、例のものとやらを取り出した。

それは、水晶くらいの大きさの泡のようなものに、コンタクトのようなものが中に入っているものだった。

「何だ？それ。」

「それはお前に前世のことを教えるためのものだ。これなら信じるだろう。」

「これはね、僕とゼレナルちゃんの世界を映す物で、この世界で言う、ビデオのようなものかな。」

俺の問いにゼレナルとゼレラルーデが答えた。

ゼレナルがゼレラルーデからそれを受け取りコンタクトのようなものを取り出した。

「これを左目にはめてみる、そうすれば俺の世界、俺の過去が見れる。」

ゼレナルが言う。

俺はそれをはめてみた。

第四章 陽魔の前世がいた世界

陽魔は左目で見るもの聞くものすべてにひきつけられた。

色とりどりの花や木々が広がる美しい風景を眺めているゼレナルとゼレラルーデの姿。

「何てきれいなんだろう。幽魔がこの世界を変えてくれたおかげでよりいっそう美しくなったよ。」

「ああ。幽魔のおかげだ。あいつはすごい。」

ゼレナルもゼレラルーデも微笑んでいた。

・ ・ ・

「何であいつが！！よりもよってなんでこんなことになったんだ！！」

「落ち着いてゼレナルちゃん！！僕だってつらいんだ。」

「でも！！でも！！」

ゼレナルが怒りで混乱している。

ゼレラルーデが落ち着かせようとする。

ゼレナルとゼレラルーデの目の前には幽魔の眠るかんおけが・・・。

「幽魔は・・・この世界の民のために・・・永遠の眠りについたんだ。だから・・・泣かないで・・・。」

「・・・なんで・・・何も言わずにお前は・・・一人でやろうとするんだ・・・いつも・・・おまえは・・・。」

ゼレナルが幽魔のかんおけにすがりつき、涙を流していた。ゼレナルーデも歪んだ顔で慰める。

「俺が・・・いや、私が幽魔の力になりたいと・・・何でもいいから言ってくれと・・・言ったのに・・・
何でお前は言ってくれなかったんだ。・・・それほどお前にとって私は・・・頼りなかったのか・・・
それとも・・・頼るに値しないとでも言うのか・・・お前に・・・幽魔にとって私はなんだったんだ！・・・。」

もう、目覚めることのない幽魔に向かってゼレナルは泣き叫んだ。

「・・・きつと・・・大切な存在だからこそ言わなかったかもしれない・・・
僕はそう思う・・・でも・・・それは・・・ずるいよね・・・幽魔は・・・残された僕たちのことなんか考えていないんだ・・・。」

ゼレナルの言葉につられたのかゼレナルーデも涙を流した。

二人とも泣きながら幽魔が安らかに眠るよう祈りをした。

・ ・ ・

「無理だよ！こんなに探しても見つからないんだ！」

「無理じゃない！きつと・・・どこかに・・・いるはずなんだ！・・・幽魔の後世が・・・。」

ゼレラルーデの諦めの声に心を揺るがされ惑わされ、それでも諦めようしないゼレナル。

「こんな・・・こんな世界を・・・幽魔は望んでなどいない！！そのために探さなければならぬんだ！」

ゼレナルは叫ぶ。ゼレナルの周りの景色は・・・いや、この世界の緑が、荒れ果てていた。

草や木は枯れ、水もひあがり幽魔のいたときの、風景が、環境が、全てが、消える寸前だった。

幽魔の努力が失われようとしている。

幽魔の瞳と力さえあれば元に・・・いや、今まで以上に豊かになる。

「ゼルデ！！お前は、幽魔の努力が無駄に消えていくことを黙ってみてると言っのか！！」

「それは・・・。わかった、僕も諦めずに探す。この世界を・・・マフィルヨウトウロードを救って見せる！！」

ゼレナルの言葉にゼレラルーデも決意を強めた。

二人は幽魔の後世^{おれ}を探すところに誓ったのであった。

第五章 陽魔の決心

陽魔がゼレナルたちの過去を見ている間、ゼレナルはゼレラルーデに

「ゼルデ、お前に持ってこさせたのは俺だが、今、あいつが見ているのはいつのものだ？」

ゼレナルは確かに自分の過去が刻まれている過去映し鏡「シンタクト」を持ってこさせた。

だが、どの時代をもってこいとは言っていない。年代を特定して命じなかったのだ。

ただ、

『幽魔がいるときのマフィルヨウトワールドの風景と幽魔のいないときの風景が見られるやつをもってこい』
と言っただけだった。

それ故に陽魔がなにを見ているのか気になって仕方がなかったのだ。

ゼレラルーデが

「うーん、どれだったかな。確か・MD789って、書いてあったかな？急いでたからな。あの時は」

と思い出したようなそぶりで言う。

「MD789……と書いてあったんだな？」

ゼレナルが確認するように聞き返す。

ゼレナルの漂わせるとんでもなく大きい邪気のオーラにゼレラルーデはビクツと体を震わせた。

「仕方がなかったんだよ。あれしかなかったし・・・急いでいたから・・・」

ゼレラルーデはどんどん声を小さくしていく。

説得力0の言葉にゼレナルは怒りをみなぎらせた。

「ゼー・ルー・デー！！貴様と言う奴は！！どれだけ余計なことをしたら気が済むんだ！！」

ゼレナルは怒りで声を振るわせた。

ゼレラルーデの顔色が見る見る悪くなる。

怒りで我を忘れたゼレナルはもはやゼレラルーデにはどうすることもできない。

ゼレナルが怒るのも無理はない。

ゼレナルが過去の中で最も人には見られたくない場面が、今、陽魔が見ているのだから。

でも、ゼレラルーデがゼレナルが怒るのを知っていてなお持ってきたことには訳があつてのことだった。

このとき、陽魔がゼレナルたちの過去を見終わった。

陽魔はコンタクトをはずした。その動作を見て、ゼレラルーデが

「あ、陽魔君、見終わったのかい？・・・どう？それでも信じられない？」

陽魔に聞いた。

ゼレラルーデの問いにゼレナルは顔を赤くした。

「これを見たらもう信じるしかないだろう・・・俺は不本意だがな。」

陽魔が言う。

このとき陽魔は

・・・こんなもの見せられたら信じる以外選択はないいや、俺が信じてやらないとこいつらの涙は報われない・・・信じて・・・こいつらのために・・・何かしてやりたい・・・

と、何か心の中に使命感みたいなものがこみ上げてくるのを感じた真っ最中だった。

ゼレナルは自分を落ち着かせ、だがゼレラルーデを睨みながら

「そうか・・・お前はこれからどうしたい？俺たちはお前を探し俺たちの世界を・・・マフィルヨウトウルドを救うのが俺たちの願いでもあり使命でもあるが。」

ゼレナルは言う。

「俺は・・ゼレナルたちの言うこと聞くさ。俺の目はもう人間の目には戻らないんだろ？だったら、今まで通り生活なんてできねえし。第一、俺が死にそうになったとき助けてくれたのは、俺の前世の奴なんだろ？お前等には借りがある。どうせあのときに終わる命だったんだ。だったら何か役に立ちたいじゃないか。役に立つんだろ？俺の力が。」

素直に自分の思ったことを口にする。

あの時・・トラックが来たとき、死ぬ！！と本能が察したとき俺は死ぬ覚悟をしていた。

俺の両親が小さいころに亡くなってもう生きる意味がないと小さいころ思った。

そんな命を俺の前世の力が助けた。こんな命でも誰かの役に立てるなら役に立ちたい。

今までの生活は楽しいものであったが、つまらないものでもあった。こんな非常識な展開になってもう後戻りもできない状況で俺は面白くなりそうだと思ってしまうた。

それに人間でなくなった俺にはもう選択肢はない。

今までどおりに生活なんてできやしない。俺の人生は俺の人生ではなくなったのも同じこと。

少し厄介なことになってしまったがあんなものを見せられてしまえば自分はこのまま今まで通りに生活したいと言えるわけがないのも事実だ。

現に困っている奴を目の前で見てもぬふりなんて俺にはできんな。

「そうだ。お前の力が必要なんだ。お前は・・・陽魔は力を貸してくれるんだな？」

ゼレナルが俺に問う。

「ああ。」

俺は答える。

「あ、ゼレナルちゃん今ほっとしたよね？」

ゼレナルデがにと笑って言う。

「え？」

思わず声に出る。ほっとしたような表情には見えなかったからだっ
た。

「・・・。ほっとしてなんか・・・いない。」

「またまたあ、照れちゃって。図星でしょう？ゼレナルちゃんは
すぐ顔に出るんだから。」

ゼレナルデがゼレナルをからかうように言う。

「・・・。」

ゼレナルは、ゼレナルちゃんと呼ばれていることにもかわらず

押し黙って反抗すらない。

「なんかいいなよ。」

俺は驚いた。

あの過去のことにも驚いた。

ゼレナルはいつも冷静沈着。

俺は初対面のときからそう思った。

だから余計に驚いた。ゼレナルが泣いたことも今ほつとしたのも。

ゼレラルーデはゼレナルのことをよく知っている。

さすが幼馴染と言うべきだろう。ゼレナルはいやそうにしていたが。

ゼレナルとゼレラルーデの関係を少しうらやましく思う。

俺もいつしかゼレナルたちと何もかも話し合えるような関係になりたいと思った。

そして、ゼレナルたちの力になりたいと心のそこから思ったのだった。

だがそれと同時に、自分が人間ではなくなったことはいまだに信じることができずにこんな風になってしまった自分の人生を俺の前世の奴のせいだとうらみまがしく思ったのだった。

第六章 転校生、陽香

「で、俺はなにをすればいいんだ？」

陽魔がゼレナルに問う。

「お前の学校に陽香と言う転校生が来るはずだ。そいつを調べろ。どういう奴か俺に報告してくれ。」

そいつって陽魔に笛を渡す。

「何だ？これ。」

俺は笛を受け取りゼレナルに問う。

「その笛は、俺たち妖幽鬼まじゅうならどこにいても聞こえる音の出せる笛だ。その笛で俺に知らせろ。笛を吹くときに俺を心で念じろ。そうすれば俺に笛の音は届くはずだ。」

ゼレナルが分かりやすく説明してくれる。

「笛のことは分かったが、妖幽鬼ってのは何だ？」

「妖幽鬼とは、お前にとって異形な風貌をしていてそれぞれの属性によって髪の色も気性も違う奴等のことを言うんだ。そうだな・・見てすぐ分かる特徴は・・属性によって違うが角が生えていたり、周りに魂みたいなものを漂わせていたり、耳がとんがっていたり・・などなどさまざまな特徴があるわけだが・・」

「ふーん。で、属性とやらいくつあるんだ？」

「属性と一つにくくったが、まだいろいろ分かれていてな、大まかにくくると三つに分かれるんだ。」

一つは『妖』と呼ばれている系統の奴で魔法などを呪文一つでこの世に具現させることのできる奴らを言うんだ。二つ目は『幽』と呼ばれている系統の奴らでいろいろなものを操ることが出来る奴らのことを言うんだ。三つ目は『鬼』と呼ばれていて主に攻撃系のものを得意とする。」

「へえー。俺はどの部類に入るんだ？」

俺がごく普通の質問を口にするのとゼレナルとゼレラルーデは顔を見

合わせて

「え〜とね、陽魔君のはね・・・どの部類にも当てはまるんだよ。ずばり言っちゃうと、『特例妖魔幽鬼型』っていう、極々稀な系統の型の奴なんだよ。」

ゼレラルーデは気まずそうに言う。

「ああ。そんなもんだ。あんまり気にするな、お前の力は、威力が強いが、使うと魔力の消費がものすごいからな。おまえ自身簡単に使えないだろうし、今はあんまり気にするな。」

ゼレナルが気にするなと強調して言う。

その物言いに多少引っかけた俺だがその話は今は触れないほうがいいと思い

「ああ。分かった。で、俺の学校に転校生が来るのか？こんな時期に。」

俺は話題を変えた。今は夏。でもってもう夏休みはもう間近の迫っている七月だった。

「そうだ。だからそちのほうは頼んだぞ。俺たちはいったん、マフィルヨウトワールドに戻るからな。俺たちが戻っても聞こえるはずだからな。じゃあ、後は頼んだぞ。」

「じゃあ、またね、陽魔君。」

そういつて二人は一瞬で姿を消してもとの世界に戻っていった。

「はあ、転校生かあ。名前からして女なんだろうなあ〜ああ〜いやだな〜」

そう、呟いて俺は明日の用意をしたのだった。

そしてその翌日の朝。

俺の教室は例の話題で盛り上がっている真っ最中だった。

「なあ〜聞いたか？俺たちのクラスに転校生が来るんだってよ。びっくりだよなあ〜こんな時期に来るなんてな〜。」

「え？まじ？こんな時期にか？珍しいことがあるんだな。いや、珍しいことはほかにもあったな。」

俺のクラスメイトが、例の話題をしながら俺を見てきた。

俺の左目には眼帯をしている。おそらくこの眼帯を言っているのだろう。

「おい、何で眼帯なんかしてるんだ？一昨日はなかっただろう。」

クラスメイトの一人が聞く。

「あ、ああ。ちよつといろいろあつてな。」

俺は言葉を濁しながら言う。

「昨日休んだことも関係あるのか？」

鋭い奴だな。と、そう思いながら、

「ああ。ちよつとな。」

といった。クラスメイトはまたほかの話題に移った。

「珍しいといえばほかにもあるぞ。確か昨日テレビでやってた。」

「なんだ？何かあったのか？」

俺はなぜか冷や汗が出てくるのを感じた。

「昨日、俺たちの通学路で事故があつたんだよ。トラックの衝突事故がさ。」

「へえ。そのどこが珍しいんだ？別に事故なんてしょっちゅうあるじゃないか。」

「ああ。事故のほうはな。問題はそこじゃないんだよ。で、テレビでな、トラックの運転手がこういつてたんだ。『道を曲がったら子供がいたから急いで急ブレーキしたんだ。そしたら子供がいたはずなのに消えたんだ。』ってな。おかしいだろ？」

俺は今どんな表情をしているだろう？俺は今にも卒倒しそうだ。きつと顔色が悪いに違いない。

「ああ。おかしい話だな。信じられんよ。だが、もし、実際に姿をくらませることができたら俺たち卒倒しちゃうんじゃないか？」

俺です、それ。マジに俺です。

心の中で言う俺。

「卒倒どころじゃねえよ。叫びまくって、頭どうかするんじゃない

のか？」

姿をくらましたのは俺なんだよな。自分でも信じられんが、こいつらに俺がそいつだって言ったら、

もし信じてもらえたとしても、ただじゃ済まされんだろうなあ。

クラスメイトの話題はそこで途絶えた。

担任の先生が来たからだ。

先生が

「今日、このクラスに転校生が来ます。さあ、入ってきて。」

教室の扉に向かって言う。

ガラーと音を立てて入ってきたのは、少女だった。

少女は黒板の前にぴたっと止まってクラスメイトのいる方向を向く。クラスメイトたちは驚きのあまり声が出なかった。

俺もその中には含まれていた。

彼女はともかわいかったからだ！！・・・もあるけど、それより驚いたのは、彼女の左目のことだった。俺のようにもはや人間の目ではない。彼女の目は俺と違い薄いきれいな紫色の炎が宿っているようだった。俺は息を呑んだ。

彼女の美貌も彼女の瞳も俺の予想を遥かに超えていたからだ。

先生が俺やほかのクラスメイトのことに気を取られず黒板に彼女の名前を書いていた。

『ようき 妖鬼 ようか 陽香』

書かれた名前がそれだった。

「さあ、陽香さん、自己紹介をしてください。」

先生が彼女を促す。

「妖鬼陽香です。よろしくおねがいします。」

きれいな透き通る声を出してペコッとお辞儀をする。長いロングストレートの髪がさらつと揺れる。

そのしぐさは俺を含めてこの教室にいる男子にはたまらなかった。

クラスメイトたちはここでようやく声を出すことができた。

「え」と、陽香さんの席は・・・陽魔君の隣でいいわね。あの子の隣

よ、陽香さん。」

俺を指差して言う。

そのとき、クラスの男子全員からいたい視線が俺に集まったのを感じた。

俺は幸い教室の窓側の席の一番後ろだから背中にはあのとてつもなく大きい憎悪の視線は当たらずに済んだ。

彼女は俺のほうへと歩いてくる。

そして、俺の隣に座った。このとき、

「よろしく。」

とささやいて、意味ありげに可愛いく笑うので、

「よ、よろしく」

といいかえした。

その言葉と彼女の笑顔は俺をひどく混乱させた。

その日の授業は集中できなかった。

無理もなかった。

クラスの男子は俺をにらんでくるし、休み時間も教室の中は騒ぎっぱなしでぜんぜん休めなかった。

だが、不思議なことに誰も彼女に話しかけることはなかった。

休み時間でさえも。

俺は必死で彼女を調べようと彼女にばれないように観察していた。

だが、時々目が合った。彼女はそのたびに可愛い笑顔で俺に見せてくれたのであった。

第七章 陽香の情報

陽魔は帰り道、はあとため息をついた。

あゝ、授業に集中することができなかった。

なんてことだ。ただでさえ成績が悪いのに。

いつ、この世界を離れるか分からないってのに。

そう思いながら道端をとぼとぼ歩く陽魔だった。
そのとき、

ピー

ピー

と、何か笛の音になったのが聞こえた。

「!？」

何だ、何だ、何なんだ？

俺が俺でなくなる。

そう、本能がとっさに感じたとき、俺は俺でなくなった。

眼帯が急に取れた。

左目があらわになる。

笛の音がさっきよりも強く聞こえる。

笛はまるで俺を呼んでいるかのようにだった。

俺は幽魔の能力を使い笛の音がするほうへ向かった。

空中に浮かび笛の音するほうへまっすぐ向かう。

笛の音は俺の中の何かを呼び覚ますような音を響かせていた。

俺は体中に走る痛みをぐつとこらえる。

その痛みと同時に頭痛と急激なだるさが襲ってきた。

だが、不思議なことに力尽きるようなことはなかった。

体はどこかで自分の疲れや痛みを感じている。

でも今、飛んでいるという行為を邪魔しているわけではなかった。

おかしい。

普通なら疲れや痛みを体を感じるなら行っている動作を邪魔しようとするようなものだ。

そこが不思議でたまらなかった。

景色はすごい速さで変わっていく。

本来ならありえないことだ。

そう思えるのに、今はそれが当たり前のように感じる。

それも不思議に感じた。

俺は笛の音の原点を見つけた。

それは、森の中 だった。

俺は森の中に降り立つ。笛を吹いていたのはゼレナルだった。

「ゼレナル・・・お前だったんだな。」

俺が言った。

そのはずなのに声の調子がおかしい。

自分がいつているはずなのに自分ではない誰かが言っている気がする。

「!?!?・・・ああ。お前を呼ぶためにな。」

ゼレナルが言う。

ゼレナルは笛を吹くのをやめた。

ゼレナルが笛を吹くのをやめたとたんに、俺は地面に座り込んだ。

体中から一気に力が抜けて、立っていたくても立っていられなかったからだった。

「この笛はお前を呼ぶ道具でもあるが、同時にお前の力を呼び覚ます道具でもある。」

「だからか。変な感じがしたのは。道理でおかしいと思ったわけだ。」

ゼレナルの説明に俺は納得する。

「ところで俺を呼んだ理由は何だ？」

「それは陽香の事についてだ。先ほど情報が入った。」

「情報つてのは？」

「その前に、お前から、陽香のことを話してもらおうとする。話せ。」

俺がゼレナルをせかしたのがいけないのか、ゼレナルは俺から話させようとする。

「俺からって言われても。普通の子とは違うなって思ったただけだな。後は誰も、その転校生に近づいたりしなかった。つてのが俺から見て気づいたことだな。」

「やはりか。」

俺の言葉にゼレナルはなぜか予想的中って感じの言葉を吐いた。

「やはり？」

「ああ。情報からは、陽香という奴は自由自在というわけにいかんが多少なりとも能力は使えるらしい。その能力は霧。」

「霧？」

「ああ。霧だ。相手を惑わし自分には近づけないようにするという、ある意味恐ろしい技だ。」

「じゃあ、何で俺は……。いやなんでもない。……他には？」

「?・・・ほかにというと、陽香の前世は 香鈴^{かりん} というらしい。
俺はそいつはあまり見たことはないが。とにかくそいつと接触しないことには変わりないが。」

「・・・接触したらどうなるのかな?」

透き通ったきれいな声は俺の後ろから聞こえた。

「陽香!?!」

思わず叫んだ。

陽香は俺とゼレナルのほうに向かって歩き出す。

「あ、名前を言ってくれるなんてうれしいわ。陽魔君だったわね。
君も能力が使えるのね。」

「しまった。」

陽香の声に俺は眼帯をし忘れたことを思い出した。

陽香はうすい紫色をした左目を欄と輝かせて言う。

「さて、・・・さっき・・・笛を鳴らしてたのはあなたなのね・・・」

「ああ。」

「・・・あなたは誰?」

「俺はゼレナル。お前を探してた。」

「あなた・・・自分の事・・・隠しているように言うのね。・・・まあいいけど。」

何でだろうか。陽香は辛そうに息を吐いてしゃべる。

俺が不思議に思ったそのとき、陽香の足が止まりその場に倒れた。

「!？」

「おいっ!？」

俺は自分の足に力をいれ立ち上がり、陽香のところへ駆け寄った。

俺は陽香を抱き起こす。

陽香は気を失っているようだった。

目を閉じた陽香の顔はかわいらしく無防備なものだった。

だが、顔色が悪い。

「・・・こいつは俺たちに接触しようと無理をしたようだな。」

ゼレナルが見透かしたように言った。

第八章 強気な陽香

俺は陽香を自分の家に連れ込んだ。

言い方が悪かったが別にやましいことなんて考えてないぞつ。
これっぽっちもなつ。

あんなとこに置き去りなんてできなかったんだから仕方がなかったんだつ。

「お前に言っておかなければならないことがある。」

ゼレナルが言う。

「何だ？」

「お前が能力を多少なりとも使えるようになったら俺たちの世界マ
フィルヨウトワールドに
きてもらう。」

「ああ。いいぜ。」

俺は言った。

冷静にこの目のことを考えればいい判断だと自分でも思う。

「ん？ここは・・・？」

陽香が目を覚ましたようだった。

「俺の部屋だ。あんたをあんなここに置き去りにするよりましだろうと思って。」

陽香は俺のベットから起き上がった。

「そうね。置き去りにされるよりは。ありがとう、陽魔君。それより、名前で言ってくれない？
あんたとかそんな風に呼ばれるの好きじゃないの。陽香よ、よ・う・か。」

陽香は最後に自分の名前を強調して言う。

「分かった。」

「じゃあ、名前で呼んで。ほら。」

俺に陽香は顔を近づけていった。

元気だな。さっきはあんなにうなされていたんだが。

俺は内心そう思った。

さっき、俺がここまで連れてくる最中、何度もうなされているような声を出していた。

それが今やこんな状態である。

回復が思ったよりも早い。

「・・・陽香・・・」

俺は言った。

なんかとんでもなく威張られてる気がする。

「よろしい。じゃあ、わたしも君付けじゃなくて呼び捨てにするわ。ねえ、陽魔はいつ記憶が戻ったの？」

「は？あ、ああ、つい最近だな。何でそんなこと聞くんだ？」

なんか俺、陽香のペースに乗せられてる気がするぞ。

「それは今から分かるわ。」

ねえ、ゼレナルといったあなた、陽魔の前世がそちらの世界で死んだのはいつのこと？」

「・・・半年前だ。」

ゼレナルがぶつきらぼくに言い放つ。

「それを聞くために俺に聞いたのか？」

「そうよ。私は陽魔より、一週間以上先に記憶が戻ったから、陽魔の前世が死ぬ前に私の前世は死んだのね。」

陽香は自分でうんうんと頷く。

「なぜこんなことを聞く？」

ゼレナルが陽香に聞いた。

「それは前世から後世になるまでどのくらいかかるかなと思って聞いたのだけど。」

でも、私たちが生まれる前に前世がいるわけじゃないことが今判明したわ。」

「それってありえるんだ・・・」

俺は呟いた。

普通前世が死んだ後に後世ってのが現れるんだとばかり・・・

「普通はありえない。だが、世界が違うから時差が生まれる。俺が今のでそう予想がついた。」

ゼレナルが言った。

「そうね。それならありえるわね。」

だったら私や陽魔がそっちの世界にいつてもこっちの世界の時間をとめておくことはできるかしら？」

「止めるのは無理だが、時間を戻すことならできるはずだ。もつとも、お前らがこの世界に帰る勇気があればの話だが。」

「そうね。私を笑うような奴がいるこんな世界に戻って無意味だと私は思うけど。」

まあ、念のために聞いたことよ。気にしないで。」

「陽香はあっちの世界に行く覚悟はできてるって言うのか？」

「ええ。あるわよ。陽魔はないの?」

「あるさ。ただ、当たり前のように言ってるからつい聞きたくなっただけさ。」

「そういうもの? 私はこの目がなくとも、それが日常^{ふつう}だったから、陽魔の気持ちは分からないけど・・・」

「人生人それぞれだからな、その辺はやっぱいいぜ。で、ゼレナル、これからどうすんだ?」

「とにかく今までどおり過ごしてくれかまわない。ただし、陽魔、お前は能力の訓練を受けてもらう。」

「訓練? それってきついのか?」

「陽魔の訓練、私が付き合ってもいいわよ。」

「いいのか?」

「ええ。」

「え? 陽香が俺に?」

俺はびつくりした。

まさか陽香が突然そんな発言するとは思っても見なかった。

「じゃあ、頼む。やり方は任せる。俺はいろいろ手続きがあるから

しばらく留守にする。

その間、多少なりとも使えるようになれよ、陽魔。」

ゼレナルはそういつて、虚空に消えた。

おそらくもとの世界に戻っていったのだろう。

俺の部屋には俺と陽香だけになった。

「じゃあ、私もこれで失礼するわ。陽魔、また明日学校でね。」

「ああ。だが、一体いつからはじめるんだ？」

「訓練のこと？それは夏休みからよ。もうすぐでしょ？」

そのときになつたらまた会いに来るわ。そのとき、陽魔も私に勉強教えてね。」

「勉強だと？」

「そうよ。わたしできないから。じゃあまたね。」

そういつて陽香は俺の家から出て行った。

俺、人に教えるの苦手なんだけどな

心の中でそう思いながら俺は明日の支度をした。

第九章 訓練

陽香が転校してきてからまもなく夏休みに入った。

夏休みつてのは楽しいだけの時間がずっと続くわけではない。

それを俺は夏休み序盤に思い知らされることになった。

夏休みに入って早々に陽香が俺の家に訪れた。

訪れるなりいった言葉は

「陽魔、こんにちは。早速、勉強教えてもらいにきたよ。」

だった。

「は？」

俺は、一瞬、頭が真っ白になった。

「だから、勉強だつて。昨日のこと、もう忘れちゃった？」

陽香は宿題を俺に見せ付けて言った。

昨日・・・そういえば

「明日、陽魔の家に行くから、そのとき、勉強教えてね。」

っていわれた気がする。

それを思い出した俺は

「あ、悪い。今思い出した。」

と、素直に言った。

「記憶力悪いのね、陽魔は。」

「そうか？」

陽香のあきれた声に俺は首をかしげる。

「まあ、いいわ。とにかくあがらせてもらっわよ。」

「あ、ああ。」

陽香は俺の家に即座に入っていた。

俺は俺の部屋に案内して、テーブルに勉強道具を置くよう指示した。

「分からないところがあったら言えよ。あと、俺、教えるの下手だからな。」

俺は陽香に向かって言った。

「分かったわ。」

陽香は言った。

それで俺たちは宿題を終わらすために励んだんだ。

陽香はちよくちよく俺にわからないといって聞いてきた。
そのつど俺が教えた。

俺の教え方で理解したのかどうか分からなかったが、
同じ問題には何回も質問はしてこなかった。

宿題の半分以上を一日で俺と陽香は終わらせた。

一日でこんなに終わらせるなんて・・・普通、無理だ・・・

そう思わざる終えないほどの量を俺と陽香はやってしまった。

我ながらにすごい集中力である。

「陽魔の教え方は下手じゃなかったわよ？理解できたし。」

「そうか？」

陽香は俺の教え方は下手じゃないといってくれた。

でもなんか妙に引っかかる。

理解できただけなのか？

俺はわかりやすいといってほしかったなと心の中で思いながら、

「ところで、どうするんだ？俺の訓練のほうは。」

と、話題を変えた。

もう夕方である。

「そうね、とりあえず能力開花からかしら？」

「能力開花？具体的にはどうやって？」

「陽魔の能力はどの部類にも当てはまるでしょう？私もそうだけど、特に当てはまるものを探す訓練をするの。」

そして自分の能力で最も得意とする能力を見つけるのよ。」

「その見つけ方は？」

「全部の部類の練習法を行うってのが一番手っ取り早いわ。」

とりあえず、妖、幽、鬼、の三つの属性の練習法を行うところからはじめましょうか。」

「どれが得意かすぐ分かるのか？」

「そうね。」

まあ、練習法って呼べるものじゃないけど、一つの属性に反応を示す水晶を使って調べるのよ。」

「水晶？」

「そうよ。」

一つの水晶に大まかに分けた一つの属性しか反応しないから結果的

には三つ用意するんだけどね。」

「水晶を使ってどうやって？」

「それは自分の中にある波動エネルギーを水晶に注ぎ込むのよ。
まだそれすらできないみたいだから、波動エネルギーを自分の外に
具現するところからだけど。」

「実際どうやって？」

「手と手の間をこぶしの大きさほど開けて手に力を集中させてイメージするの。」

「実際にやってあげる。」

陽香はそういつて実際にやって見せた。

陽香は説明どおりに手を構えた。

構えを取ってから波動エネルギーが具現化されるまでそんなにかからなかった。

そして、陽香の手と手の間に薄い紫色の光が生まれた。

その光こそが波動エネルギーだと分かった。

光を維持したまま、

「陽魔、背中を私に向けて・・・そのまま陽魔に私のはどうエネルギーを注ぎ込むから。」

注ぎ込めば訓練しだいですぐに陽魔も・・・具現することができる・・・

「

と、陽香はちよつと辛そうに言った。

俺は陽香の指示に従って背中を向けた。

「いくわよ。」

陽香が言ったと同時に、俺の背中から何かが入られたような感覚に陥った。

「！」

声にならないほど体中に違和感が襲って来る。

痛いわけじゃない。

でもなんかおかしい。

じきに違和感はおさまった。

違和感がおさまると同時に体中から力が湧き出てきた。

「な、なんなんなんだ、これはっ」

体から何かオーラみたいのが沸き起こる。

「それは・・・オーラよ。陽魔・・・それが体を包むようなイメージをして。集中して。」

陽香が言う。

俺は言われたとおりにイメージに集中した。

するとそのオーラは俺の体を包むようにしてとどまった。

「なんとか、開花は成功させたわね。後は具現化だわ。」

「具現化？」

陽香の声に思わず聞いた。

すると、俺の体を包んでいたオーラが突然消えた。

「なっ」

「集中力が切れたからよ。さて具現化法だけど、まずはイメージ練習よ。」

さっき私がやったようにするの。

まあ、それは明日ね。陽魔はイメージ練習を今日はやってね。最低一時間はやってほしいわ。

じゃあ、私は帰るわ。」

「あ、ああ。大丈夫か？顔色良くないぞ・・・って、おいっ！！」

俺が声をかけたと同時に立ち上がった陽香がふらついて倒れそうになる。

俺は急いで支えた。

「おい、大丈夫か？」

「・・・」

声をかけたが返事はない。

気を失った？

俺はそう思っ
て陽香のあごをく
いっと持ち上げ
ると、案の定、
気を失っていた。

おそらく、さつ
き、波動エネル
ギーを俺に注ぎ
込んだからだろ
う。

俺は陽香を抱え
ながら時計を見
た。

5時を過ぎてい
る。

どうしょうか？

俺、陽香の家、
知らない。

このまま、陽香
が意識を取り戻
すまで待つしか
ないのか？

とりあえず、俺
はリビングのソ
ファに陽香を寝
かせた。

相変わらず寝顔
は可愛い。

その後、俺は夕
食の用意をし始
めた。

下ごしらえが済
んでも、陽香は
意識を取り戻さ
ない。

時間は刻々と過
ぎていった。

第十章 夕食

陽香は俺が夕食を作り終えたところで意識を取り戻した。

回復が早い奴だな。

「大丈夫か？」

俺の声にはっとして陽香は起き上がる。

「へいき、よ・・・」

声からしてまだ調子が悪いみたいだ。

俺は窓から外を見た。

もう暗く、月が外をぼんやりと照らしていた。

こんな時刻に一人で陽香を帰らせるわけにはいかない。

「陽香、お前んちつてどこだ？」

「え？」

「教えるよ。俺が送ってやるからさ。」

「ひ、一人で帰れるわ。」

俺の言葉に驚きながらも断ろうとする陽香。

今の状態の陽香は一人で行かしちゃいけない。

「無理するなよ。困るぞ、俺は。道端で倒れた、なんて。」

「・・・」

俺は素直に自分が思ったことを言う。

陽香みたいなかawaii子が道端で倒れてるなんてところを他の男が見たら・・・

と、思うだけで怒りが込みあがってくる。

「俺が送るから住所教えろよ？」

「分かった。教えるわ。」

俺の言葉に不満ながらも一応承諾してくれた。

陽香、腹すいてないかな・・・？

「なあ、時間も時間だし、俺んちで夕食食べていかないか？」

戸惑いながら言う俺。

断られるかもしれない・・・所詮、俺の料理だからな。

だが料理はうまいはずだ。

何年も作ってきてるんだからな。

俺は料理に自信があった。

だが、それと同時に俺の味付けは陽香に合うかどうかという不安もあった。

「いいの？」

陽香は戸惑っているようだ。

俺は陽香と視線を合わせないようにしながら、

「いいぜ。陽香がいいならな。」

と、言った。

「・・・じゃあ、お言葉に甘えるわ。」

陽香は言った。

俺はリビングにあるテーブルに料理を並べる。

そして陽香のいるソファに近づき、手を差し伸べる。

「？」

陽香は俺のした行為の意味が分からないようだった。

分からないというよりリアクションに困ったという感じだったが。

「ほら。まだふらつくだろ？」

「・・・ええ。ありがとう。」

差し伸べた俺の手を陽香は戸惑いを見せたが手をとってくれた。

陽香の手と俺の手が触れた。

その瞬間、俺は顔が熱くなるのを感じた。

陽香の手は小さくわずかだがひんやり冷たい手だった。

でもその手が触れた瞬間、顔が、体中の体温が一気に上がったのを感じた。

どうなってんだ？

俺は落ち着きを取り戻しながら陽香の手を引きながらテーブルへ促した。

陽香を座らせて俺は陽香の向かいの席に座る。

そして夕食を食べ始めた。

一口、俺の料理を口にした陽香が

「・・・美味しい・・・」

と、呟いたのが聞こえた。

さつき落ち着きを取り戻したばかりなのにまた熱くなるのを感じた。

「そ、そうかあ？」

声がなぜか裏返る。

「え、ええ。とても。なんだかとてもあたたかい。」

「できたてだから、だろ？」

「そんなのじゃないの。言葉じゃ表現できない温かみが感じるの。」

「ふーん。ま、まあ、気に入ってくれたんならいいけど。」

料理の出来立てとかと違う、あたたかみ？

そんなの考えたことないな・・

まあ、陽香が気に入ったんなら別に文句はないけど。

その会話以外俺と陽香は全く話さなかった。

やがて夕食が食べ終わった。

そして俺は陽香に、

「行けるか？」

と、聞く。

「ええ。」

陽香は答える。

いつもより元気がない陽香に俺は不安を感じた。

不安を心の中に押し込んで俺と陽香は陽香の家に向かった。

俺たちの歩く道は月明かりに照らされている。

夜道を歩くのは久しぶりだな。

歩きながらそう思った。

俺の右隣には陽香がいる。

「その道を左。」

「次は・・・右。」

「その・・・まま・・・まっすぐ・・・」

陽香の声は言つたびに小さくなっていく。

俺がそのことに気づいたとき、右腕をとっさにつかまれた。

「陽香??」

なぜつかまれたのか分からず言ってしまう。

俺は陽香を見た。

すると陽香は俺の右腕に自分の腕を絡ませて下に俯いている。

「！」

陽香を見て声を上げそうになった。

そこには自分の目を疑うほどの事実があったからだった。

陽香が震えてる！？

自分の目を俺は疑った。

陽香のような強気な子が震えている。

その事実を今、たたきつけられていた。

なんでだ？なぜ、陽香のような奴が・・・嘘、だろ？

嘘だと思った。

だが、陽香の腕から俺の腕を通して震えがとても伝わってきた。

「陽香？」

俺はその場で立ち止まった。

「怖い」

「！」

初めて聞いた陽香の怯えた声に俺は驚く。

「何が怖いんだ？」

「・・・」

陽香には俺の声が伝わってるはずだ。
なのに返事がない。

陽香はいまだに震えている。

「怖いっ」

震えは声とともに上昇している。

俺は思わず陽香を抱きしめてしまった。

「っ！」

陽香は驚くような声を漏らす。

陽香が震えていて、怖いって言うておびえていることによって俺から、『抱きしめて守りたい』という衝動が沸き起こってしまった。

我慢できずにしてしまう。

何で俺・・・こんなこと・・・

自分でも分からない。

何なんだ、この気持ちはっ。

「陽香、何をそんなに怯えているんだ？」

「・・・」

「黙ってちゃ分からない。なんでだ？どうしてそんなに怯えているんだ？」

「・・・怖い・・・怖いっ・・・」

俺の言葉が届いていないかのような眩きを陽香は放つ。

俺はとりあえず陽香を放した。

「家はどこだ？」

一応聞く。

「い・・・え・・・」

「そうだ。ここからどう行けばいい？」

「・・・あの道を左。そこに・・・家が・・・ある。」

「そうか。」

陽香には俺の声は聞こえていることは分かった。

だが、震えは止まらず、腕も絡められたまま。

腕はこのままのほうがいいけど・・・震えは止めないと・・・

怯えている陽香は見たくない。

俺は絡められている腕を解き、陽香を抱き上げた。

「！」

驚く陽香にかまわず俺は歩き始める。

そして俺は道を左に曲がった。

そこに陽香の家があった。

妖鬼という札をかけている洋風の家が。

家を見て安心したのか、陽香の震えが徐々にとまっていく。

「ここでいいんだよね？」

思わず聞いてしまう。

「うん。もう・・・いいから。・・・おろして」

「あつ、わるい。」

謝って陽香をおろす。

陽香はおぼつかない足取りでドアの鍵を開ける。

「お、おい。大丈夫なのか？」

心配になって聞いてみる。

「平気だよ。ありがとね。じゃあまた明日。」

「あ、ああ。」

陽香は無理してそんな笑顔を残してドアの奥へと消えた。

あいつも・・・一人暮らしなんだよな・・・

不意に思ってしまった。

何でだろう？俺だってそうなのに。

俺は疑問と心の中から不思議と湧き出る不安を抱えて自分の家に帰った。

第十一章 過去の出来事

俺は陽香を家まで送った日の夜はなかなか眠ることができなかった。

寝不足のまま、陽香が来るまで待っていた。

待っていても来る気配はない。

あいつ、やっぱり調子が悪いんじゃないだろうか・

心配になって俺は陽香の家に向かう。

そういえば、訓練してないな。

そう思いながら、陽香に教えられた道を歩く。

家だけでなく、あいつの電話番号も教えてもらえばよかったな。

後悔しながら思う。

天気は快晴、雲ひとつない青空。

その景色を両目で見ているはずなのになぜか左目だけは違う。

そのことに驚いて思わず俺は道端に立ち止まった。

なんだ??これは?

前世の・・・過去??

まるで今、自分がその場にいるような感覚に陥った。

その風景は、建物の中で俺の前世がベットのようなところで寝ている誰かにタオルを額に当てているところだった。

その誰かは起き上がろうとするが体がふらつき倒れる。
前世がそいつを慌てて支える。

不安、心配。

俺の前世が思っていることなのに自分の感情のように思えてきて仕方がない。

俺は右目を閉じて左目でその光景を見入った。

『お、おい、香鈴。無理すんな。』

前世が言う。

香鈴??

俺はその名に聞き覚えがあった。

あつ！思い出した！！

香鈴って陽香の前世の奴だつ！！

俺は思い出した。

じゃあ、やっぱり・・・過去・・・なんだな。

ゼレナルが以前に言っていた。

「俺はあまり見たことがない」

と。

ゼレナルはあまり見たことがないといったただけであって、俺の前世のことは何も言わなかった。

ゼレナルは俺の前世 幽魔 と陽香の前世 香鈴 が接触していたってことを知っていたんじゃないかと、俺は思う。

あまり見たことがないだけで。

だから、俺に陽香と接触しろと言ってきたんだろう。

仮説を立てながら俺は過去の出来事に見入った。

『大丈夫・・・だって。そんなに心配しなくたって・・・』

香鈴がつらそうに前世に向かって言う。

心配に決まってるだろ。

前世の感情が痛いほど分かる。

『心配するさ。心配させたくなかったら早く風邪を治せ。』

前世が香鈴をベットに寝かせタオルを香鈴の額に当てながら言う。

『・・・心配かけてごめん・・・』

『いいさ。お互い様だろ？』

『あはは・・・そうかもね・・・』

香鈴は力なく笑った。

『もう・・・寝ろ。早く治してくれ。でないと・・・おれが・・・』

前世は辛そうに言う。

俺にはお前が必要なんだっ！

俺には・・・お前の存在がっ・・・！

前世の気持ちが流れ込んでくる。

そこで途絶えた。

俺は右目を空けた。

両目は同じ景色が写っている。

俺は陽香の家に向かって走り出した。

不安、心配。

前世の感情おもいが今も俺の中にはあった。

いや、違う。

これは俺の感情おもいだつ。

俺自身と前世の俺の想いが一つになって俺の心を埋め尽くす。

俺は心の中にある想い全てを開放し走り続けた。

そして、ようやく陽香の家に着いた。

第十二章 熱

俺はゴクツとつばを飲み込んだ。

女子の家に訪れるなんて生まれて初めて。

なんか異様に緊張する。

ドクン、ドクン。

心臓の音が高鳴る。

俺は思い切ってインターホンを押す。

ピンポーン

音が鳴り響く。

しかし、誰も出てこない。

やっぱり何かあったか？

不安になって俺は一步足を踏み出した。

キギィィ

金属の出すいやな音が足元から聞こえた。

俺は足元を見た。すると俺の足元には鍵が落ちていた。

ん？何でこんなところにあるんだ？

俺は周りを見渡してみた。

「！」

そういえば、ポストがあけたままだ。

ポストの中は空っぽ。

陽香が来たってことか？

ポストは空っぽで鍵がドアの前に落ちている。

こんなことってある？？

陽香ってそんな奴だったか？

いや、昨日のあいつならありえる。

てゆうことは、今はドアが開いてるってことか？

あきすに入られてもおかしくないぞっ

俺は恐る恐るドアノブに手をかける。

ガチャリ

やはり、ドアには鍵がかかっていなかった。

俺はドアから中へ入ってみた。
そして靴を脱ぎ、

「お、お邪魔しますっ」

と、小声で言った。

中は明るい。

俺は、

「陽香ー、いるかー？陽香ー」

と叫びながら家の中をうろろする。

すると、

「ん、ようまあ・・・？」

と、ひょっこり顔を出してふらふらした足取りで近づいてくる陽香がいた。

「陽香！！」

格好は昨日のまま。だが、昨日より状態が悪化していることは顔色と声から分かった。

俺は叫んだ。

陽香は突如その場に座り込んだ。

「お、おいつ!!」

俺は急いで駆け寄った。

「なあんでえ・・・ここおにい・・・?」

かろうじて聞こえるが、なんだかろれつが回っていない。

陽香は俺を見上げた。

熱っぽい目で見つめてくる。

「何でって、言われても。ただ陽香が心配できただけなんだけど。」

呟きながら、俺は陽香の背に触れる。

服からでも熱が伝わってくる。

陽香の背を片方で支え、もう片方の手で陽香の額に触れた。

「あつっ」

思わず叫んだ。

こりゃあやばい。高熱だ。

「お、お前っ! 熱あるじゃんか。どうして寝てないんだっ!!」

俺は怒鳴った。

「はぁ・・・はぁ・・・」

陽香は俺の声が届いてないらしく、呼吸を乱していた。

意識も朦朧としてるみたいだ。

俺はひょいっと陽香を抱き上げた。

「・・・」

熱で意識が薄れている陽香は抱き上げられても全く反応を示さない。

これからどうする？

陽香の家にあるもので高熱をどうにかできなさそうだし・

俺の家に運ぶしかないか・・・？

俺は考えた末、俺の家に運ぶこととした。

急いで靴を履き、一応落ちていた鍵でドアに鍵をかけ、陽香を抱え走って俺の家まで運んだ。

抱き上げた格好は走りにくいから肩にかつぐ格好で走った。

走っている反動で多少揺れただろうがそこは気にしない方向で。

とりあえず俺んちにあるソファに寝かせた。

そのあと、居間から毛布を持ってきて陽香にかける。

氷水で濡らしたタオル用意して陽香の額に当てる。

これで何とか対処できた。

「はぁ、はぁ」

陽香の呼吸が聞こえる。

よほどつらいようだ。

俺はタオルをいつでも帰れるように、氷水を桶に入れといた。

俺は陽香の寝るソファの下でソファにもたれるように腰掛けた。

ね・・・むい・・・

動いたから・・・か・・・？

寝不足だった・・・せい・・・かぁ・・・

重いまぶたをゆっくり閉ざして俺はすやすや眠りについた。

第十三章 過去と同じ出来事

俺は腹がすいて目が覚めた。

「ふあああ。」

俺はあくびを一つかまして起き上がる。

時計を見たら12時を過ぎていた。

何か作るか・・

そう思って立ち上がったそのとき、

「うつ・・うつ・・うつう・・」

と、陽香のうなされた声が聞こえた。

思わず陽香のほうを見る。

うなされた陽香も・・ぐつとくる。

思っではならないことを平気で心の中で呟く。

俺は陽香の額に手を伸ばす。

さっきより熱が上がってはないだろうな？

額に手が触れた。

さつきは燃えるような熱さだったが、今はほんのりとしたでも暖かさが残っていた。

熱は下がったようだな。

悪夢でも見ているようになされかただ。

陽香の回復は予想以上に早い。

今までもそのことに驚かされている。

俺は熱がある陽香にも食べれるような料理を作ることにした。

トントントントン、ジュージュー、コトコトコトコト

手際よく進めていった。

そして全部作り終える。

俺は陽香の額においたタオルを変えようと陽香に近づく。

そして陽香のタオルに俺の手が触れたとき、ぱつと陽香が起き上がり、手をつかまれた。

「!？」

俺は突然のことで混乱した。

「ハア、ハア、ハア」

陽香は肩で息をしていた。

そして俺をまっすぐ見つめてくる。つかんだ手を離さないと言っても言うように。

陽香の苦しそうな、つらそうな表情を俺は見た瞬間、俺は冷静さを取り戻した。

「陽香っ、まだねてろよっ。お前・・・熱がまだっ・・・!？」

俺の言葉をさえぎるように陽香が俺に抱きついた。

陽香が俺に倒れる形で抱きついてきたからたまらずソファから落っこちた。

もちろん俺が下で陽香は上。

床にはじゅうたんを敷いてないから俺は思いっきり床にたたきつけられた。

だが、その負担よりも陽香に抱きつかれた衝撃のほうが俺には強かった。

「陽香??」

俺は混乱状態に陥った。

よよよ・・・よ、陽香っ!

なんで!?!おまえ・・・いったいなにを・・・!?

さっきの冷静さはもう碎けて散っていったかのようにだった。

「!?!?!」

「・・・」

「!?!?!」

「・・・」

「・・・」

しばらくこの状態が続いてようやく俺は落ち着いた。

俺は落ち着いたが、陽香の様子がおかしい。

「どうした?」

思わず聞いてみる。

「ゆめ」

「ん?」

俺に陽香が抱きつき今は俺に陽香が顔をうずめたような格好にいる。
そんな中で陽香は呟いたのであった。

「ゆめをみた・・・」

「怖かったのか?」

俺がそう聞いたとき、陽香が震え始めた。

「陽香？」

陽香が俺の背中に手を伸ばす。

何の夢を見たかは知らんが悪夢だったことには違いない。

俺は陽香の頭をなでてやった。

しばらくで続けて俺は陽香が落ち着いたと判断したとき陽香をゆっくり引き離した。

そして陽香の額に手を当てる。

急に動いたせいか、また熱が上がっている。

「まだ熱がある。まだ寝てろ、な？」

「もう・・・大丈夫・・・」

「無理してるだろ？無理すんなよ？」

「・・・心配しなくたって・・・」

「するさ。そんな状態だと俺が困る。」

俺は言った。

無理してよけい体を壊されると心配で仕方なくて・・・いてもたってもいられないんだよっ

心の中で叫んだ。

「心配かけたくないなら早く治せよ、な？」

「・・・」

俺は何も答えない陽香を再びソファに寝かせた。

「・・・ごめん・・・」

「いいさ。・・・」

俺はそういいながら毛布をかけ直す。

なんか、前世でやった俺たちの出来事と同じような感じだなあ。

と思いながら俺は陽香を見つめた。

「料理食べれるか？」

俺がそういたとき陽香がまた起き上がろうとした。

「お、起き上がらなくていいつ。お、俺が運ぶから。」

そういつて俺は近くのテーブルまで運んだ。

そして上半身を無理に起こした陽香の前に持っていく。

「無理すんなよ？」

そついいながら俺は近くのいすに座った。

すると陽香は俺の料理をゆっくり口にした。

「美味しい」

「そうか？なら安心だな。」

陽香は美味しいといって食べてくれた。

ちよつとうれしくてまともに陽香の顔が見れなかった俺であった。

第十四章 波動の光

俺と陽香は昼食を食べ終えた。

陽香には そのまま寝てろ といって

自分は波動エネルギー具現化練習を開始した。

あぐらをかいて両手を前に突き出し拳の大きさほど間を空けて集中する。

「・・・・・・・・」

しばらくその状態で集中していたが波動エネルギーは全く出てこない。

あっ！

俺はあることを思い出した。

集中するだけじゃないんだっ。イメージしないと。

っていつでもどんな風にイメージすればいいんだ？？

悩みに悩んだ結果俺は陽香のした動作全てをそのままイメージした。

そのことだけに集中して雑念を追い払った。

「・・・・・・・・」

「・・・!!」

しばらく続けると、俺の両手の狭間に青い光が輝き始めた。
思わず声を出すところだった。

（でたっ！ようやくっ・・・）

心の中で叫んだ。

「・・・」

俺が今出したのは具現化した波動エネルギーだと思う。
でもこの後どうすればいい？

頼みの綱（いしな）は隣にあるソファで寝ている。
と、いうより寝かせている。

一体どうすれば・・・？

「！」

そういえば、陽香が言っていた。

「水晶に注ぎ込む」

と。

注ぎ込むって言ってたけどどうやるんだ？

波動エネルギー《これ》を自在に動かせるようになって言いたいのか・・・？

結構・・・無茶な気が・・・

そんな諦めの言葉が脳裏をよぎる。

陽香にもできたことだ、俺もできるはず。

頭を振って脳裏から言葉を追い払い自分に

できるできるできるできるできる・・・

と、暗示をかける。

傍から見たら怖いかもしんない。

うん、きつと・・・

そう思いながらも暗示をかけて集中する。

注ぎ込むって言うんだから伸ばしたり縮めたりできないとだめか・・・？

多少無理があつたが頑張つてイメージする。

漫画やアニメを見ていればイメージも楽にできた。

イメージしたらすぐに伸ばし縮みできた。

想像力って・・・スバラシイ

不意にそう思った。

あゝヤバイ。どんどん狂った《あっち》の世界へ行っちゃいそう。

暗示って・・・オソロシイ

俺は・・・もう無理っ。

「あー、ツカレタ〜。」

青い光は、^{エネルギー}ぱつと消えた。

言葉がなんかおかしい。

暗示の影響力が・・・？

まあ、とにかくできてよかった。
第一段階は無事できたな。

だが・・・

「ふー」

こんなにも疲れると思わなかった。

体中に疲労と眠気が駆け巡っているようだった。

これで倒れない人ってすごいよな。いや、人じゃないけど・・・

そう思いながら俺はその場に倒れた。

すやすや寝息を立てて眠りの世界に落ちていった。

第十五章 第一段階突破

あれから陽香も目が覚めて、今は夕食を食べている。

夕食が食べ終わったら第一段階、波動エネルギー具現化・・・を見せるつもりである。

陽香の具合は時間が経過するたびに良くなっていった。
そのことに疑問を持って思わず聞いてみると・・・

「なあ、何でそんなに回復が早いんだ？」

「回復？そんなに早いのか？私って・・・」

「ああ。お前、朝は高熱だしまくってたってのに今はもうすっかり元気じゃん。」

「ふーん。まあ、早くて当たり前かも。私も、妖、幽、鬼、の全ての部類に入るし。」

「そうゆうものなのか？」

「そうゆうものだと思うわ。」

という会話の流れだったから、いまいち答えが分からなかった。

とりあえず、自分の持つ力のおかげらしいことは分かった。

夕食を済ませた後、俺は陽香に波動エネルギーを見せた。

さっきのイメージとコツを思い出して動作を行う。

今度はさっきよりも早くはどうエネルギーを具現化させることができた。

そのことに陽香は驚いて

「陽魔・・あなたって飲み込みが早いね。あっという間に第一段階突破じゃないの。」

と、驚愕の声を上げた。

「そんなことないさ。陽香の教え方が良かったんだよ。」

実際、陽香の教え方は良かった。

俺がすぐにできたのもそのおかげだと俺は思う。

「私はコツと動作を教えただけよ。これなら次の段階もできそうね。」

陽香は言った。

「次の段階？」

「そうよ。水晶にはどうエネルギーを注ぎ込むのよ。あなたなら明日中にできるわ。」

「明日？」

「そうよ。いけない？」

「いや別にいいけど。持ってるのかよ？その水晶を。」

「水晶のことですってたのね。あるわよ。普通のでいいもの。」

「普通のでいいんだ。」

「ええ。エネルギーに反応したときを見て判断するから。」

「そうか。分かった。じゃあ、明日にやろう。」

「そうね。」

こうした会話で第二段階をすることが決定した。

その後、陽香は帰ろうとしたから俺は引き止めた。

「俺が送ってくよ。」

「もしかして心配してくれてるの？」

陽香がからかうように言う。

俺は陽香から視線をはずして、

「べ、別に。も、もう帰るんだろ？さっさと行くぞ。」

といって靴を履いた。

「照れてる？・・・ふふふ」

陽香はくすくす笑った。

「っーっー」

俺は頬が熱くなるのを感じた。

そんなことがあったけど、帰り道はすんなり送ることができた。

帰り道は前のようなしぐさを陽香はしなかった。
だが、甘えるような声を出してねだってきた。

「手っつなご？」

「えっ」

「ね、いいでしょ？」

そんな甘い声を出されたら何も言い返せない。

俺は陽香と目を合わせず手を差し出した。

目を合わせたら卒倒しそうだったからだ。

陽香は俺の手に自分の手を置く。

手と手が触れた瞬間、俺はまた頬が熱くなったのを感じた。

さつきとは違う熱さ。

恥ずかしくて顔を見せれない。

その感情が何なのかは俺は知らなかった。

俺だけじゃなく言ってきた本人も俺と同じような心境にいると触れてみて分かった。

陽香の手が熱い。

熱の熱さではない熱さ。

その熱さに俺は落ち着きを取り戻せないままぎこちなく歩いた。

そのせいか、帰り道がとても短く感じた。

まだいたい。

そんな風に思ってしまうときがあった。

明日にまた会えるのに。

なんだろう？この気持ち。

陽香の家の玄関に来たとき俺は陽香から手を放そうとした。

「ん？」

放そうと力を入れても陽香は放そうとはしてくれない。

逆に力を入れる。

「どうした？陽香・・・」

思わず聞いてみる。

「別に・・・ただ・・・」

「ただ？」

陽香をせかすように言うと、

「ううん。なんでもないわ。じゃあ、また明日ね。」

といってすんなり手を放した。

「ああ。また明日な。」

俺は家の中に陽香が入るのを確認してから帰った。

陽香・・・いつもとなんか違ったな・・・

心の奥でそう感じながら帰ったのだった。

第十六章 二重人格？

翌日、陽香は朝からやってきた。

しかしそのことに気づかず俺は朝に弱くしかも昨日の疲れが残っていたから爆睡してた。

ピンポーン

何かなったのが聞こえた。

眠いからそんなの無視。

ピンポンピンポンピンポン！！！！

連続でインターホンを鳴らす音が・・・

あーうざいつ！

俺は布団の中にもぐりこんだ。

・・・しーん・・・

あ・・・止まった。

諦めたかな・・・？

安心したとき

ガチャガチャ

ん？

何だこの音？

ガチャリ

え？

キー・・・ガチャン

誰が入ってきた音？

えー！？マジっ！！

かぎ掛けたよ。ちゃんとっ！！

なのにどうして・・・

そんな風に思っていると、足音がしてきた。

その足音はだんだん俺のベットに近づいてきて

「陽魔、起きてるでしょ？」

と上からいつてきた。

その声・・・陽香か・・・？

「んっ・・・どうやって入ってきたんだ？俺、かぎ掛けたはずだけど・
・？」

「やっぱり起きてたんだ。私を無視するとはいい度胸だわ。」

俺の質問には答えず静かに言う陽香。

こ、怖いっ。今日の陽香・・・怒ってないか・・・？

「こんな朝早く来るとは思っても見なかったんだ。ところでどうやってきたんだよっ？」

話をそらさせようと聞く。

「あ、鍵のこと？かかったから開けただけなんだけど？」

平然と言う。

俺はむくつと起き上がってあくびをかましながら、

「どうやって？」

と、聞いた。

「それは、ひ・み・つ。」

陽香はひ・み・つというところで人差し指を自分の唇に当てた。

ひ・み・つ のしぐさが妙にかわいかった。

「なんで？」

「そんなことより、待たせたんだから朝ごはんぐらい食べさせてくれるわよね？」

え・勝手に朝早く来たのにそんなセリフよく言えるよな・・・

「いいけど。食べてこなかったのかよ？」

「ええ。食べさせてくれるかなって思ってた。」

「・・・」

「ね？いいでしょ？？」

上目遣いで聞いてくる。

ああ〜かわいい。

朝は低血圧でボーとしているが今のしぐさで一気に血圧が上がった気がした。

「ああ。分かったからリビングで待っててくれ。」

「分かったわ。待ってるから早く来てねっ。」

そう言っつて陽香はリビングのほうに行った。

絶対、二重人格の持ち主だ・・・あれは・・・
威張ってるなっと思ったら急に甘えてくるし・・・

あんなふうによく性格キャラチェンジできるよな。
でもあれは両方とも陽香だよな。
俺には到底無理だけど。

そう思いながらがんばって早く着替えた。

そしてリビングに向かう。

「今から作るからな。」

そういつて作り始める。

「できるだけ早くね。」

分かってるって。

作ったのはサンドイッチと玉子焼き。

簡単に時間短縮バランスのとれたいいメニューだ。

「今できたぞ。」

そういつてテーブルに置く。

「どうぞ。」

そういつて促す。

「ありがとう。じゃあ、いただくわ。」

そう言って陽香は食べ始める。

おいしそうに食べる陽香の姿はかわいかった。

さっきからかわいいの連発だが、本当に惚れるくらいかわいいんだから仕方ない。

そんなかわいい陽香をチラッと顔を盗み見ながら俺も朝食を食べ始めた。

第十六章 二重人格？（後書き）

朝食のシーンだけで終わってしまってすみません。

第十七章 水晶

朝食が食べ終わり本題に入った。

第二段階は自分の能力を知ること。

それが今始まろうとしていた。

「じゃあ、今からはじめるわよ。」

陽香は水晶を6つ用意した。

「ああ。」

俺は気を引き締めた。

俺の能力・・・

緊張してきた・・・

陽香が俺に説明しようとしたが、はー とため息をついた。

「陽魔・・・そんなに緊張しなくていいからね？落ち着いて・・・体が固まっているわ。」

「あ、ああ。」

見破られたか・・・。

俺は リラックス、リラックス と呟いて深呼吸した。

「じゃあ、見本見せるからね？よく見てるのよ？」

「ああ。」

陽香が一つの水晶に波動エネルギーを注ぎ込んだ。

注ぎ込まれたとき、水晶は淡いか輝きを放った。

そして・・・薄い煙みたいなものが水晶の中で動き回って何かの形を描いた。

徐々にその形は完成に近づいている。

少し完成までに時間がかかった。

といってもそんなにたっていないが。

描かれたものは・・・弓・・・？

「これ・・・弓か・・・？」

「そうよ。これは弓。この水晶は 妖・幽・鬼 の中の 鬼 に反応する水晶よ。」

その鬼の中の部類まで描いてくれるの。」

陽香が説明してくれた。

なるほど、そうか。

俺たちはどの部類も当てはまるから・・・

「じゃあ、陽香は鬼の能力は弓に値するんだな？」

「そうよ。じゃあ二つ目ね。」

陽香は二つ目の水晶に波動エネルギーを注ぎ込んだ。

注ぎ込まれた水晶はこれまた淡い輝きを放った。

輝きが失われた直後、煙のような霧に包まれまた何かを描こうとした。

だが、その煙のような霧は一向に強く濃くなっていくだけ。

だが、時間をしばらく置くと霧の中に大きな弧を描いた。

なんだ・・・？こんなあやふやなもの・・・一体何を表しているんだ？

「何を表しているかさっぱり分らないと言う風な顔をしてるわね。これは 隠 を現しているの。」

「隠？」

隠？隠すって事か？

「そうよ。まだ分からない？じゃあヒントを教えてあげるわ。」

私、転校してきた初日にあなた以外誰もよっては来なかったでしょ？

陽香はヒントを教えてくれた。

そのヒントで俺は確信がもてた。

「隠すって事か？そこに存在してるし見えるけどけど近寄せないっ

て感じて。」

俺のいった言葉に陽香は微笑んだ。

「正解よ。文字通り 隠す 近寄せない こと。」

この水晶は 幽 の反応とその中の部類を描き出すわ。私は隠。

幽 は操る能力の部類だけどなぜ隠なのか・それはね、私の能力の土台は霧だからよ。

姿を隠すことも・見えない壁、気まずい空気にすることができ・それが霧の隠。

さつき、鬼 の水晶の煙の霧が薄かったのは私の能力の中で一番不得意とするのが鬼だからよ。」

「だから・はつきりしない描かれ方だったんだな。」

「といっても並みの相手なら負けないわ。

私の鬼の能力 弓 は相手に向かって力を一点に集中する攻撃だもの。」

「そうか。俺は 鬼が一番強いと言ってたが・なんだろうな・・

」

「それは後で分かるわ。次は 妖 の水晶ね。」

陽香はそう言って注ぎ込んだ。

水晶はまばゆい輝きを放った。

鬼でも幽でもこんなにまばゆい光ではなかったと言うほど比べられないくらいすごく輝きを放った。

そして輝きは失われ水晶には 水・霧 という文字がはつきりと映し出された。

絵ではない。どの水晶よりも早く映し出された。

「水・霧・・・。」

「水・霧・・・妖の中で最も優れている系統。私は 水 より霧の方が好きだけどね。」

俺の呟きに陽香は答える。

そう言って静かに笑う。

でも俺は・・・俺には・・・悲しく笑っているようでしか見えなかった。

少し短い沈黙・・・

「じゃ、じゃあ、やって見せて。まずは 幽 からよ。」

そう言って 幽 の水晶を指し示す。

「分かった。やってみる。」

俺はそう言って波動を出すことに集中した。

波動を具現化したらそのまま水晶へ。

俺の波動エネルギーが水晶に注ぎ込まれた。注ぎ込まれた水晶は淡く薄い輝きを放った。

そして俺の波動エネルギーはその中に青い煙となって動き出す。
おれの青い煙が描いたものは・・・

歯車？

青い煙で描かれたのは二つの歯車だった。
薄い煙だったのにはつきり映し出されている。

「歯車・・・？一体なんの能力なんだ・・・？」

思わず呟く。

「歯車・・・は 時 を現している。

あんなに薄い輝きだったのに、こんな強力な能力だなんて驚きだわ。
」

「 時 ？すごいのか？それって・・・」

「ええ。陽魔、前になかった？時間が止まったかのような・・・いや、景色がとまったのは・・・」

そういえば・・・前世の記憶（その一部の破片）が戻る前に・・・

「ああ、あった。一回だけだが。」

「強力な理由が分かったわ。それは自分が危機に陥ったとき発動する潜在能力のようなものなのよ。」

「潜在能力？」

「そうよ。自分の中に眠っている力のこと。
陽魔、その一回以来時間が止まったようなこと起こらなかったでしょ？」

「ああ。そのとき以来ないな。」

「あなたの 幽 の能力は 時 。そのことはよく分かったわ。
その力は稀に・・・いや、自分が危機に陥ったときしか扱えないと思
つていて。」

「ああ。だが、もし普段つかったらどうなる？」

「発動はしないかもしれない。発動してもそのときの消費は激しい
わ。」

その辺はあなたの努力次第だけど。私は稀に起こる力に頼るほど弱
い力はいらないわ。

さあ、次よ。次は 妖 。やってみて。」

「ああ。わかった。」

おれは再び波動を出して水晶に注ぎ込む。

水晶は淡い輝きを放って、文字を映し出した。

風・炎・刃

この三つの文字が・・・

「風・炎・刃・・・」

「三つね。あなた、空、飛べたでしょ？」

「ああ。二回ほどな。」

「私も飛べるのよ。それは基礎だからいいけど。陽魔はそれ以上に扱えるみたいね。」

でも・・・炎のほうは・・・どういふことかしら？何か心当たりない？」

心当たり？

そんなもの・・・ない、な・・・

あ、いや・・・一つあった。

「心当たりと言うほどじゃないが・・・」

「あるの？教えて。」

「俺、料理してる最中な、炎がこっちのほうに強くきてほしい、とか、過激にとか、心の中で思うと何も調節してないのに思い通りになるんだ。」

俺は素直に言った。

ありのままの事実を・・・。

「そう。だったら、文字に出る理由が分かったわ。じゃあ最後、鬼ね。」

「ああ。やってみる。」

そついつて俺は水晶に注ぎ込んだ。

そして水晶は眩い輝きを放った。
輝きが失った後、俺の波動は何かを描き出した。

剣

「剣だよな？」

「そうね。でも、普通の剣じゃないわ。周りに龍と炎が・・描かれてる。」

「・・さっきの歯車を覚えてる？二つの歯車を・・。あれも何か、龍と関係があるかもしれない。
ねえ、陽魔。あなたって動物に好かれるタイプ、かしら？」

かもしれない。

「かも、な。」

「二つが重なっているときはね、他の存在を表すの。幽の場合に現れたから生き物かと思って。」

「そうか。それで聞いたんだな。」

「そうよ。これで全部かったわね。・・じゃあ早速、明日から訓練開始ね。」

「え？明日！？」

「といっても体力づくりよ。これには体力がほしいからね。精神力は体力とつながってるわ。」

私もやるから、明日から体力づくり開始、よう！」

――開始、よう！

の時に俺に陽香はウインクしてきた。

可愛い・・

一瞬見入ってしまった。

だが、その後、果てしない憂鬱間が襲ってきた。

いやだ、俺、運動は得意だが、持久（長い間運動する・体力たくさんほしい運動）系は苦手なんだ」。

そう思いながらも陽香の顔を見てると

憂鬱なことがこの先あったとしても乗り越えられる・・前向きな考え方ができるかもしれない

と、思えてしまう。

思わずにはいられなくなる。

たぶんこの先、何度もそう思うのだろうなと思いながらも俺は

「ああ、わかったよ。明日から体力づくりだな。」

と言った。

第十七章 水晶（後書き）

自分で書いてて能力とかがごちゃごちゃになってきました。
整理して能力などの紹介を次回かせてもらいます。
良かったら感想などをもらえるとうれしいです。

第十八章 キャラクター紹介&能力講座（陽香先生の説明編）

キャラクター紹介

では、作者の私がキャラクター紹介やつちやいます。

主人公 陽魔 前世・・幽魔

簡単に言つと頼まれたら断れないタイプ。Mっぽい人。

暗すぎない明るく生きようとがんばるタイプ。

でもがんばるだけで実行したためしがない。

冷静だと一見思うが冷静な奴ではない。

一度パニックに陥るとなかなか冷静に考えることができなくなる。

そんな主人公。

サブ主人公 陽香 前世・・香鈴

はつきり言つと仕切りたがる仕切りやさん。

陽魔君をいじるのが大好きな^{サド}Sっぽい人。

自分が一番つて感じの雰囲気だしまくりの陽香さんにもかわいい一面あり。

そんな人です。

登場人物 ゼレナル

陽魔君の前世の幽魔の戦友である。

いつも冷静沈着で言葉が ツンツン してるけど結構 照れている

一面もある。

はつきり言っと ツンデレ キャラです。
言葉は ツンツン してるけど 照れてるな って思うような言葉
があります。

登場人物 ゼレラルーデ

ゼレナルさんの幼馴染でお気楽キャラのゼレラルーデさん。ゼルデ
というあだ名もあります。

小さいころからゼレナルさんをはからかって怒らせては遊ぶ人。

この人もSかも。

でもなんだかんだいってゼレナルを大切にしています。

のんきなキャラを演出しまくりのゼレラルーデさんも結構鋭い感
持っています。

どうです？共感できたところありませんか？

私のスーパーでハイレベルな、いたって完璧のキャラクター紹介に
ちよっぴり反論を持っているキャラクターさん達がいるんでその人
たちの意見聞いてあげてください。

陽魔「俺、そんなにM？」

うん、絶対、M。

陽香「私って仕切りやさん！？そんなんじゃないわ。でも陽魔をい
じるのは好きかも。」

でしょう？

ゼレナル「ツンデレって何だ？？はつきり言っとくが俺は照れた覚えはない。」

ツンデレ 知らないの！？はつきり言っとゼレナルのキャラ自体がツンデレなんだけど・・・。

ゼルデ「えっ僕ってS！？えー。ただ単にゼレナルちゃんをからかうのが好きなだけなんだけど。」

それがS。

あー、ちよっぴりどころじゃないね。一体どこがおかしいのかな？

『全部』「だ！」「よ。」「だね、うんうん。」

『全部』の語尾が上を書いてあるとおり。

尚、「だ！！」は陽魔君とゼレナルさんの語尾です。
あとは分かるよね？

まあそんなことより、

『そんなこと！？』

うん。そんなこと。

それでそんなことより、

「陽香さん、陽魔君に能力のこと説明して下さい。」

「えっ、なんで？」

「俺、いまいちわからなくて。頼む。」

「わかったわ。じゃあ説明してあげるわ。よく聞くのよ？」

「ああ。」

「じゃあ、妖幽鬼 からね。時々質問するから答えてよ？」

「ああ」

「じゃあ早速。妖幽鬼は能力を持っている。
能力を大きく分けると三つあって、その三つを答えなさい。」

「えーと、妖 幽 鬼 の三つだ。」

「正解。じゃあその能力はどんな能力？」

「はあ？そこまでしらねえよ。」

「わかったわ、じゃあ教えてあげる。」

妖 は 呪文を唱えて発動させる能力 よ。

つまり、魔法 ね。

幽 は ものを操る力のことよ。ものは存在しているものことよ。
そのまんまで 操る能力 でいいわ。

鬼 は 自分に合う武器を使うための潜在能力と潜在意識。

つまり 自分に合う武器使用のための力。

ここまでわかった？」

「ああ。つまり、妖 は魔法で 幽 は操るで 鬼 は武器を使う

ための力 でいいんだろ？」

「そうよ。じゃあ次よ。次は普通の妖幽鬼の能力のことについてよ。」

分かりやすい説明手順だね。

「ふむ。」

「普通の妖幽鬼は部類を三つに大きく分けたうちの一つの能力しか使えないの。」

たとえばそれが 妖 だとするわよ。

妖 を持つ妖幽鬼は他の能力を使えるようにするためにはとても困難なの。

はつきり言ってそれは無理に等しいわ。」

「なぜだ？」

「だって普通の妖幽鬼だからだもの。」

自分の能力は遺伝と自分の素質がなければ増やすことなんて無理よ。でもね、長い長い時間をかければもう一つは何とかできるようになるわ。」

「え？どうして？」

「それは能力同士の関係にかかわっているの。」

妖は魔法。幽は操る。鬼は武器使用の力。

何か仲間はずれができない？」

「仲間はずれ？」

「そうよ。答えはね、鬼よ。理由はいたって単純、妖と幽は似ているから。それだけよ。」

「だからね、妖の持ち主は がんばれば、幽 をてにいれられるの。」

「逆も同じか？」

「ええそうね。幽の持ち主なら妖は手に入れられるわ。だから 鬼は手に入れられないのよ。」

「じゃあ鬼の場合は？」

「鬼の場合は 妖 ね。なぜなら幽の方が技量も素質もほしいからなのよ。」

「そういう能力同士の関係が能力得とくにかかわってきているの。ここまでは理解したかしら？」

「ああ。」

「なるほど、なるほど。いい説明だね。」

「じゃあ私たちの特別な存在を説明するわ。」

「全部の部類に当てはまるからって得意不得意があるのよ。」

「それはさっき言った通り能力の関係にかかわっているから。」

「陽魔は覚えてる？妖の水晶に映し出された文字を。」

「ああ。」

「その文字は自分の能力の中心の文字よ。あの文字を のつりよくちゅうじ 能力柱字 っていうの。」

「能力柱字？」

「そう。字のごとく、能力の柱となる文字よ。あの文字が自分の能力得とくの中心よ。」

能力柱字が中心となって能力の部類の関係がかわってくるの。

私の場合は水・霧。でも私は 妖の中で分ける部類全部をやるうと思えば使用することは可能よ。

なんだて一番得意な能力の部類なのだから。

そうは言ってもむりがあるけど。

水・霧と対立関係にある 妖 の中の 炎・晴 は基礎しかできないわ。

基礎しかできないと言ったけれど、それでも十分なのよ。

私は 妖 の保持者だから。

その辺は理解した？」

「うん。ちよつとごちゃごちゃしてきた。」

うん。ごちゃごちゃで分かりにくいね。

「じゃあ簡単に言っわ。」

妖の能力に反応する水晶に映し出される文字は能力の柱となる文字を能力柱字。

これが一つ。

能力柱字が自分の能力の中心となって能力の関係が成立する。

これが二つ。

三つに分かれた中で一番得意の能力でも、その中で分類されて自分の文字と対立関係の能力はある程度でしか使えない。

これで全部。

理解した？」

「ああ。サンキュな。」

「これで大体は説明し終わったわ。」

「ああ、もういいぜ。」

ふー。やっと終わりました。

ずいぶん長くなったけれど皆さん分かったかな？
作者と陽魔君は分かったみたい。

じゃあ、これにて、キャラクター紹介&能力講座 終了。

ありがとうございました。

第十八章 キャラクター紹介&能力講座（陽香先生の説明編）（後書き）

長くなりました。

これでも分からない方はいつてください。
教えます。

じゃあ、次回もよろしくお願いします。

第十九章 体力づくり

翌朝、陽香がきた。

「陽魔、おはよ。じゃあ早速体力づくりスタートよ。まずは町内マラソン、10分間。」

「えー！？」

「不満そうね。だったら増やす？」

「増やすな。これ以上・・・頼むから。」

もう、10分間でいいです・・・。

心の中で俺はしくしく泣いた。

そしてマラソン準備。

で、よいスタート。

スッスッハ、ハ。スッスッハ、ハ。

二回吸って二回吐く。

うわーきつい。

・・・10分後。

はぁーはぁーゼーゼー。

きつい。もうだめだー

俺は家に入ってすぐにソファにくつろぎに言った。

「すっずしー。」

「・・・体力ないのね。陽魔は・・・まあいいわ。
少し休憩したら波動エネルギー保持練習に入るから。」

う、まだやるのか？

「わ、わかった。」

そう言っただけをぐつと飲む。

おいしー。

その後、ソファにくつろいだ。

疲労感と脱力感が全身を駆け巡る。

俺は疲れのせいか眠くなってまぶたを閉じた。
俺はあっという間に寝てしまったのだった。

「・・・寝てる・・・。」

陽香は呟いて陽魔の寝顔に見入った。

寝顔は・・・幼い子供のような。

陽香は陽魔の頬に触れた。

そして・・・陽香は顔を近づけ、唇をあわす。

そしてしばらくしないうちに放す。

何でしちゃったの？私・・・

自分に問う。

自分でも分からなかった。

何？？この気持ち・・・

陽香が陽魔の頬に触れたとき陽魔は起きていた。

急に目が覚めたと思わせれば陽香の驚いた顔を見れるかも

そう思ったのだった。

だが、キスされて悩んだのだった。

いま・・・起きたほうがいい？？
それともこのまま知らない振り？？

二つの選択肢を悩んでいるうちに唇を離された。

そして、起きようかどうしようか迷っているとき

「陽魔、起きて。訓練始めるわ。」

「ん・・・あ、俺寝てたのか。」

「そうよ。」

「わかった。」

ふああああ

とあくびして立ち上がる。

「どうすんの？」

「波動エネルギーを出して能力に変化させて維持練習。」

「どうやって？」

「能力っていつても 妖 の練習しか使用がないから、イメージ&維持。」

それは私の今からやるのを見てればいいわ。そして自分で覚えて。」

「ああ。」

陽香は波動をだして水に変化させた。

「こうやって維持するの。私は水に具現化させたけど、あなたは炎は危ないから、風ね。」

小さな竜巻を思い浮かべてやって御覧なさい。」

「ああ。」

うなずいて言われたとおりにやってみる。

最初はうまくできなかった。

でもやるうちにコツがつかめてある程度はできるようになった。

「上達が早いのにには驚いたわ。」

陽香もそういつて驚いた。

長時間維持は結構疲れた。

今はだるくて意識が朦朧としてた。

「これを・・・毎日やるから覚悟しなさい。」

「覚悟・・・か。まあそれなりに・・・な・・・」

そんな風に言った俺だが、ここ数日は毎日ばてた。

翌朝は筋肉痛で痛くてまともに走れなかったが、一週間もやってたら、体が慣れた。

ここ最近同じ訓練法で修行中。

まあまあがんばっている。

はじめてから一週間以上がたったときはすでに陽香と話しながらでも維持が可能になった。

戦い方も教えてもらい、陽香の幻術の中でイメ^{イメージ}戦もした。

そして大体の基礎が身についたとき、ついにゼレナルがやってきた。

第十九章 体力づくり（後書き）

次からはマフィルヨウトウルドの話となります。

第二十章 いざ、マフィルヨウトワールドへ！

夏休み終盤になって、ゼレナルが迎えに来た。

もう、戻れない。

心に決意してゼレナルに従った。

陽香もゼレナルたちの世界に行くことを承諾した。

そして、今はゼレナルの生み出した、トリップ時空陣 の上にいる。

トリップ時空陣 とは、世界と世界をつなぐ扉を使う移動手段の一つ だとゼレナルが言った。

「いくぞ。」

ゼレナルの声に俺と陽香は承諾した。

ゼレナルが トリップ時空陣 を始動させた。

ウ”イイイ”ーン！！

騒音が耳に響く。

騒音と共に俺たちの体がふわりと浮く。

そして瞬時に俺たちは俺と陽香の故郷人間界から姿を消した。

騒音と体の不安定さで一瞬目をつぶった俺だがすぐに体が安定したことを感じると目を開けた。

視界に入るのはゼレナルと陽香の姿。

そして背景はまるで宇宙の中にいるような世界観だった。

「さつきも言っただが移動には時間がかかる。その間、お前らに説明しておくべきことがある。」

ゼレナルが言う。

俺たち自体が動いているわけではなく、背景がすごい速さで動いていた。

それでも時間はかかるらしい。

「説明、か。いいぞ、しても。」

「ええ。だいぶ、体も安定してるし、いいわ。」

俺と陽香は承諾した。

「一度しか言わないから、聞いて覚えろ。」

まず、お前ら 人間 は定期的に食事が必要だが、妖幽鬼 には必要ない。

俺の世界マフィルヨウトウルドは人間界と違い妖幽鬼の栄養となりうるものが空気中にある。

そのため、食事と言う方法をとらなくても栄養補給は可能なんだ。お前らは前世の記憶を持った不完全で不安定な人間だ。妖幽鬼でもない。

だが、お前らがマフィルヨウトウルドに行けば、食事と言う方法をとらずとも栄養補給が可能なのはずだ。つまり、食事に関することは一切心配は要らない。」

「それはまたなんで？」

ゼレナルの説明に陽香が聞く。

「マフィルユウトワールドの空気にはその世界に対応できるよう、体を変化させるという特徴を持っているからだ。分かったか？」

「ええ。」

「ならいい。説明はまだあるから、理解しながら聞けよ。」

次はお前らを連れて行く理由だ。

それはお前らの持つ能力が必要だからだというのは前に教えたな。

その能力を活用させてもらいたい。

俺たちには 邪神将雷雅じゃしんしょうらいが という強敵がいる。」

『邪神将雷雅？』

俺と陽香の声がはもった。

「そうだ。邪悪な力に身を任せた雷の使い手、そいつの名は 龍蛇リュウジャ。」

そいつが今、陽魔の前世幽魔が時間をかけて作った世界を滅びへ導こうとしている。

そいつに従う僕しもへの類たぐいがそこらをうろつろしている。

そいつらは並の使い手でも倒せないことはない。

が、そいつらは正直どうでもいい。真の目的は龍蛇を倒すことにある。

その手助けをお前らにはしてもらいたい。

だが、標的ターゲットである龍蛇の居場所が不明。

それでは動くに動けない。

そこでお前らは龍蛇の居場所を探る旅に出てもらう。

訓練にもなるしちょうどいいだろう？そのための準備をしてきた。

だから、ついたら早速、お前らは行かなければならないところがある。

「

「そこでまた詳しく今のを説明ってことか？」

今度は俺が聞く。

「ああ、そうだ。」

ゼレナルが頷く。

「これで説明は終わり？」

陽香が問う。

「ああ。もうそろそろ着くはずだ。お前ら、飛ぶ準備しろ。」

ゼレナルが言う。

飛ぶ？

もしかしてつくところって空なのか？？

「早くしろ。」

ゼレナルがせかす。

せかされて、俺たちは準備した。

そして

ウ”イイイ”ン

騒音と共に視界に映る景色が変わった。

さっきまで足元に何か支えるものが会ったのにそれが瞬時になくなる。

飛ぶ準備ってこのことが。

納得しながら俺たちは浮いた。

だが、陽香は少しバランスを崩したみたいだ。

慌てて陽香の腕をとっさにつかむ。

「あ、ありがと。」

「いいさ。」

陽香が下を見ながら言った。

俺は安堵した。

少し遅かったら・・・と思うと冷や汗が出る。

だって下は 針山。

落ちたら確実に死ぬ。

「だから言っただろ。準備しろと。」

ゼレナルがそっけなく言う。

そして、近くにある崖を指差して

「あそこに降りる。」

と、ゼレナルはそう言った。

陽香も体勢を立て直し、三人は崖に降り立つ。

するとさっきまで体に変化がなかったが急に変化が訪れた。

体が、まばゆい光を放つ。

それは陽香も同じだった。

『!?!?』

「変化すると言っただろ?」

俺はゼレナルを見た。

ゼレナルは光には包まれなかったが、
人間界で見た姿・・・いや、移動中で見た姿とかけ離れた姿になっていた。

だが、多少面影は残っている。

「！！！」

なんか体にすごく違和感が走った。

な、なんだ、この感じは・・・！！

一体体に何が起こってるんだ！！

そう思いながら、じっとこらえた。

第二十一章 変化

俺は体に何か違和感を感じた。

光に包まれている俺は自分の身に何が起こったかはわからない。ただ、体に違和感を感じておろおろしているのだと自分で思う。

陽香もおれと同じようだった。

体を感じる違和感が自分を冷静でいられなくさせる。

じゃあ、俺は何でこんなに冷静なんだ？？

不思議と思う自分がいる。

やがて光は輝きを失い自分の姿が目にはつきりと映し出された。

な、ななっ！！なんだ？！こ、ここ・・・のすすす、がたはっ！？

さっきまでの冷静さはいとも簡単に消えた。

体の変化と共に服装まで変化した。

白いＴシャツに下は藍色のジーンズだったのに！！

『！？』

「鏡を見る。そして自分の姿を認める。」

驚きすぎて言葉も出ない俺たちにゼレナルは大きな鏡を出した。

俺たちは鏡で自分の姿を見た。

一番驚いたのは・・・自分に尻尾があったことだ。

ええー！！！！！！！！！し、ししし・・・しっぱあ！！！！！！！！

そう、俺には尻尾があったのだった。

その尻尾はまるで 豹 が持つ尻尾のような・・・黄色と黒のまだら模様。

そして次、それは服装だった。

ここに来る前は白いＴシャツに藍色のジーンズだったのに・・・それが・・・

面影が一切なくなってしまったのであった。

あ”ーああ”~~~~！！！！！！

この際はつきり言っちゃおう。

まず、耳に黒のイヤリング。首に豹柄のチョーカー。

そしてファアがついている豹柄のベスト。

ベストをつなげるかのように鎖・・・チェーンがつなげてある。

下は黒いズボンだが、ところどころ破れている。

以上、だ。

正直こんな姿を見て驚かない奴がいたら俺はすごく見たい。

・ ・ ・

で、何とか落ち着いた頃、俺はじつと陽香を見入ってしまった。

きれい……

そうとしか言いようがなかった。

かわいいと言う表現はしっくりこないし、美しいと言うほど大人びたものでもなかったし。

とにかく、きれい　こそが今の陽香に一番しっくりするものだったのだ。

その姿は……

変化する前、陽香はかわいい柄のＴシャツに膝まであるジーンズをはいていた。

それが……なんとっ！！浴衣のような衣を着た姿になっているのだった。

髪は銀髪。

首には銀のチョーカー。

浴衣と言うと、少し重そうなイメージの多いが陽香の着ているものは身軽に動けそうなものだった。

たとえば、まるで雪景色が似合う雪女のような姿だったのだ。雪女という悪いイメージしかないが、それとは真逆の印象を持っていた。

ゼレナルはもともと異形な姿のため変わったのは服装だけだったが、服装だけでも印象自体はすごく変わる。

それを俺は思い知らされた。

「もういいか？悪いが時間がない。」

ゼレナルが俺と陽香に問う。

「ああ。悪かったな。」

「もう・・・いいわ。」

自分が出しているのにそうではないように聞こえる。

声がおかしいのか？

陽香も同じようだった。

「ここに来て少し声が変わしたな。それもじきになれるだろう。行くぞ。」

ゼレナルが再び宙に舞う。

「ああ。」

「ええ。」

俺と陽香は頷いてゼレナルの後を追った。

第二十二章 荒れた自然と暴走。

ゼレナルを先頭に俺と陽香は宙を舞っている。

行き先は知らない。

どこに連れて行かれるかが分からない。

そのことにとても不安を感じている。

「どこへ向かっているんだ？」

「すぐ分かる。」

俺がゼレナルに聞いてもはっきりとした答えが来ない。

だから俺はそのことに諦めた。

諦めただけで不安を消し去ることは無理だが・・・

だが、不安と言う感情より驚きと言う感情が俺の心を満たした。

体が変わる前に飛んだときより、

変化した後のほうが消費している力が少なくなっているのを感じている。

身軽になった気がするんだ。

それがいい驚きと言えるだろう。

だが、それ以上に今見ている景色に驚いた。

それはさっき崖に下りたときに見た景色とは全く違った。

俺の言う 違う は ただ、景色が違うのはなしをしているわけじゃない。

俺が言いたいの は 景色にある自然の荒れ方が 違う と言ったのだ。

荒れている

そのことに驚いたのだった。

一マフィルヨウトワールド《ここ》へ来たときに見た景色はまだ今
見ているほど荒れている景色ではなかった。

来たばかりはもっと自然が豊かで生き生きしていた。

だが、今は違う。

今は自然に活力がなくなっている。

自然はそこに 存在している のに 存在している気配 が ない。

そして 活力がなくなってきた自然は枯れ朽ちていく。

俺がいった 違う はそういう意味だ。

ゼレナルは 存在しているが気配のない自然 のあるほうへ向かっている。

来た場所から今飛んでいる場所までの距離は果てしない。

時間を気にすれば もう 一時間以上 飛んでいるだろう。

それなのにゼレナルは平然と飛んでいる。

俺は飛び立ったときほど身軽ではないがまだ平気だ。

だが、陽香には異変が起こった。

陽香の顔色は徐々に悪くなった。

飛ぶスペースも落ちてきてはいるが我慢して必死に飛んでいる。

それを俺は見るに耐えれなくなって、声をかけようとしたとき、

陽香の体はガクツとゆれた。

その瞬間、周囲に霧が発生する。

ゼレナルも俺も動きを止めた。

霧の中心である陽香はふわふわと不安定にゆれている。

「陽・・香・・？」

なんとか振り絞って陽香の名を出すが無反応しない。

だが、周囲の霧は濃くなるばかりで俺やゼレナルをも包んだ。

つ、つめたつ。

冷たい霧が俺の肌にまとわりつく。

「暴走している・・・」

ゼレナルが不意に呟いた。

「はぁ？暴走だと？？どいうことだっ！」

俺は明らかに動揺した。

だが、ゼレナルはいたって冷静だった。

「無理をさせすぎた。暑い中、陽香を飛ばさせることはやはりまずかった。」

「はぁ??」

ゼレナルの冷静さについていけない俺。

「お前、陽香の変化した姿を見て 雪 が浮かばなかったのか？」

ゼレナルは俺に問う。

そういえば・・・雪女みたいだとは思ったが・・・

「ああ。だが、それが何の関係が・・・って・・・まさかっ!？」

ゼレナルの意図がようやく俺にもわかった。

それを察したかのように

「そうだ。雪は熱いと溶ける。つまり熱さに弱いんだ。

陽香の着ている衣は通気性がいい物だったが・・・。それすらも上回

っていたんだ。」

と、ゼレナルは言った。

「どうすれば、暴走を止められる？」

俺はゼレナルに聞いた。

「終わるまで待つ　という選択肢は取れないのか？あいつの体温調節が起きた霧だ。

終わるまで待つほうがいいと思うが。それに害もないだろ？」

ゼレナルは冷静に言う。

害は・・・ある。

俺、今、とっても・・・さみい

「害はある。俺、すごく寒い。

俺は、ゼレナルみたいに寒さに耐えられるような物羽織ってないんだ！だから止めさせてもらう。」

俺は言った。

そう、俺の体、今、すごく震えてる。

何のせいだと思う？

そんなの決まってるだろ。服、だよっ！ふ・く！

今俺は、上半身裸からチェーンのついたベストしかやってねえんだ。

チョーカーだつてファーだつてあつたつて何の足しにもならない。

そんな服装で寒いなんていえない奴がいたら教えてほしいもんだ。

ちなみにゼレナルはもともと、人型の妖幽鬼だが、俺のような姿ではない。

俺よりあつたかそんな物着てるんだつ。

ずるいつ。

不公平だッ。

「・・・なら、やってみる。」

ゼレナルは俺に許可した。

陽香の暴走を止めることを。

暴走 と言うより、霧の異常発生 みたいなもんだが、

明らかに時間がたつにつれ霧は濃くなり、温度も低下している。

荒れた自然が凍りつくほどまでに。

力 による暴走ではないからどうやって止めるか

俺は悩んだ。

そつえば、ゲームであつたぞ。

霧を払うとき、きりばらい ってのをして払う技があつたことが。

よしっ、その手で行くっ。

俺はポンと手を打って、実行した。

両手をこぶしほど間を空けてかざし、波動エネルギーを具現化させる。

それを呪文で 風 に変換する。

そして変換させた風を陽香に纏っている霧全てにかかるように

「名づけてえー、風波霧散^{ふうはむざん}!!」

と、叫んで投げる。

文字の意味どおり、霧は吹き飛ぶ。

文字の意味は 風の波で霧が散る まさに字のごとく。

霧がなくなった後陽香だけがその場に残った。

陽香は霧の力がなくなったのか、下へまっさかさまに落ちていく。

慌てて俺は陽香に風の周波を送る。

風は陽香をふんわり包む。

俺は陽香を抱き上げた。

それと同時に風は消える。

俺は陽香を抱き上げる際に妙な熱さを陽香から感じた。

きつと、そのせいで暴走したんだろう。」

意識がなく顔色も思わしくない。

我慢してたのだろうか・・・

俺の気持ち察してか

「おそらく我慢していただろう。お前は平気か？」

と、ゼレナルが聞く。

「ああ。今多少疲れたが、飛ぶことには支障は出ないはずだ。ここから後どのくらい飛ぶ？」

「そんなに遠くない。あと少しさ。それならもつか？」

「ああ。」

「俺が運ぶか？」

「いいさ。俺があれを止めたしな。」

たぶん、ゼレナルは自分を責めているのだろう。

陽香に無理をさせたことを。

でも俺は断った。

何より止めなくていいといわれて尚止めに入っただのは紛れもなく俺なのだから。

「わかった。疲れたら遠慮なく言え。陽香のような有様になる前に必ず言えよ」

「ああ。」

ゼレナルが言ったので俺も頷いた。

そして、俺たちは再び向かった。

どこへ行くのかは知らなかったが。

「ついた。ここだ。」

ゼレナルと俺は降り立った。

そこは山の中にある、一つの建物。

「……?」

俺は聞き返す。

「そうだ。ここは……」

「ここは、倉庫だよ。何の変哲のないただの倉庫。」

ゼレナルの声にさえぎり、説明した声の主がいるほうへ俺は振り返る。

声の主は俺の見知らぬ奴だった。

「なんだ、イールか。驚かせるな。背後に回りやがって。」

ゼレナルにイールと呼ばれた奴はゼレナルに近づいて言った。

「相変わらず言葉遣い悪いね、ゼレナル。」

と。

一方、ゼレナルのほうは

「相変わらず背後に回る癖直さないんだな、イール。」

と、言い返す。

二人の間に表現しようのないどす黒いオーラが漂う。
火花を散らしているとでも言おうか。

イールはゼレナルの次に俺に視線を向けた。

「君が幽魔の生まれ変わりなんだろう？
姿は何かしら幽魔の面影を感じさせるね。名前は？」

「陽魔だ。」

「陽魔・・・いい名だね。僕はイール。俺はこの管理役を買って出

てるんだ。」

イールは言った。

「お、君が抱えているのは香鈴の生まれ変わりかい？」

「ああ。陽香って言うんだ。」

「へえ。この子も香鈴の面影を残してる。気を失っているんだね。何かあったのかい？」

イールは聞いてきた。

旗から見たら、何かあったんじゃないかと思うのはいたって普通のことだ。

だが、事情が事情だ。話していいものなのか、悪いものなのか・・無理して限界で暴走したなんていう話。

言ったら、笑われるんじゃないかと思うと話すのはまずいんじゃないのか・・？

俺が悩んでいるうちに

「今日、暑いからそのせいかな？」

と、イールが聞いてきた。

「ああ。暑さに弱いみたいだから。」

俺は言った。

良かった勝手に結論言ってくれて・・助かった。

実際、暑さのせいだから変わりないけど。

「立ち話もなんだから、中に入りなよ。陽香ちゃんもこの日差しはちときついでしょ。」

イールが建物の扉を開けて太陽を見上げる。

そして俺たちを中へ入るよう促す。

そして俺たちは建物の中に入った。

第二十二章 荒れた自然と暴走。（後書き）

少し長くなりました。

楽しんでいただけたのならうれしいです。

次回もお楽しみに。

第二十三章 倉庫

俺は今、イールの案内を受けている。

中に入ってから陽香をベッドルームに寝かせてそれから説明を受けているんだ。

正直に言うと、部屋のつくりとか家具とか全てに驚いた。

文化が違う というだけでは説明がつかないほどに。

本当に異世界なんだと思わされる。

でも、だ。

初めて感じるわけではない。

どれも懐かしいとしか感じる事ができない。

見るもの全てが俺自身初めてなのに、懐かしいと感じてしまう俺に驚いている。

そして、案内されていて驚くこともあった。

案内途中に 寒いだろうから といわれ、もらった赤いクリスタルが今手元にある。

あげると言われた赤いクリスタル。

それを首に下げて俺は進む。

もちろんゼレナルもついてきてた。

案内されたのはイールの部屋と創意室という武器を作る場所だけ。

武器を作る場所は全部で三つも部屋があったことには驚いた。

そしてその部屋の温度は全て違う。

暑い・寒い・普通

その三つだ。

暑いとは感じなかった、そして、赤いクリスタルを持っていたから寒いとは感じなかった。

だが、熱気、冷氣 共にそれは感じた。

それを感じるたびに尻尾が過敏に反応する。

自分の意思で動かせるがそのときはどうしようもない。

まあ、それはともかく、ようやく案内が終わったときにはすでに夜だった。

この世界にも朝、昼、夜、はあるらしい。

そして、ベツトルームに戻ったとき、すでに陽香は意識を取り戻していた。

だが、まだ体調が思わしくない。

体はふらつき、虚ろな眼をしている。

それよりも明らかなのは体温。

衣から伝わる温度はまだ微妙に熱い。

それを踏まえて詳しくは明日にやることになったらしい。

と、言うことらしいから俺たちは寝た。

明日に向けて。

第二十三章 倉庫（後書き）

簡単になってごめんなさい。
会話がなくてごめんなさい。
次回は頑張ります。

第二十四章 保険としての武器

そして、翌日。

陽香はすっかり良くなっていた。

陽香の胸元にはイールに渡された青いクリスタルが淡い輝きを放っている。

そのおかげといってもいい。

そして、俺と陽香とゼレナルとイールは今、武器倉庫に向かっている。

向かう途中、障害は何もなかった。

あると言えば、温度ぐらいだが、俺は少なからずなんともない。

「陽香は大丈夫か？」

「私？なんともないわ。平気よ、どうして？」

「いや、いい。俺は暑くないが陽香には暑いかなと思ったただけだから。」

「そう？ならいいけど。」

「やっぱり、覚えてなかったのか・・・？」

思わず最後に呟いてしまう。

「なにが？」

陽香はそれを逃さず聞いている。

「だって、イールのとこまで行くのに、陽香は無理して気を失ったんだぞ？」

ゼレナルは暑さのせいだ、と言っていたが。もう無理すんなよ？」

俺は暴走したことを抜きにして話す。

「ええ。もしかして・・・運んだの・・・陽魔？」

陽香は俺を見つめて言う。

「そうだよ。気づけなかった俺が悪い。

あ、その辺は気にすんなよ？

陽香が気を失った後からイールのとこまでそんなに距離なかったし。
」

俺は陽香に言う。

実際、そんなに距離は長くなかった。

陽香も軽かったし、俺自身そんなに負担はかかってなかった。

「ありがとう、陽魔。これからは気をつけるわ」

陽香は言った。

「ああ。」

俺も言う。

ちょうどそのとき、到着した。

「・・・ここが、武器倉庫・・・」

俺は思わず呟いた。

「そうだよ。これが僕の管理場所の武器倉庫。さあ、中に入って。」

イールが俺たちを促す。

促されるまま中に入る。

「たくさんある・・・」

陽香が呟いた。

思わず呟いてしまうほど、倉庫の中にはたくさんの武器があった。

「じゃあ、早速、選んで。」

『え?』

思わず俺と陽香は声をはもらせる。

詳しくは武器倉庫で　と言われたからここまで来たわけだが・・・

はあ???

来て早々に選べ、だとお？

説明して欲しいんだけど。

「選ぶって・・・説明もなしに？？」

陽香が俺と同じことを言ってくれる。

「あ、説明ね、忘れてた。ごめんごめん。」

イールは思い出したかのように手をぼんと打った。

「今、武器を選んで言ったのは

これからの君たちが 鬼 の能力を使う際に使う道具のためなんだ。でも、僕としては君たちには僕が作った君たち専用の武器を使ってもらいたい。

でもね、君たちの使う武器は 剣 と 弓 だろ？

だから、それを作るための材料を取ってきて欲しいんだ。だから今選ぶのは保険だと思ってくれていい。

それが説明なんだけど・・・わかったかな？」

イールはそう言って説明する。

「ああ。その材料ってのは？」

「それは、ある特定の地域でしか手に入らない貴重な鉱物さ。

剣 も 弓 も元は同じ鉱物で作る。

場所は地図を渡すからそれを見て。」

そう言ってイールは俺と陽香に地図を渡す。

地図は俺が触れたと同時にぼつんと一箇所だけ輝かせた。

「・・・光ってる。」

思わず呟く。

「光っている場所は今いる現在地。そこから、青く光っているのは鉱物があるところ。」

そこへ行つて、鉱物をここまで持ってくればいい。それと・・・ん？」

イールは話の途中で今来た扉のほうを見た。

「やばい。連中が来たっ！！」

「！！」

「何してる！？早く選べ。眼を閉じて、武器だけに集中して！」

『はいっ！』

イールの焦った声に俺と陽香は気を引き締め眼を閉じた。

そして武器だけに集中する。

俺の武器は 剣。

俺の剣・・・俺の・・・

それだけを心にとどめて。

「今っ！眼を開けて、武器をとれっ！！」

イールの声に俺と陽香は眼を開ける。

そして見たのは 輝く剣

俺はそれを手に取った。

剣は俺に触れたことで輝きを増した。

陽香のほうも同じようだった。

そしてそれを見届けると、

「その武器と君たちの能力で襲い掛かる連中たちを倒せ！！」

と、イールは叫ぶ。

「今来る連中は俺らの敵、俺らはそいつらを 怪奇^{かいき} と呼んでいる。
まあ、せいぜい死ぬな。」

ゼレナルは焦った様子もなく言う。

俺たちは頷き、表に出る。

自ら手にした武器を持って。

そして表にはたくさんの怪奇。

俺と陽香は眼で合図をして相手に切りかかる。

俺は 剣 なんて使うのが初めてだ。

だが、勝手に手が動く。

俺たちは敵をバツバツとなぎ倒した。

次第に剣技にも慣れてきて、応用を利かせる事ができた。

俺のほうは有利に持ち込んだが陽香のほうはやばかった。

弓 は中距離がベストだ。

だが、陽香と怪奇たちとの距離は近距離だ。

非常にまずい。

「陽香！伏せろ！！」

思わず叫んで陽香と怪奇の間に入った。

陽香は俺の指示通り身をかめ伏せた。

だから、俺は剣に風を纏わせて怪奇たちはなぎ払った。

陽香の周りにいた怪奇たちは俺の手によって消された。

俺と陽香の周りには一時的にいなくなる。

だが、陽香を立ち上げられるほどの余裕までなかった。

「そのまま、伏せてろ。俺がやる。」

俺はそう言って剣を構えなおし、再び襲い掛かってくる怪奇たちを

なぎ払うため、呪文を用いた。

こいつらは数は多いが連携はない。
所詮、烏合の衆だ。

そいつらは俺たちの敵じゃない。
俺の敵なんかじゃない。

俺は波動エネルギーを風に変え、炎に変え、その両方を纏わらせ怪奇たちをなぎ払った。

ぶわああっあ！！！！ぶおぼおおお！！！！

風と炎が剣の威力を増大させた。

なぎ払われた怪奇たちは一瞬にして消え去る。

俺と陽香たちから多少離れていた奴も消えた。

だから怪奇たちは全滅といってもいいだろう。

俺の強さに怯えてか、数匹は逃げていった。

「陽香・・・大丈夫か？」

そついいながら、陽香に手を貸して立ち上がらせる。

「ええ、ありがとう。」

陽香はそう言って立った。

第二十四章 保険としての武器（後書き）

修正しました。

第二十五章 鉱物探しは旅の余興

陽香を立ち上がらせた後、倉庫の方から拍手が聞こえてきた。

「おお、すごかったよ。これなら大丈夫だね、心配要らないね。」

拍手したのは紛れもなくイールだった。

ゼレナルがするはずがないから当たり前だが。

「君たちはどこかでそういうのやってた？」

「俺は初めてです。」

「能力に気づいてからは弓道の方を少しやっていました。」

俺は初めてだといったが、陽香の方はどうやら経験したことがあったらしい。

「それでも狙い通りに当てたのは今日が初めてでしたけど。」

陽香は勘違いするなと言う感じで付け足した。

「うーん、それにしてもすごかったよ。」

初めてだと思えないくらいに陽魔の剣捌きはすごかったし、陽香ちゃんの見事な距離感と使い分けが言葉にできないほどすごかったよ。

「

「私は陽魔に助けられましたけど。」

イルの言葉に陽香は助けられたことを持ち出す。

「あれは大変だろうと思って俺が勝手に乱入しただけさ。」

俺は言う。

「あれは乱入じゃないわ。私は助けられたのよ、あなたに。」

陽香ははつきりという。

「そうやって言い合うのもいいけど仲間割れはしないようにね。じやあ武器選びも終わったし、君たちには早速探しに言ってもらおうか。」

イルが言った。

はやっ！

「今からですか??」

「そうだけど・・・?」

イルは 突然なに言い出すの? という風な表情をしている。

「お前らにもう地図は渡しただろ。だから二人で行ってきな。なんのために能力があるんだと思ってる? 鉱物探しは旅の余興に過ぎん。まあ念のため監視はつけてやるが。」

ゼレナルが淡々と述べる。

「監視？」

陽香がそんなものつけるの？といったげに首をかしげて問う。

首をかしげる姿が俺にはかわいらしく見える。

そんな俺はおかしいか？

おかしくはない。これは普通の男子には当たり前なことだ。

キスされて前より意識している女子の動作全てが

俺には全てかわいく思えるフィルムかなにかがかかったようにかわいく思えてしまうものだ。

そついうもんなんだよつ。

「そつだ。今呼び出すからな。」

ゼレナルはそう言つて呪文を唱える。

「・・・招来天霊しよつらいてんれい、憑依装着ひょういそうちやく、天地動派てんちどうは、雅狼雷獣がろつらいいじゅう・・・」

呪文のような理解不能の言葉がゼレナルからつむぎだされる。

何なんだ？この呪文・・・

俺の唱える呪文とは違う・・・

心の中で違和感を覚えながらゼレナルを待っていた。

ゼレナルは長い呪文を早々に終わらせ監視役を召喚する。

呪文完成と同時にゼレナルの周りには非常に細かく刻まれる魔法陣が出現した。

ゼレナルはその魔法陣に手をかざし、

「召喚！」

と、言って、呼び出した。

魔法陣はとてつもなく輝きだして俺たちの目をくらます。

あまりのまぶしさに目をつぶる。

やがて輝きは消え、一匹の猫のような可愛い幼い獣が現れた。

「こいつは雷獣の幼獣だ。名前は・・・まあ、お前から名乗れ。」

ゼレナルはそう言って幼い雷獣？を俺たちのほうへと押し出す。

雷獣に見えない。

何？この可愛らしさ。

子猫と間違えてもいいだろう。

子猫　ときやすく表現したがそんな容姿ではない。

子猫のような外見をしていて、耳は猫耳だし尻尾も可愛いけど、猫らしさはそれだけ。

小さいから弱いんじゃないのかと思うが実際そうではないとも思う。
子猫の大きさだが、毛並みは雷のマークが体に巻きついているみたいだし。

口から出てるのは歯というより、小さい牙。

尻尾は雷のマークに豹柄模様。

かわいい目は猫の目にそっくりだが、瞳の色はエメラルドグリーン。

幼いし、可愛い。

とだけで第一印象は終わらないことが良く分かる外見だった。

「・・・私、ラル。」

ゼレナルに押し出された雷獣は、小さくそれでいてはつきりとラルと名乗った。

「ラル、か。いい名だな。俺は陽魔。よろしくな。」

「私は陽香よ。」

俺と陽香は名乗った。

「ラル、お前はこいつらの監視役を任せる。分かったな？」

「うん・・・じゃなかった・・・はいっ。」

ゼレナルの言葉にうんと頷きかけてラルは言い直した。

先々不安だが、仲間が増えたことには素直にうれしかった。

陽香とじゃ気まずくなりそうなきときがありそうだからな。

俺はそう思いながらゼレナルたちの光景を見ていた。

一方、陽香は、

あああ、せっかく陽魔と二人っきりで旅ができると思ったのに残念だわ。

でも、まあいいわ。

雷獣はとても強いといわれているし旅は安全ね。

と、少しラルを快く思っていなかった。

「じゃあ俺たちは行くぞ？」

陽魔はゼレナルたちに言った。

どうせ、早く行けといわれるんだから俺から切り出さないと。

「ああ。」

「頑張つて鉱物をとってきてね。」

ゼレナルとイールが言葉を返す。

「じゃあラル、行くぞ。」

俺はそう言っ てラルを抱える。

「!？」

ラルは一瞬何をされたか分からなかった。

「陽魔、別に歩かせてもいいんじゃない？ラルがびっくりしてるわ。」

陽香が少し戸惑ったように言う。

「ん？ああ、突然で悪かったな。だって、これから長い間、歩くだろう？

だったらこれのほうが楽だと思ったからさ。いいだろ？ラル？それとも、自分で乗るか？」

ああ、突然だったと、自分で思い出しながら言う。

これ癖だったんだよな。
小さいころの。

俺は過去を思い出して久しぶりに手が動いたことに笑う。

「・・・自分で歩ける・・・」

ラルはちょっぴり恥ずかしそうに言う。

「そうか？悪かったな、つい癖で。」

俺は悪い悪いと謝りながらラルを降ろす。

「癖　なんだ？」

陽香が気になったらしくて言う。

「そうなんだよ。」

俺さ、一人暮らしになる前に歳の離れた義兄弟がいてさ、よく抱えて出かけてたから。」

そう言っでゼレナルたちを背に歩き出す。

陽香もそれにつれて歩き出し、後ろからラルもちよこちよこつてくる。

「義兄弟？」

陽香は俺にまたもや問いかける。

こつちにつつこむのか・・・

内心そう思いながら俺は過去を簡単に語る。

「そう。俺な、一人暮らしになる前、義理母と暮らしてたんだけど、その義理母が再婚して夫のほうに歳の離れた子供がたくさんいて一人暮らしになるまで一緒に遊んだり出かけたりしてたんだ。ただ俺が高校に上がったなら

義理母、義理父の両方とも仕事の都合で海外転勤で俺は家に残ったんだ。」

志望校受かったばっかなのに転勤について行くななんて嫌だろ？と後

から付け足して話す。

そうやって、話しながらの俺たちの旅は始まった。

第二十五章 鉱物探しは旅の余興（後書き）

次は陽魔たちの過去の思い出を会話に入れていく予定です。

第二十六章 雷獣のラル

地図を見て進む方向を確認しながら俺たちは森の中を歩いた。

歩きながら、俺の癖 が元となって過去の話を陽香とすることになった。

「私はいつも独りだった。一人暮らしをする前は母と暮らしてたんだけど、

母は仕事で夜遅くまで帰ってこなかったからいつも、家にいたわ。その頃からかしら。能力のことが分かるようになったのは・・・」

陽香は過去を思い出すようなしぐさで語りだす。

「そうなのか？」

俺は聞き返す。

そんなに早くに能力が目覚めたなんていくらなんでも早いだろう？

そう思った。

「ええ、たぶん。記憶も大半が分かりかけたけど母には聞けなかった。

聞く時間さえなかったし。

母とは話す余裕さえなかったのに生活が成り立っていたことが今になって不思議に思うわ。」

陽香が過去を話すときの表情は声とは違い悲しいものだった。

「そうなのか・・・俺は義理母や義理父とは最低限のことぐらいしか話さなかったな。
俺のこと嫌ってみたいだったからな。それが嫌になって残りたいといったのかもな。」

俺も陽香には同情できた。

「そう。陽魔もそんなことがあったのね・・・」

陽香と俺の過去の会話の空気が重くなってきた気がした。

「俺たち似たもの同士だな？」

「そうね。」

空気を軽くさせようと俺は笑う。
それを察したかのように陽香も笑った。

会話に夢中になっていたせいか、ラルのことをすっかり忘れていた。

「おい、ラル。大丈夫か？」

俺はそう言いながらラルの方を振り返る。

「・・・だいじょうぶ・・・」

ラルはそう言うが明らかに表情が大丈夫じゃないと言うことが分かる。

俺はラルに近づいてラルをひょいと抱えた。

「結構歩いたな。やつぱりラルにはきつかったみたいだな。なあ、陽香、地図開いてくれるか？」

俺はラルを腕で抱えなおして陽香に頼む。

「・・・ほら、まだ私たちがここで、目的地はここ。まだ距離があるわ。どうする？」

陽香は地図を俺に見せながら言う。

「このまま俺はラルを抱えて歩けるけど陽香はまだ平気か？疲れたなら一休みするけど？」

俺はラルの様子を見ながら言う。

ラルは肩で息をしている。

俺が抱えなかったら倒れていてもおかしくないだろう。

すっかり忘れていたことを後悔していると、

「私はまだ平気よ。でも、一休みしたほうがいいと思うわ。いつ怪奇が襲ってくるか分からないもの。」

陽香は一休みすることを勧める。

陽香がいいなら俺も何も言うことはない。

「一休み決定だな。一休みするならあそこの日陰がいいんじゃない

か？」

俺は日陰を指差して言う。

「そうね。私も日陰のほうが涼しくて良いわ。」

陽香も賛成してくれる。

「ラルは？」

「・・・う・・・ん・・・」

ラルは俺の言葉にかろうじて答える。

よほど体力が限界だったんだろう。

「じゃあそこで決定な。」

俺はそう言って日陰に向かう。

陽香も俺と向かって歩く。

そして俺たちは日陰に腰を下ろして休む。

俺は木を背もたれにしてラルをひざの上におく。

陽香も隣に座る。

ラルは以外にも軽かった。

小さく幼いせいか、獣といえど重さは普通の猫並だった。

ラルは俺のひざで丸くなって、目を閉じる。
そのしぐさがまるで猫のよう。

息遣いは多少乱れているがそれ以外に異常はない。

ラルは目を閉じてしばらくしないうちに寝息を立て始める。

「陽香、ラルが起きたら出発な?」

俺はラルを撫でながら小さな陽香に言う。

「・・・」

だが返事がなくその代わりに俺の方へ重みが来た。

「陽、香?」

思わず、陽香の方を見る。

陽香は俺に体を預けるような形で肩によさりかかって目を閉じ、口からは寝息が漏れていた。

邪魔しちやいけないな。

そう思って俺は動かなかった。

陽香・・・疲れてたんだな。

そう思いながら俺に触れる陽香の髪に俺は手で触れる。

しばらくじっとしていたがやがて俺は眠気に誘われていつの間にか眠ってしまった。

・ ・ ・

俺は殺気の気配を感じて目が覚めた。

まだ陽香もラルも寝ていたが俺はためらわずに起こした。

「もう出発するぞ。起きろ、陽香。」

殺気は近くにないが遠いところにある。
確実に俺たちに向けられている。

早くに出発したほうがいい。

「ん・・・」

陽香は目を開けた。

「目が覚めたか？」

「ええ。」

陽香は多少寝ぼけていたようだが、遠くに殺気を感じたか真顔になる。

「遠くに殺気がある。近づいてきているわね。」

「ああ。ラル、起きろ。」

俺はラルを起こしにかかる。

陽香が殺気に感じたなら安心だ。

後はラルの体調が良いならすぐにでも出発できる。

「ん・・・あ、殺気っ。」

ラルも起きてすぐに感じたらしい。
さすがは獣。

ラルは俺のひざから降りて殺気を探る。

俺は立ち上がって陽香を立ち上がらせる。

「ラルはもう大丈夫か？」

「・・・平気・・・」

ラルはそう答えるがラルの足取りはふらついている。

俺がラルに言おうと口を開いたとき、今感じた殺気じゃない気配が
唐突に現れた。

「!?!」

俺は気配を感じた瞬間、

ラルと陽香を両手に抱え、現れた気配と距離を置いたところにラルと陽香を降ろす。

相手は怪奇。

しかも大勢いる。

それも、突然。

何の前触れもなかった。

頭にはさまざまな疑問がよぎる。

なぜ気づかなかった！！

それが一番の驚きだ。

こんなに大勢いるのに気づかないなんて・・・どうかしてる。

たくさんの怪奇は異様な形をかたどったものばかりだ。

その大半はジャングルにあるような大きな植物をかたどっている。

そいつらはすぐに俺たちに攻撃を仕掛けてきた。

「陽香すぐに弓を出せッ。俺がサポートしながら敵を倒す。」

俺はそう言って剣を出現させる。

鬼の能力で使用するものは本人の意思で自在に出し入れが可能なのだと教えられた。

だから今までしまっていたのだ。

そして相手に立ち向かうべく走る。

相手の攻撃をかわし、剣で払いのけ切り裂く。

そして陽香が怪奇たちを倒しやすいように距離を作っていく。

陽香は弓を出現させ、俺が作った相手との距離をうまく使い相手を一撃でしとめていく。

陽香の足元には足取りがおぼつかないラルがいた。

まだ本調子ではないらしく、動こうとする気配がない。

ラルも危ないな。

俺は風を剣に纏い怪奇たちをなぎ払い、

一時的に大きな距離を作ってラルのそばまでより、ラルを肩に抱えた。

「しっかりつかまってるよ。」

俺はそう言って再び陽香のサポートに入る。

だが、あまりにも怪奇の数は多く、サポートし切れなかった。

そして陽香の弓の判断が少しでも遅かったりするとピンチな状況になってしまう。

「や、やばいつー！」

思わず声に出してしまう。

陽香の周りを怪奇たちに囲まれた！！

陽香の後ろが危ないっ！

そう思ってて叫こばうとしたとき、

「これでも私は雷獣だもん！！・らいじゆう・雷条招来！！」

俺の肩に乗っているラルがいきなり声を上げた。

すると、

ダーン！！！！・ビリビリビリっ！！！！・・・

陽香の背後に襲い掛かろうとした怪奇は雷に突如打たれ体に電気を帯びらせて消滅した。

その音にビクツとして陽香が後ろに振り向く。

陽香の後ろには大きな雷で焦げついた穴があった。

「ラル・・・お前がやったのか？」

俺はラルに問いかけながら怪奇たちを炎で焼いていく。

「・・・う・・・ん・・・私も・・・役に立ちたかった・・・から・・・」

ラルは途切れ途切れに言って俺の肩からずり落ちた。

「おいっ！！！！」

思わず叫び、慌てて片手で受け止めた。

ラルは気を失っていた。

・・力を使い果たしたのか・・？

そう思いながら俺は片手でラルを抱え炎を剣に纏って周りを焼き払った。

陽香も雷には驚いたみたいだがすぐに平常心を取り戻して弓で怪奇を射る。

俺の炎と陽香の弓で怪奇たちは次々と消滅していった。

やがて俺たちを襲った怪奇は全て消滅し、遠くにあった殺気もいつの間にか消えていた。

「陽香、大丈夫だったか？」

「ええ。・・この大きな穴作ったのってまさかラル？」

「ああ。そうみたいなんだ。力を使い果たしたのか、今はこの通り。」

俺は俺の腕の中で気を失ったラルを陽香に指し示す。

「私・・助けられたのね・・。」

「ああ。俺だけじゃあの多さはサポートするにはきつかった。ほんとに良かったよ、無事で。」

「ええ。ラルはやっぱり幼くても雷獣なのね。」

「ああ。そうだな。ラルな、雷落とす前に言っただ。これでも雷獣なんだ。ってな。」

多少違うが意味は同じだから言葉を俺なりに変えた。

「そう。甘く見ないほうが良いわね、雷獣は。」

「ああ。そうだな。」

陽香と俺はそう言ってくすくす笑った。

そして、俺と陽香は歩き出す。目的地に向かって。

第二十六章 雷獣のラル（後書き）

これから戦う場面が多くなつて来ると思います。
迫力あるものにしようと思ひますので
ご不満などがあつたらいつでもいってください。
感想お待ちしています。

第二十七章 龍蛇を崇める邪神卿

目的地に向かい始めて一週間が過ぎ去る。

普通の人間なら飢え死にしているもおかしくない。

だが、俺と陽香は餓えてはいない。

俺たちも元は人間だったのに。

それはともかくとして旅は順調だった。

ラルが雷を出した日からちよくちよく怪奇が夜襲をかけてきたりすることがあった。

しかし、俺の見事なサポートとすばらしい剣技により消滅させることができた。

じ、自慢じゃないぞ、こんなのっ……自慢したいけどっ……

話がそれたから元に戻すが

目的地まであと少しというところまで来た今日の昼下がりときだった。

「そろそろ休むか？」

俺が陽香とラルに話しかけたとき、答えは空から聞こえた。

「おーほっほっほー。あなたたち、私が来たからには休ませないわ

よおー!!」

と、何かしら意味不明な声を上げて俺たちの進むべき道をふさぐように降り立つ奴が一人。

服装は・・・露出度がすごく高い・・・こういつちやなんだが時代遅れの服装だった。

わあーなんだこれ？サーカスか何か？

俺がそう思ったとき、隣にいる陽香が

「・・・おばさん・・・」

と、ぼそりと呟いた。

そつだよなー外見的におばさんだよなー

「っ!!だーれがおばさんよっ!!だれがっ!!」

おばさんは怒鳴る。

「誰って決まってるわ。ダサイ服装をしている私の目の前にいるイカしてる人よ。」

陽香は正直におばさんを指し示して言う。

「ダサイですってえー!!?あなたたちには分からないわ。このよさが、この美学が!」

おばさんは答える。

わかりたくもねーな、そんな美学。

「おばさん、あんた、誰？」

俺はおばさんに聞く。

「おばさんって言うんじゃないよっ、その坊主^{ガキ}が。
私には 氷歌^{ひょうか} と言う名前があるんだからッ。」

おばさんは 氷歌 と名乗る。

服装とまるで違っただけど・・・

心の中で呟く俺。

「で、何のためにここに来たのかしら。氷歌おばさん??」

陽香がからかうような口ぶりで聞く。

「おばさんて言うんじゃないわよっ!!それにこの名前は龍蛇様が
つけてくださったんだから。」

私は龍蛇様の邪神卿の一味なのよっ!!」

龍蛇がつけた・・・だとお?

ネーミングセンスが分からね。

龍蛇ってどんな奴??

それに邪神卿って何??

氷歌お婆さんの言葉に心底氣になりだす俺。

「えーそのばかげた名前龍蛇っていう奴がつけたのぉ？どうやってつけたのかしらあ？」

理解不能だわ。じゃああなたは龍蛇の命令でここへきたのかしら？」

陽香は心底馬鹿にするような口調で言う。

「龍蛇様を呼び捨てにするんじゃないよ、そこのお嬢ちゃん！！
たしかにあの方のお考えになることは分からないときもあるけれど
素敵な方なんだからッ！！」

氷歌お婆さんが言う。

やっぱり考えることがお婆さんでも理解不能なんだ。

「目的はなんなの？お婆さん。」

「お婆さんって言うなっ。目的はこれで教えてあげるわッ！！」

陽香の問いかけにお婆さんは言葉ではなく行動で示した。

お婆さんは氷のつぶてのようなもので俺たちを攻撃してきた。

俺たちはそれをよけ鬼の能力を発動させた。

俺は剣を。

陽香は弓を。

ラルは身構えてうなる。

「あんたは俺たちの命をもらいに来たんだな？ だったら俺たちも遠慮なく殺^やれるな。」

俺はそう言つて氷に対抗できる炎を相手に放射する。

氷のつぶては一瞬にして消え去りおばさんの方へと向かう。

「ふんっ。炎がなによ。私を甘く見ないことね。」

おばさんは後ろへ退きしながら氷での攻撃を続ける。

俺の炎が消えたとき、俺たちに向かって氷は襲い掛かる。

「炎だけつて俺を甘くみんなよ。」

俺はそう言つて風を使い、氷の攻撃角度を半回転させる。

「なにっ！？・・・ぐわあ””」

おばさんは一瞬反応が送れてまともに自分の攻撃を浴びる。

そこにすかさず陽香が矢を射る。

おばさんは何とかよけようとするがバランスを崩してよけることはできなかった。

おばさんの腕に矢が刺さった。

「くう””・・・今日のところはこれくらいにしておいてあげる。覚えておきなさい。」

おばさんは三流悪役の捨て台詞^{せりふ}を吐いてどこかへ消えていった。

「覚えていたくないわね。」

陽香がうんざりした口調で言う。

「まったくだ」

俺も言う。

「無事たどり着けるかな・・・？」

ラルが呟く。

「大丈夫さ。油断は禁物だがなんとかなるだろ。どうする？休憩入れるか？」

「そうね、少しだけ。」

「うん。」

俺の言葉に陽香とラルが頷く。

そして俺たちは日陰で休憩を取りに行く。

俺のひざにはいつもラルが座って休む。

隣には陽香も。

俺は地図を見ながら

「町・・・とかないのか・・・」

と、呟く。

地図には町の名前らしき文字はない。

示されているのは地形と現在地と目的地だけだ。

ないなんておかしいだろ。

絶対どこかあるはずだ。

よくよく見ると目的地までの経路の中に建物のようなものいくつか連なっているところがあった。

ここがそうかもしれない。

俺がじっと地図を見ていると

「眠らないの？」

陽香が問いかけてきた。

「ああ。陽香は寝てていいよ。ただ地図を見てるだけだから。」

俺は問いに答える。

すると陽香は肩にちょこんと頭を乗っける。

そして俺の腕もつかむ。

「ようかぁ・・・?」

頬が熱くなっていくのを感じながら聞く。
声が裏返っていることも感じながら。

「このままでいさせて・・・?」

「あぁ・・・」

陽香の甘えてるようないつもの口調のような声に俺は思わず頷く。

俺もじきに眠くなって寝た。

第二十七章 龍蛇を崇める邪神卿（後書き）

誤字脱字などがあつたらすいません。

感想、ご希望、評価、お待ちしています。

第二十八章 町はめちゃくちゃ、邪神卿の仕業！？

俺たちは目的地までの経路にある町に着いたはずだった。

だが、そこには荒れ果てた土地が広がるばかり。

本当に・・・町・・・？

誰もが見て疑うほど土地は荒れ果てていた。

建物は連なっているが妖幽鬼たちが外でにぎやかに騒いでいるわけではない。

すごく静かで町に活気などあつたもんじゃなかった。

「ここ・・・ほんとに町なの？」

陽香が探るようなまなざしで町を見て聞いてくる。

「たぶん、な。地図を見るとちょうど俺たちがいる地点に名がしるされているだろ？」

読めないけどな と、後から付け足して俺は言う。

「ここは町。建物の中に気配感じる・・・」

ラルが建物を見渡して言う。

「そうだな・・・確かに気配が・・・ん！？」

俺はラルに頷きそうになって周囲の気配に異様なものを感じた。

「どうしたの？」

陽香がそんな俺を怪訝そうに見つめる。

ラルも不思議そうに見てくる。

陽香もラルも気づいていないみたいだ。

「この場からいったん退こう。気配を隠せよ。」

俺は陽香たちの返事も聞かぬまま陽香とラルを抱え、町にある大きな木まで飛躍し気配を消した。

「!？」

「!」

陽香もラルも俺のとった行動に理解ができなかったためか目を見開いている。

だが、ラルは少なからず異様な気配には本能的に察したようだ。

・俺の直観力が皆より勝っているのか・・・？

そのことが不思議で仕方がない。

だがそれよりも気になることがある。

「あのおばさん・・・妙なもの連れてきたぜ？」

俺は木から見下ろしてうんざり口調で言う。

「えっ。ほんとに？」

「・・・敵。」

陽香が小さく驚き、ラルはおばさんたちを冷たいまなざしで見下ろす。

異様な気配・・・それは氷歌^{おはみん}たちのことだったのだ。

おばさんは何か妙な獣を連れている。

「かわいいかわいい私のフロウ。この町の生命エネルギーを凍らせてしまいなさい。」

「!?!」

おばさんは妙な生き物をフロウと呼んだ。
そのうえものすごいことをいいだす。

俺たちは言葉を失った。

生命エネルギーだとお!?

「どっつするっ?」

陽香は聞いてくる。

「陽香がいいならあいつらを殺^やろう。いいか？」

「ええ、もちろん。」

「じゃあ決まりだな、ラルはここにいろ。何かあったら助けしてくれるのを期待してるからな？」

「・・・無茶しないで。」

俺と陽香は戦闘準備に入りラルに言う。

ラルは俺たちを心配してくれた。

まだラルという時間は少ないが多少なりとも心を俺たちに開いてくれた。

陽香とはあまりうまくやってはいないようだが・・・

「ああ。努力する。いくぞ、陽香」

「ええ。」

俺は頷いて、陽香と木から飛び降りた。

「冗談はそこまでにするんだな、おばさん？」

俺はおばさんたちに向かっていった。

「なっなんであんたたちガキがこんなところにいんのよっ。」

まあ、いいわ。私がここで相手にしてあげる。
あんたたちを葬ることができれば、龍蛇様にいい顔向けができるわ
つ。」

おばさんは言った。

「あれ？おばさんって言われても否定しないわね。まあそれが妥当
かもしれないわね。
ふふふ、あなたの悪役台詞にはとってもお似合いよ？」

陽香も言った。

おばさんの顔が見る見る赤くなっていく。

「おばさんって言っくんじゃないよ、ガキがっ！！
そういえば、あんたたち、ガキって言われても否定しなかったわよ
ね？」

おーほっほっほ。子供がいうような言葉はあんたたち、ガキ
にはお似合いよ。」

おばさんは俺たちが否定しなかったことをいいことに俺たちのこと
を好き勝手に言っはらっている。

だが俺には策略がある。

「ガキ？そうだな、俺たちはガキだよ。そんなガキにやられて帰っ
ていったのはどこの誰だったっけ？？」

俺は、にっと笑って言う。

陽香も いい思いつき と言わんばかりに笑って、

「そうそう。だれだったかしら？あいにくガキなんで記憶力乏しいんだよねえ？」

と、くすくす笑いながら言う。

その後付け足すように おばさんも記憶力悪いからお互い様ね と言う。

「くっ！！ああいえばこういう・・・ざい連中だね！！
やっておしまい、フロウ！！」

おばさんはつれてきた妙な生き物に命じる。

それを合図に戦闘が始まった。

フロウと呼ばれた生き物は凍りつくような吹雪を俺たちに向ける。

俺は剣を呼び出し炎を纏って吹雪から身を守る。

早速俺はおばさんに切りかかりに行った。

陽香はフロウの方をたのんだ。

陽香は苦手といった妖の炎を使って弓で倒そうとしている。

俺はおばさんと間合いを詰めて隙をうかがう。

そしてタイミングを計って攻撃しに行く。

キンっ！！！！

何か金属の出す音が俺の剣に当たった。

「私を甘く見ないことね？私の鬼は マイク よ？」

「！？」

俺の剣はおさんのマイク？に当たって音をかもし出したのだった。

俺はいったん身を退き、間合いを取る。

そういえば、このおさん、氷歌 って名前だったな。

今頃になって思い出す。

「あ、悪い。おさんおさんって言ってたらあんたの名前忘れた。」

俺はあちゃーと片手を頭に乘せて笑う。

そのとき、おさんはガクつと傾いた。

隙ありっ

俺はその瞬間をついて切りかかるが動きが途中で止まってしまった。

それは・・・

ぴいー~~~~””

そんな音が頭に響いてくるからだった。

「あら、どうしたの？うごけない？

そりゃあそうね、フロウの音波をずっと聞いていたんだからね？」

「・・・おん・・・ぱ・・・だとお？」

俺は聞いた。

音波？自分自身動かなくなるまで気づかなかった。

こんなことつてあるのか？

「そうよ。今回も龍蛇様のご命令で

フロウをつれてこの町に行って住民どもからエネルギーを奪いに来たの。

普通、特殊な場所でもない限りフロウの音波は害を起こさないんだけどねえ？

ここはどうしてか、音波の効果があるみたいなのよ。」

おばさんは説明する。

俺以外に陽香までもが体を硬直させている。

「さあ、今までの分ばっちり受けてもらっわよ。」

おばさんはそう言って俺を蹴り上げた。

「つつ!!」

痛みがけられた中心から激痛が走る。

何とか、二、三步後ろに退くだけでおさまった。

俺は心の中で風を呼んだ。

剣を持つ手に力を加える。

風よ、音を消し去ってくれッ!!

強く俺は願う。

それと同時にフロウに雷が落とされた。

ダーン!!!

フロウは雷で炎がついたのか燃え上がる。

そのときに音波は消え去った。

動けるようになったことを感じ取り俺はすぐさまおばさんに向かって
けりを一発食らわした。

「ぐっ!!」

おばさんは景気よく吹っ飛ぶ。

そのとき、ラルが木から落下してきた。

俺は慌ててラルをキャッチできる位置に滑り込んだ。

ラルは気を失っていた。

助けてくれて・サンキュな、ラル。

心の中で礼を言い、おばさんたちのほうに向き直る。

そして、俺は剣をかがげ、炎を纏わせる。

「とどめだっ！！」

俺は叫び、おばさんのほうに向けて剣でなぎ払う。

風と共に炎がおばさんたちのほうに押し寄せ、まともに食らう。

「ああ”””あつつ””、また邪魔してッ！！覚えてらっしゃいッ！！」

おばさんはそう言ってまた姿を消した。

「ふう。終わったね。ところで蹴られたところ、平気？」

陽香は俺の心配をしてくれる。

「だいぶ痛みはないからたぶん大丈夫。そっちは苦戦したか？」

俺は心配ないことを伝え、陽香に聞く。

「ええ。相手が同じ属性だったからね。ただ、音波のせいか体がまだふらつくわ。」

陽香は少しづらそうに言う。

「大丈夫か？」

俺はそう言いながら手を貸す。

「平気よ・・・一人で歩けるわ・・・」

陽香はそう言ったが体がバランスを崩して倒れた。

慌てて陽香の体を抱える。

「・・・」

陽香から何も反応がない。

俺は陽香の体を抱き上げた。

陽香には意識がないことが分かった。

仕方ない、どこか日陰まで抱えてくか。

俺は陽香とラルを抱えて町はずれにある川辺の日陰に行った。

はあ、はあ、はあ。

抱えて歩くのは意外にも困難だった。

ラルは小さいとはいえ 獣 だし、陽香だって軽いほうだが 女 だ。

手荒なまねをすれば後で俺の首が吹き飛ぶ。

俺は陽香とラルを丁寧に横たわせながら俺も地面に腰掛けた。

俺は陽香たちが目覚めるのを待った。

ふああねむい。すこしねる・・・か・・・

待っているうちにうつうつとしてきて・・・俺は眠ってしまった。

すや・・・すや・・・

すぴー・・・すぴー・・・

俺が起きたときはすでにラルが起きていた。

陽香はまだ意識がない。

よほど消耗したんだと思う。

「ラル、起きてたのか・・・サンキュな？あの時助けてくれて・・・」

俺はそう言いながらラルの頭を撫でる。

「・・・期待されたから」

ラルは相変わらず冷たい言葉を言う。

だがラルの表情からして撫でられるのは嫌いじゃなさそうだ。

「もう・・・夕方。そろそろ移動しないと怪奇の餌食になっちゃう。」

ラルは俺をじっと見つめてそう言う。

「ああ、そうだな。今日は・・・木の上にするか。」

俺はそう言うて陽香を抱える。

「じゃあいくか。」

「うん」

そう言うて俺たちは歩き出した。

第二十九章 疲れ

俺は今、木の上にいる。

体を浮かせて幹の太い枝まで移動した。

ラルも俺と距離を置いて寝ている。

俺は太陽の光がまぶしくてついさっき起きたばかりだった。

ん・・眠い。

まだ寝ぼけるがすっかり木から落ちるわけには行かない。

まだ陽香は寝ているのだから。

怪奇や他の奴らに教われないように木へ上ったが一人一人を支えながら寝るのは大変だ。

結局深くは眠っていない。

陽香を落とさないよう必死で抱えていたんだからな。

「ん・・・」

このとき陽香は起きた。

「・・・起きたか？」

俺は声をかける。

俺と陽香の距離はゼロに近かった。

そのためか・・・

「ち、ちかつ」

陽香は慌てて離れようとする。

「おいっ落ちる。」

俺はそう言ったが陽香がもぐせいでバランスを崩す。

そして二人はまっさかさまに落ちた。

陽香っ！！

俺は陽香をかばうように抱きしめ落ちた。

背中に衝撃が来た。

だが、幸い下は落ち葉がたくさんあって怪我はない。

俺と陽香の体勢は今ちょっといいムードをかもし出していた。

俺のひざの上には陽香がいて、陽香の頭は俺の胸にあって、互いの背中には手があっってお互い抱きしめている状態だったからだ。

落ちたことによってその状態に同様など全くなかった。

ただ、俺は陽香を守りたかったただだったから今は陽香の無事を安堵している。

「大丈夫、か？」

念のために聞く。

「・・・ええ。大丈夫。」

陽香はまだちょっと体が震えている。

落ちたことにまだ驚いているんだろうな・・・

俺はそう思う。

だってそうだろう？

起きたら木の上にいるんだからな。

「大丈夫、だった？」

木の上からラルが降りてきて聞いてくる。

俺は立ち上がり、陽香の手を引いて陽香も立ち上がらせて

「ああ。落ち葉がクッションになってくれた。」

と、言う。

「陽香、回復したか？」

「ええ。多少。」

「そうか、ならまだ休んだほうが良いな。体から体温があまり感じない。」

俺は陽香の手を放さず言う。

「とりあえず、な。」

俺たちは日陰に移動して休みを入れた。

陽香は休むことをためらっていたから俺が無理やり座らせて体を抱き寄せた。

「なっーっー」

「ほら、休め。木の上は不安定だったろ？」

「~~~~」

「俺たちも休むからな。・・ほら、ラルもこっち来て休め。」

ラルも自分のほうへと引き寄せ、ラルの頭を俺は撫ではじめる。

ラルはじきに目を閉じてまた眠る。

まだ昨日の疲れを引きずっているようだ。

陽香も安心したのか眠り始める。

俺は周囲の気配をうかがいながら眠りについた。

だが眠りについたとはいえ、すぐに俺は起きた。

陽香の呼吸が速かったからだった。

俺は陽香の額に手を当てる。

「おまえ・・・無理に炎なんて使うからだぞ？」

俺はそう言って陽香を抱き上げた。

陽香の顔色は悪く陽香は意識がはっきりしていなかった。

俺が陽香を抱き上げたときにはラルもすでに起きていた。

「ラル、川辺のほうにいったん戻るぞ。」

俺はそう言って川辺まで戻った。

そして川辺の近くにある日陰に陽香を横たわらせた。

陽香の胸元にあるイールからの防暑対策である青いクリスタルは以前より輝きを失っている。

俺は自分のズボンに入っていたタオルを出す。

人間界から持ってきた唯一の物になるかもしれない。
服はこっちに来て体と共に変化してしまったのだから。

そのタオルを川の水でぬらす。

ラルはじつと陽香を見ていた。

俺はぬらしたタオルを陽香の額にかける。

・・・これで熱が下がればいいが・・・

考え込んでいる俺にラルは体を摺り寄せてきた。

まるで猫が自分の飼い主に寄り添うかのように。

「疲れが出てきたただけならすぐに熱は下がるさ。」

俺はそう言いながらラルの頭を撫でる。

・・・陽香・・・ほんと、疲れや暑さによわいんだな・・・

俺は思う。

陽香といるときよく力を使った後とかには意識失ってたときが多かったなあ・・・

今になるとそれも思い出の一部だが・・・

ここは川の近くだからなのか結構涼しい。

夜になると余計涼しくなった。

・
目的地まであと少しだけど陽香がこんな危うい状態ではいけないな・

俺はそう思いながら横になった。

時々、タオルをぬらしたりして一日中様子を見た。

「ラルは・・・なんともないのか？暑さや寒さは・・・」

「暑さは平気。寒さは苦手。」

ラルは答える。

「そうか・・・俺も寒さは苦手だな。じゃあこっちに来いよ。一緒にあったかいぜ？」

「・・・」

俺はそう言うが俺の隣に陽香がいるせいか俺と少しはなれたところにいて動こうとしない。

俺は無理やり捕まえて

「一緒ならあったかいだろ？」

と、聞く。

俺は横になりながらも腕でラルを体に引き寄せた。

「・・・」

ラルは黙ったまま何も言わない。
抵抗もしない。

ラルは隣にいる陽香を鋭い目つきで睨んでいるだけだ。

・ラルは・・・陽香が嫌いなのか・・・？
・それとも・・・こういう性格の奴と何かあったんじゃないのか
？過去に・・・

俺はラルを撫でながら

「陽香がそんなに気に食わないのか？」

と、聞く。

「心が嫌い」

ラルは答える。

心？

感情、か？

意思、か？

思考、か？

「そう、心の中でもっとも嫌いなのは思考。」

ラルは俺の考えることをずばりと当てる。

「!・・・俺の心を読めるのか?」

驚きながらも聞く。

「読めるんじゃない。感じるの。」

冷たく言い放つ。

「そうか・・・じゃあ、過去にそれに辛い目にあっただろ?」

「・・・不気味とか思わないの?」

俺の問いに答えずラルは聞く。

「心を感じることは不気味とは言わないんじゃないか?俺は別にすごいことだと思っただけ?」

それに俺もなんとなく察するんだよね。

人の性格で過去にどういうことがあったかが。」

俺は言う。

ラルは目を見開き俺を見つめる。

「性格っていうのはさ、自分の経験したことで変えてしまうことが多いんだ。」

怖い・辛い・悲しい・苦しい

そういう感情は人によって対処法が違っただけ、過去に会った嫌な事がその対処法を制限してしまう。」

自分を縛り付けてしまっただ。
言っている意味分かったか？」

俺はそう言って聞く。

「・・・なんとなく。」

「なんとなく、か。それでいいさ。自分のことなんて自分が一番分
からないからな。」

でも俺が思うに陽香とラルは似てると思うぜ？。」

「似てる？。」

俺の言葉におうむ返しで聞き返すラル。

「ああ。しゃべり方こそ違うが辛いのを我慢しようとするところと
か。」

陽香は甘えることを我慢しなくなったがあった当時はそうだったか
らな。

ラルも今さっき、拒んだだろ？。」

「・・・。」

俺の言葉に黙るラル。

俺はラルを撫でて

「甘えていいんだぞ？そのほうが俺もうれしいしな。」

と、恥ずかしながらも言う。

「うれしい？」

なんで？と、心底分らないと言う風な表情をラルがした。

「昔のこと思い出すからな。小さい義理兄弟の姿が。理由になってないか？」

「……。なってる気がする。」

ラルは答える。

「じゃあ寝るか。お休み」

俺はそう言っで眼を閉じる。

「お休み」

ラルもそう言っで眼を閉じる。

・ ・ かわいくて仕方ないんだよな、

俺は・ ・ 独りでいるところを見ていると誘いたくなるからな。
以前、自分がそうだったように・ ・

俺は心の中でそう思いながら寝た。

第二十九章 疲れ（後書き）

話が進まなくてごめんなさい。

次回は頑張ります。

感想お待ちしています。

第三十章 目的地到達

陽香が回復した後、俺たちは目的地へと向かった。

「本当に・・・ここ、なの？」

陽香が俺に問う。

「・・・地図はここを指しているからたぶんここだな。俺も信じられないが。」

俺は素直に言う。

陽香が聞いてきたのも無理はない。

そこは泉があるだけなのだから。

俺たちは崖に囲まれた泉を呆然と見ていた。

鉱物、と言うからには山だろうと思いつ込んでいた。

だから 本当にここなのか？ と聞かれれば 本当によ とはいつきりいえない。

この泉を目の前にしてするリアクションが一番これがベストなのかもしれない。

「・・・鉱物を取って来いって言ってたけどどうすればいいのかしらね？」

陽香が俺に聞いてくる。

「俺に聞かれても……。そうだ。ラル、なんかゼレナルたちに聞
いていないのか？」

俺はラルに一応聞いてみた。

いい答えがあれば良いが。

「・・・泉に飛び込めって言ってた。ただそれだけ。」

ラルは言いにくそうに言った。

「飛び込む？そうだったのか？」

「うん。」

俺の言葉に頷くラル。

「飛び込むの！？・・・私、嫌だわ。」

陽香の顔色が悪い。

「水が・・・怖いのか？・・・過去に何かあったか？」

俺は思わず口に出してしまう。

陽香は俺の言葉に驚きを示した後、

「水は嫌いなものよ。だから・・・」

陽香は弱気な声で言う。

「じゃあ、俺の風の結界の中に入ろう。そうすれば水に触れなくて済む。

俺は一応もぐるが。」

俺はそう言って呪文を唱えだす。

そして呪文は完成した。

「いくぞ？」

「・・・ええ。」

「うん。」

俺の言葉に陽香とラルは頷く。

俺は自分たちの周りを風の結界で包み込んだ。

そして浮き上がり水の中へ入っていく。

ズズズー ジュワァー

泉の水は俺たちをまるで歓迎するかのようにさしたる抵抗はなく俺たちを中に導いてくれるようだった。

水の中にすぽつと入った中では日差しで明るくきれいな景色だった。

魚が優雅に泳ぎ、泉のそこはまるでサンゴ礁のよう。

俺は結界をつまく操って泉の中を探検する。

しばらくそんな状態で見回していたりすると一つの洞窟が見えた。

「行ってみるか？」

「・・・ええ。」

「うん。」

俺の言葉に陽香とラルは頷く。

だが陽香は明らかに戸惑っているようだった。

俺はその洞窟に近づいた。

だがその洞窟はあまりにも小さくて結界のある状態では無理そうだった。

「どうする？いったん上に戻るか？」

「・・・」

俺の言葉に陽香はひどく青ざめていた。

「このままじゃ入れない。」

ラルが言う。

「っゝゝ」

陽香は怯えた目をしながら水を見る。

俺は思わず陽香を抱いてしまった。

「！」

陽香は声も上げずただ驚くばかりだった。

体が・震えている。

水がそんなに怖いのか・

「陽香・水が怖いんだな。・大丈夫だからいったん戻ろう・
な？」

俺は抱きしめたまま言う。

きつと過去になにかあったんだ。

トラウマになってるかもしれない。

でなければいつものように強気な態度でごまかすに違いない。

「っー」

陽香は震えながらもコクンと小さく頷く。

「じゃあ戻るぞ。」

俺は結界をコントロールして水面に向かって戻る。

そして陸に到着した。

「・・・あの大きさからすると一人ずつしか入れないな。
あと、水面から距離が遠いし息も続かない。」

俺は言う。

「俺が小さい空気の泡を作って顔をそれで覆えばいいがやっぱりもぐるしかないな。」

俺がそう言つと陽香はしゃがんで震えだした。

俺もしゃがんで陽香の肩を抱く。

「大丈夫。俺が陽香を運んでやるからずっと目を閉じていればいい。
水に触れたくないのは分かってる。

だけど、俺がいるから不安がらなくていい。
だから、行こう、な？」

俺は陽香を説得するように言う。

だが陽香は何も言わない。

これでもだめ、か。
だとすると・・・

「陽香、顔上げろ。そして俺の瞳^めを見るんだ。」

俺は陽香と向き合い、陽香のあごに手をかけて視線を合わせる。

陽香は俺を怯える瞳で見つめ上げる。

水に触れたくない。怖い・・・水が。だから・・・嫌なの。

その陽香の意思が俺に伝わってくるようだ。

これしかない・・・この方法しか水には連れて行けない。

俺はそう考え込んだ後、心の中で呪を唱える。

「陽香、しばらくお前の意識を失わせる。ごめんな。」

俺はそう言つて陽香の唇に自分の唇を重ねる。

俺は唇が重なったと感じたらすぐさま陽香の口に舌を入れる。

「んっ・・・ん！・・・んう・・・・・・」

陽香の甘い声が漏れる。

俺の舌に驚いているんだと思う。

俺は舌を上手く使い、陽香の舌にあるものをすりこんでいく。

「・・・んっ・・・んんう・・・んんっ・・・」

陽香はもがくが俺はしっかりと腕で押さえつける。

陽香は必死に自分の舌を動かして拒否しようとする。

俺は唇をがちり押さえつけ、自分の舌で陽香の口の中を這いずっていく。

拒否を陽香は続けていたがそのうち受け入れられずにはいられなくなり、

俺の思惑通りになった。

呪、発動！！

俺は自分の舌が陽香の舌と絡めたとき、発動させた。

陽香は自分の舌から感じる異変にさっきから感じていたらしかったから今も必死で拒絶している。

だが、それもしばしの間だけ。

陽香の体から力は抜けて、抵抗力もなくなる。

陽香の体が俺の方に倒れるように重みが来る。

俺は唇を放した。

そして倒れそうになる陽香の背に腕を回し支えた。

「ごめんな・・・」

俺は呟く。

陽香は必死でまぶたを開けようとするが無理だったらしく、眼を閉じる。

そして陽香は意識を失った。

いや、俺の呪によって失われたんだ。

今のは一時的に意識を手放させる ひろうしゆつけき呪 疲労襲撃呪。

それは呪者（呪を発動させる人）の疲労を相手に移し相手の疲労も加えた

その全部を襲わせ意識を失わせる方法なんだ。

だから呪者の疲労 プラス + 相手の疲労 | を > 相手の体

に移すこと なんだ。

呪を心の中で唱えながら自分の舌に呪を移動させ発動させながらその力を解放させる。

それが口移しの疲労襲撃呪なんだ。

俺は陽香の体を抱き上げて立ち上がる。

第三十章 目的地到達（後書き）

せっかくガールラブを注意書きに書いたので入れてみました。
次回は今回の話を陽香視点で書こうと思います。

第三十章 目的地到達（陽香視点）

「本当に・・・ここ、なの？」

私は目的地に着いたとき陽魔に聞いた。

「・・・地図はここを指しているからたぶんここだな。俺も信じられないが。」

陽魔は私の言葉に答えた。

信じられない・・・ここは泉よね・・・どうみても・・・

私は目の前にある光景を凝視していた。

崖に囲まれた泉がぽつんとあるだけの風景を。

「・・・鉱物を取って来いって言ってたけどどうすればいいのかしらね？」

私は陽魔に聞いてみる。

水にはもぐらないことを祈って。

「俺に聞かれても・・・。そうだ。ラル、なんかゼレナルたちに聞いていないのか？」

陽魔は私の疑問をラルにまわして聞いた。

「・・・泉に飛び込めって言ってた。ただそれだけ。」

ラルは陽魔の言葉に言いにくそうに言う。

！・・・もぐりたくない。水に触れたくない。

私は心の中で呟く。

「飛び込む？そいつたのか？」

陽魔がラルに再び問う。

ごくり・・・

私はつばを飲む込んだ。

「うん。」

陽魔の質問にラルは頷いた。

「飛び込むの！？・・・私、嫌だわ。」

私は言った。

私は今非常に顔色が悪い気がする。

飛び込みたくない。

その感情が私を飲み込もうとする。

「水が・・・怖いのか？・・・過去に何かあったか？」

陽魔は私に問う。

私は驚いた。

何で分かったの！？

どうして・・・

私、水が嫌いなよ・・・怖いよ・・・

「水は嫌いなよ。だから・・・」

私は小さく弱々しく伝える。

陽魔に迷惑かけちゃいけないのは分かってるんだけど・・・

「じゃあ、俺の風の結界の中に入ろう。そうすれば水に触れなくて済む。――」

陽香にはその言葉を聞いても不安は消えなかった。

不安が音を消すかのように陽魔の声が聞きずらくなる。

陽魔は呪文を唱えた。

私はその間、水が怖くてどうしようもなかった。

ただ・・・水に触れないのなら・・・もうわがままは言わないことにしようと思った。

「いくぞ？」

陽魔の声に

「・・・ええ。」

と、私は戸惑いながらも頷く。

「うん。」

ラルも頷くが少し声が震えているように私は聞こえた。

そして私たちは結界に包まれた。

泉の中にもぐってすっぱり入ってしまう。

水の中の風景はきれいだと私は思ったが、過去の思い出が次々と脳裏によぎる。

陽魔は私やラルに向かって

「行ってみるか？」

と、洞窟を指し示して聞く。

嫌な予感が・・・胸騒ぎが・・・私の心の中でざわめいた。

戸惑いながらも私は

「・・・ええ。」

と、頷いた。

「うん。」

ラルも頷いた。

ラルも多少戸惑っているように見えた。

洞窟の方へ近づいたが小さくて結界のままじゃ入れそうになかった。

「どうする？ いったん上に戻るか？」

「・・・」

私は陽魔の問いに答えられなかった。

いったん上に戻ってからどうするの？

私・・・もぐりたくない・・・

水に触れたくないっ

水への恐怖心が言葉に出すのを拒否しているのが自分でも分かる。

「このままじゃ入れない。」

ラルが悔しそうに私に言うのが聞こえた。

分かっているわよ、そんなの・・・

そういいたかった。

でも言葉は出なかった。

「っゝゝ」

私は言葉には出せなかった。

私は私を囲む水を見る。

怖い。触れたくない。・・嫌だ。

そう思つて水を見つめる。

すると、私はいきなり陽魔に抱きしめられた。

「！」

言葉に出したくても・・突き飛ばしたくてもできなかった。

なんで・・私は抱きしめられてるの！？

疑問が体中を駆け巡る。

「陽香・・水が怖いんだな。・・大丈夫だからいったん戻ろう・・
な？」

陽魔は私を抱きしめながら言う。

陽魔・・私はあなたが分からない。

私のこと・・気づいてるんだよね？

それで不安を取り除こうとしてるんだよね？

でも・・・私・・・水は嫌い・・・怖い・・・
だけど・・・仕方がないんだよね・・・？

「っーーーー」

私は言葉にならずくくと頷くことしかできなかった。

体が震えている。

過去の記憶がよみがえる。

前世の記憶ではない幼い自分の過去が・・・

私は涙を止めるのに必死だった。

「じゃあ戻るぞ。」

陽魔はそう言って水面へと移動させる。

そして陸に着いた。

「・・・あの大きさからすると一人ずつしか入れないな。
あと、水面からの距離も遠いし息も続かない。」

陽魔は言う。

それ以上、私に言わないで・・・
もぐりたくないの・・・
水が・・・怖い・・・やめて・・・

私は足に力が入らなくなった。

「俺が小さい空気の泡を作ってそれで顔を覆えばいいがやっぱりもぐるしかないな。」

陽魔が仕方なさそうに言うのが聞こえる。

私、水にいれられるっ!?

私は立っていらなくなっちゃがんでしまう。

水・・・怖いよ・・・水・・・いやだっ・・・ふれたくない・・・

私は震えだした。

陽魔もしゃがんだ。

そして私の肩を抱く。

「大丈夫。俺が陽香を運んでやるからずっと目を閉じていればいい。水に触れたくないのは分かってる。

だけど、俺がいるから不安がらなくていい。

だから、行こう、な？」

陽魔は私を説得するように言うが私の心は動かない。

・・・それでも・・・私・・・水に触れたくない・・・怖い・・・
・・・いやなの・・・嫌いな・・・
・・・過去と同じ目にはあいたくない。

私は心の中で渦巻いていた。

「陽香、顔上げる。そして俺の瞳^めを見るんだ。」

陽魔にそう言われ無理やりあごを上げられた。

水に触れたくない・・・怖い・・・水が。だから・・・

私は陽魔にその思いが伝わるように見上げる。

陽魔は私を見つめ顔を歪ませた後

「陽香、しばらくお前の意識を失わせる。ごめんな。」

と、言う。

そして陽魔に口をふさがれた。

そして口を閉ざすことができず、陽魔の舌が入ってきた。

唇と唇が重なり、深いキスに私は吸い込まれそうだった。

だが、陽魔の舌から異様なものを感じた。

だから拒否をしようともがいた。

「んっ・・・ん！・・・んう・・・」

私の声が漏れる。

陽魔っ・・・いたい・・・何を・・・

陽魔は舌をうまく使って私の口の中を動き回る。

なんだろう・・・力が・・・いれない・・・
疲れが押し寄せてくる嫌な感じが・・・

私はもがくが押さえつけられ唇もがうちりふさがれる。

陽魔の舌が私の舌と絡まった瞬間、異様なものが私の口の中にあふれてのどへと伝わってきた。

や、めてっ・・・陽魔・・・

必死に拒絶をするがそれは体中に伝わった。

私は体から力が抜けて抵抗力を失った。

陽魔はそのころあいを見計らってか唇を放す。

私の体は陽魔に支えられた。

私は陽魔を見上げた。

脱力感と疲労感が体中を駆け巡った。

・・・陽・・・魔・・・呪・・・なん・・・か・・・を・・・お・・・

「ごめんな・・・」

陽魔の弦く声が聞こえた。

私は体中を襲うものに耐えられなくなり、私は意識を失った。

第三十章 目的地到達（陽香視点）（後書き）

次回はしっかり話を進めます。

次からも少しずつ陽香視点もまぜて書いていこうと想います。
ベースは主人公の陽魔ですが・・・。

第三十一章 洞窟

陽魔は陽香を抱き上げた後、呪を唱え始めた。

早くしないとな。

陽香は回復力が高いからな・・・

そう思っているがやはり意識を奪うことには後悔している俺だった。

「ラルは大丈夫か？」

俺はラルに一応聞いてみる。

「水は・・・嫌い。でも陽香ほどじゃない。」

ラルは言いにくそうに言う。

「そうか・・・。ならラルの周りに薄く 呪輪^{じゆわ}をはるか？」

俺は聞いてみる。

呪輪^{じゆわ}つてのは呪を輪のように広げる効果範囲を広げる奴なんだ。

陽香にはできないが・・・ラルぐらいの大きさなら・・・。

そう思いながら聞いたのであった。

「どうして陽香にしなかったの？」

ラルは意外そうに聞く。

「陽香ぐらいの大きさには長い時間は貼ることができない。ラルぐらいならちょうど良いのさ。」

俺の消耗も陽香じゃちよつときついからな。ラルも怖いんだろ？水が。」

俺はそう聞き返す。

「・・・正直に言つと怖い。」

ラルはそう言う。

「そうか、なら・・・貼るぞ。」

おれはそう言つて両方の呪を唱えて発動させる。

おれと陽香とラルの頭はおれの空気の泡で覆われ、ラルの体は呪輪で覆われた。

「いくぞ。」

おれはそう言つて陽香を抱きながら水に飛び込む。

ラルも頷き、泉に飛び込む。

ばっしゃーん！！！！

大きな音を立ててもぐり始める。

水が体中に圧迫感を与える。

服が水を吸収して重くなる。

尻尾にも異様な感触がして俺は身震いした。

・・・この尻尾って豹のだよな・・・

俺、ネコ科　は　水が嫌い　なことすっかり忘れてた。

俺は身震いに耐え、洞窟のほうへ向かう。

水に入っても息苦しくはない。

俺は陽香を肩にかついで片手でおさえ、足ともう片方の手で水の中を突き進んだ。

ラルも脚を使つてうまく水の中を進む。

そして俺たちは洞窟の前までやってきた。

洞窟の中がどうなっているかは暗くてよく分からない。

入るぞつて俺が言おうとしたとき、突然、水に異変が起きた。

ズウオ”オオオオオオ

水は渦を巻いて俺たちを巻き込む。

俺は陽香を降ろしかばうように抱いた。

水は意思があるかのように洞窟の中へ俺たちを引き込む。

ギギギイウイイオオオ” ”

体を締め付ける水があまりにも強くて抵抗ができない。

そして俺たちは洞窟の中に引き込まれた。

引き込まれる途中、体のあちこちを打ち付けて俺は意識を失った。

・ ・ ・

「・・・ま。・・・うま。・・・ようま・・・陽魔・・・」

誰かが俺を呼んでいる。

その声で俺は目を開ける。

視界に移ったのは暗闇の中に目を光らせるラルだ。
俺の腕の中には意識のない陽香がいた。

「・・・ラル・・・ここは・・・洞窟の中、か？」

俺はとりあえず上半身を起こし、ラルに問いかける。

「・・・たぶん。」

私も気を失ってたからよく分からない。
気がついたときにはここにいた。」

ラルが俺を見つめて言う。

「そうか。しかし・暗闇はきついな。明るくするか。」

俺はそう言って 妖 の能力を使い明かりを灯す。

そうすると、次第に洞窟の奥の方も明るくなった。

連鎖反応が起こったのだろう。

しばらく洞窟の中を見渡していると

「・・・ん・・・」

と、陽香から声が漏れた。

俺は陽香を抱き上げ、

「大丈夫・・・か？」

と、聞く。

「・・・」

陽香は何も言わない。

意識が取り戻せても体が遅れているのだろう。

陽香の目は空虚で俺やラルが視界に映っているか怪しいものだった。

陽香は俺を見上げるがまだ意識ははっきりしていなさそうだ。

俺は炎を地に灯しぬれた服を乾かそうと近くによる。

俺は陽香を抱き寄せて温まらせる。

俺は陽香の頬に手で触れる。

冷たい・・・

俺は心の中で呟いた。

陽香の体から暖かさを感じない。

きつとぬれたせいだと思う。

ラルも炎の傍で毛づくろいしている。

じきに体に温かみが戻ってきた。

「・・・よう・・・ま・・・」

不意に陽香が俺の名を呟く。

「ん？陽香、大丈夫か？」

俺は陽香に視線を向け聞いてみる。

「・・・からだじゅう・・・が・・・だるい。」

陽香は俺を見つめて言う。

「悪かったな。あんな方法をとつて。

あれしか、ここへ行く方法がなかったからな。ごめんな、本当に。」

俺は陽香を見つめて謝る。

「やつぱり・・・ここ・・・洞窟なのね・・・私・・・全く覚えてないわ・・・」

「意識を完全に失つてたからな。
・・・しばらくしたら洞窟の中へ行くから今のうちに休めよ？陽香もラルも。」

俺はそう言つて陽香とラルに視線を向ける。

「・・・ええ。」

「・・・」

陽香は返事をしたがラルはしない。

俺は立ち上がつてラルの傍に寄つた。

俺はラルの顔を覗き込む。

するとラルは目を閉じて寝息を立てていた。

俺はラルを撫でて傍に腰を下ろす。

陽香は俺の傍までふらふらとした足取りで近づいてくるから慌てて俺が受け止める。

「まだ歩くな。俺ならここにいるから。休もう、な？」

俺はそう言って陽香を抱きながら地面に横になる。

「俺も寝るからな？」

俺はそう言って陽香を抱き寄せる。

「・・・お休み」

陽香がそう言って俺に身を寄せて目を閉じた。

「ああ」

俺もそう言って眼を閉じ眠りについた。

第三十二章 道は己の力で切り開け

皆が目を覚ましたから陽魔はラルと陽香を引き連れて洞窟の中を進んだ。

・・明るくなっていく・・まるで俺たちを導いているかのようだ。

俺は不意にそう思った。

「陽香・・大丈夫か？」

俺は多少疲れ気味の陽香に問う。

「・・ええ。」

陽香は言う。

だが少し疲れているようだ。

俺が運んでやろうかな・・・

と思い、俺がそれを言おうと思ったとき

ゴゴゴゴオオオ””

と、音を立てて地面が揺れた。

ピキピキピキィッ

そんな音を立てて次々と地割れが起きた。

なっ、なんなんだっいたい!?

俺はそのことに動揺した。

ラルも陽香も動揺している。

俺はすばやく陽香を抱きラルも片手に抱いた。

そのとき、今まで以上のことが起きた。

洞窟の奥からたくさんの岩が転がってきたのだ!!

「!!!?!」

俺はそのことにびっくり仰天。

おいおいおい、こんなことってあるかつ!?

地割れで地面が割れたのにもかかわらず岩はその中に落下はしない。

それに加え意思があるかのような動きで俺たちのほうに向かってくる。

俺はいったん自分の傍に陽香とラルを置き、

妖の風 を呼び出して岩を切り裂いて粉々に砕いた。

シュツシュツ・・・スパパパン。

そんな感じで。

そしてそれを何度か繰り返すうちに岩は転がってこなくなった。

「一体何なんだったんだ・・・」

まあいいや。とりあえず進むか。」

俺は独り言のように呟いた。

俺は呆然と俺の傍にいる陽香とラルを抱き上げて奥へ進んだ。

少し奥に進むと、次は大木が道を通せんぼしていた。

「あー行き止まりだな。・・・」

俺はでっかい大木を見上げて言う。

「私・・・やる。」

ラルが俺と陽香にぼそりと呟いた。

「じゃあ頼む。」

「頑張つて。」

俺が言つて陽香も言う。

「うん」

ラルが頷き、呪文を唱え始める。

「雷よ、打ち消せ!!」

ラルが強く言ったその言葉で大木は一瞬にして消え去った。

ダーン!! シュールルルル……

と言うような音を立てながら。

「さすがだ。…サンキュな。」

「すごいわ。」

俺と陽香はラルに言う。

「……」

これで進める。」

ラルは俯いて言う。

言葉は静かで小さいが少しうれしさも混ざったように聞こえた。

俺たちは大木を消し去った後洞窟の中を進んだ。

進んだけれど迷いが俺たちには生じた。

分かれ道になったからだ。

選択肢は・・・右か左か真ん中か。

そのどれかである。

「どっちにする？」

俺は誰にと言つより皆に聞いた。

「・・・」

「真ん中。」

ラルは無言で陽香ははっきりと言つ。

・・・真ん中？

「陽香、それはなんでだ？」

俺が問うと、

「・・・右も左も幻覚だからよ。」

と、答える。

幻覚？・・・どう見ても普通の分かれ道な気がするなあ。

俺は納得がいかないまま

「じゃあ、真ん中を選ぶか。」

と、言つて真ん中を選びその道を進んだ。

その道も少し進むと分かれ道があつた。

「これはどうする？」

俺が聞くと

「・・・」

「・・・」

と、二人は答えない。

「幻覚じゃないってことなのか？」

俺が聞くと

「そうよ。だから分からない。

・でも、右に引き寄せられるの。」

と、陽香が答える。

「そうか。なら右に行くか。

右が違つたら戻ればいいんだからな。」

俺はそう言つて二人を促す。

そして右を選んで進んだのだった。

すると急に霧のようなものがかった。

「ん？」

「？」

「・・・」

俺は、ん？

と首をかしげ立ち止まりラルは無言で首をかしげる。
陽香はたたずんでいる。

「陽香？」

「・・・」

俺は声をかけるが返事がない。

「？」

俺もラルも？が頭に浮かぶ。

「・・・私を・・・呼んでいる・・・いかなくちゃ」

突然陽香が言い出し霧がかかっているのにもかかわらず前に前にと進んでいく。

「お、おいっ」

俺が呼び止めても全く見向きもせずそのまますたすた歩いていく。

陽香の姿はあつという間に見えなくなってしまった。

陽香・どこにいったんだッ

俺たちも陽香が見えなくなってしまったほうに向かって歩いているとき

ガタッ・ズリッ・ズザズザザー・・・・・・・・

という音が洞窟に鳴り響いた。

「!？」

「!?!」

陽香っ。お前なのかッ!?!こんな音を出したのは!!

「陽香あーっっ!!」

俺は叫んだ。

だが返事は返ってこない。

「くそっ！」

俺は舌打ちしたい気持ちに駆られた。

「・・・霧が邪魔ッ」

ラルも悪態をついた。

「霧が陽香をつ！・・・仕方ない霧を吹き飛ばす。」

俺は言った。

「これは普通の霧じゃない。」

ラルが悔しそうに言う。

「ああ、分かってるさ、そんなこと。
だが戸惑ってる場合じゃない。」

俺はそう言って、風を唱えだす。

「霧を吹き飛ばせッ！！」

俺は叫び霧を吹き飛ばした。

するとそこに見えたのは・・・なんとそこが見えないくらいの高さの崖だった。

第三十二章 道は己の力で切り開け（後書き）

これから更新が遅くなります。

できるだけ早く更新できるよう努力しますがご了承ください。

第三十三章 崖の下にある物

俺の風で一瞬霧が切り開かれた。

そこに見えたのはそこが見えない崖である。

「くそつ。陽香はここで落ちたのか。俺たちも行くぞ、ラル。」

俺はそう言つてラルをかついで崖から飛び降りる。

ヒューー

落下の速度は意外にも早かった。

風を切る音が耳元に聞こえる。

俺は風を操り下へと急いだ。

そうしている間にもまた霧がかかった。

「これは普通の霧じゃない」

ラルが呟く。

「分かつてるさ、そんなこと。さっきも言つたろ？」

俺がラルに言い返す。

「言つたけど・・・」

ラルは押し黙った。

俺は風を操り、霧を何度も吹き飛ばした。

何回も霧を吹き飛ばし、安定感を保って落下するのは多少きつかった。

そして地面に降り立った。

そこで見たものは！！

「陽香っ！！？」

俺は叫んだ。

なんと陽香は体中に深い傷を負ってまで降りた地の向こうに行こうとしている。

陽香の向こうにあるものは凍った泉に浮いている大きなクリスタルだった。

クリスタルは淡い輝きを放って陽香を引き寄せているのだろう。

体はもうぼろぼろで限界のはずなのに陽香は顔を歪ませながらもそのクリスタルに近づこうとしている。

「陽香！！」

俺は陽香を後ろから抱きしめて動きを止めた。

陽香・・・もういい・・・もういいよ。

「は・・・な・・・し・・・て・・・」

俺が抱きしめても尚行こうとする陽香。

なぜそんなに引き寄せられているんだ。

そこまでして陽香を苦しませる必要がどこにある。

陽香・・・もういい、やめてくれ。

「陽香・・・もういい。戻ろう。

この場から離れよう。」

俺はそう言って陽香を抱き上げた。

「は・・・な・・・して・・・いか・・・せて・・・」

陽香の口から声が漏れるが体は俺にされるがままだ。

俺はクリスタルのほうを見た。

淡い輝きを放ち俺を嫌悪している。

俺にはどうして陽香が引き寄せられたかが分かった気がした。

俺と陽香は 表裏一体 だ。

俺たちは正反対の能力の保持者だ。

だから俺は寒いのが苦手。

だから陽香は暑いのが苦手。

つまりそういうことだ。

俺を嫌悪するクリスタルの力は陽香と同類の力を持っているのだ。

だからきつと、

俺をひきつけるクリスタルがあるとすればそれは陽香を嫌悪するだろう。

それと一つ思ったことがある。

武器を作るためにはこのクリスタルがほしいのじゃないかと。

「クリスタルよ、オマエに意思はあるか？」

俺はクリスタルに問いかける。

「・・・・」

クリスタルは淡い輝きを放つだけだ。

「意思があるなら答えろ。」

俺がそう言つと

「我は意思を持つ。ゆえにその女を呼び寄せた。」

と、答えた。

「それはなぜだ？」

俺が問う。

「我とその女は同じだ。

いや、その女の前世が我と同じだ。

ゆえに我はその女の武器となるにふさわしい。」

と、クリスタルは淡々と言う。

そうか・・・武器には自分と同じ波動を持つ鉋物クリスタルがほしいのか。

「呼び寄せた理由がそこにあるならなぜ陽香を傷つけ暗示をかけた？」

俺は怒りに満ちた声で問う。

「暗示？我はその女に呼びかけたただけ。
暗示などかけてはいない。」

クリスタルは答える。

「呼びかけ、か。じゃあこれは陽香に対する試練と言う奴か？」

俺は聞く。

「そうだ。ここまで来るのにいくつかの喚問があった。
それを潜り抜けたら我はその女に従おうと思った。
その女は前世の生き写しだ。」

唯一違うところと言えば、前世は水を好み霧を嫌った、そしてその女は霧を好み水を嫌うところだけだ。だが、我は気に入った。

ゆえに我はその女の武器となるだろう。」

クリスタルはそう言って小さくなり陽香の額にくつついた。

「言い忘れていた、我は汝が嫌いだ。」

クリスタルは最後にそう言って輝きを失った。

「俺は陽香は好きだがクリスタルは嫌いだ。あんた」

俺はそう言い放った。

「終わったみたいだね。霧が晴れた。」

ラルはそう言って上を見上げた。

俺は陽香を横たわせ、苦手な能力だが癒し系の呪文を唱えた。

「ラル、少し手伝ってくれ。今の俺の魔力じゃ足りない。」

俺はそう言って助けを求めた。

「私・・・専門外。」

ラルはそう言った。

「頼む。陽香が危ないんだ。専門外でもできるだろう？

増幅するだけでいい。頼む。
陽香が嫌いなのは分かってる。だが、俺のためと思えば悪くないだ
ろっ?。」

俺はそう言っつて陽香に手をかざした。

「……。しかたない。」

ラルはそう言っつて俺の手に自分の前足をかざした。

陽香が光に包まれた。

その輝きがラルのおかげでより輝きを増した。

俺やラルに汗が染み渡ってきた頃、陽香の傷は徐々にふさがって
いった。

俺がもう大丈夫だと安心すると陽香から光が消え去った。

ラルは肩で息をしていた。

「サンキュな、ラル。」

俺はラルをひざに乗つけて頭を撫でた。

「……もつと……なでて……。」

ラルが小さい声で甘えた声を出す。

ラル……可愛いなあ。

俺はラルによしよしと頭を撫でて抱いてやった。

ラルの毛皮がふさふさしていて気持ちがいい。

「さっきのご褒美は何かいい？」

俺は聞いた。

「このまま続けてくれればいい・・・」

ラルは気持ちよさそうに目を閉じて小さく言った。

「ああ、わかった。」

俺は頷いてラルを胸元に抱き寄せて頭を撫でたり背中を撫でたりした。

第三十四章 鉱物の役目

俺は陽香が意識を取り戻すと体力を回復させた。

どうやら俺の尻尾は癒す効果があるみたいだった。

「俺の尻尾、そんなに効果があるのか？」

俺の尻尾に触る陽香とラルに不本意ながらも聞いてみた。

「すごく効果があるわ。」

「癒される。」

二人は目を閉じて癒されているような表情をする。

俺の尻尾・・・邪魔だと思ってたが案外役に立つじゃんか。

俺は自分の尻尾の存在価値を認めた。

今まで人間だったせいか、いや、目の色が変わっても能力が目覚めても実感がわかなかった。

だが、この世界に来て、尻尾が生えて・・・認めたくなかったけど認めなければならなかった。

そしてこの尻尾の存在がどうにもなじめず嫌だった。

だが、今、陽香を救えて、みんなの糧となっているならば、認めざ

る終えない。
むしろ喜ぶべきだ。

「そうか・・・」

だが、心とは裏腹になんかどうもむなしい声が出てきた。

たぶん、今、活躍してるのは俺じゃなくて俺の尻尾だからだと思う。

俺は陽香の体力、魔力、ラルの・・・以下同文を感じ取った後、
尻尾を陽香たちから放した。

「次、行くぞ。陽香のクリスタルは手に入れたんだ。
次は俺のだ。」

俺はそう言ってまだ不服そうな陽香を立ち上がらせた。

「あのクリスタル、ここにあるのね」

陽香はそう言って自分の額を指し示す。

「ああ。」

俺は頷いて、陽香とラルを抱き上げた。

「行くぞ。」

俺は 妖の能力、風 を操って崖の上を目指した。

そして分かれ道のところまで戻った。

陽香たちを降ろして俺自身が呼び寄せられる方へ歩いていった。

「こつちだ」

俺は指し示して歩き出した。

俺を呼び寄せる力が進むほど強くなっているのがわかった。

そして陽香を拒んでいることも。

そして陽香は耐え切れずその場にしゃがみこんだ。

「おい、大丈夫か？

・・・無理もないか。

これは陽香を拒んでいる。」

俺は呟き、しゃがみこんで陽香を覗き込んだ。

陽香の顔は苦痛で歪まされていた。

俺は・・・拒まれなかったのに・・・。

俺は心の中で呟きながら、尻尾で陽香を癒した。

尻尾にラルも寄り添ってきた。

俺の尻尾によって陽香の具合はよくなったがこれ以上先には無理に近かった。

ラルももしかしたら拒まれるかもしれない・・・

俺は自然とそう思った。

獣といってもラルは幼い。

そして雷は炎と似た境遇にあるけど俺のとは異なるはずだ。

そしてラルの放つ波動・・・神気は非常に弱い。

たぶん、その神気さえ強ければ受け入れてくれるかもしれない。

神気・・・それは獣特有の波動であり、

神の放つ気でもあり、獣は最も神に近き存在なのである。

俺は

「ラル、陽香、今、結界を張るから安心しろ。」

と、言つて二人の周りに俺の結界を張り巡らせた。

これなら、拒まれないだろう。

俺は陽香を抱き上げて再び歩き始めた。

ラルも表情が緩んで俺の傍を歩いた。

俺のゴクわずかな範囲にその結界はまわりついて動いていた。

「ここか。」

俺は呟いた。

少し暑くなっただかと思っただとき、道は開けた。

そしてそこは熱気が漂うマグマの中だった。

この洞窟どこまでつづいてんだよ・・・

ふいにそう思った。

俺は暑さと俺を呼び寄せるものに苦痛を感じていた陽香とラルをその場に残して結界を強化した。

「ラル、陽香とそこにいてくれ。
俺はいつてくる。」

俺はそう言っただけ少し崩れている段差を飛び降りて自分を引き寄せるクリスタルの元へと歩み進んでいった。

途中、道がなくなった。

ところどころ足場があったから

ぴょん、ぴょんと、飛びながら進んだ。

奥へ進むたびに熱気と引き寄せる力が強くなった。

「お、あつた」

俺は呟いた。

俺が立ち止まり、その先を見ていた。

それは・・・マグマに浮かぶ　紅いクリスタル。

淡く紅い輝きを放っているクリスタルはルビーを思わせるほど紅かった。

「お前に、意思はあるよな？」

俺はクリスタルに聞いた。

「あるに決まっている。」

そこのお前、あれはお前の連れか？」

クリスタルは俺に問う。

「ああ。何故拒んだ？」

俺は聞いた。

「拒む？」

それはお前の思い込みだな。

我はお前を呼び寄せたかったただけだ。

あやつらには耐えられなかったゆえにあの病状を起こしたのだ。」

クリスタルは淡々と述べた。

拒んでいたんじゃないかったのかぁ・・・

よかった・・・いや、それはよくなかったかな？

「そうか。」

「じゃあ、なぜ、陽香」たちの体調を崩させるほどの力で俺を引き寄せた？」

俺は少しの気でも感じれば、俺は気づいた。」

俺は眉をひそめて聞いた。

「我が気づかなかったのだ。我は洞窟に来たものの気配を感じたがそれがお前なのかは理解できなかった。」

本来のお前ならば、ここまでする必要はなかったのだが・・・
今のお前は力を二段階封じられている。」

クリスタルは述べた。

「封じられている？」

俺が、か？と、付け加えて聞く。

「そうだ。お前は封じられている。」

今のお前の姿は第一段階だ。

完全なる力を解放するには我で作った武器を必要とする。

第二段階はきつかけと我の力添えが必要だ。」

クリスタルは淡々と静かに述べる。

つまり・・・

俺の力を解放するにはどっちにせよ、クリスタルが必要なんだな・・・

ん？第一段階？・・・やな予感が・・・

「そうか。俺は鬼の能力がもつとも優れているらしいからな。そのときに全ての力が引き出せるわけか。で、今、俺の姿は第一段階って言ったな？」

俺は内心動揺しながら聞いてみた。

「左様。

お前の姿は仮の姿でしかない、しかもその初段だ。

お前の姿は力の大きさに対応できる器となるためそのつど変化する。

お前は我が必要だ。それは分かる。

だが、我を扱う理由が分からない。

お前は我を何のために使う？」

クリスタルは俺を伺うように聞いてきた。

「俺は・・・陽香たちを守りたい。

守って前世の俺がしたかったことをしてやりたい。

前世の俺が残してきたものを守りたいからだ。

正直・・・体が変化するのには堪えるが。」

俺は強い意思を込めたまなざしで答えた。

クリスタルに言ったことは全部本当のことだ。

嘘偽りは何一つない。

「そうか・・・、お前はお前の前世とよく似ている。

体の変化を嫌うところもな。

だが、それは仕方がないことだ。

我はお前を気に入った。

我を心置きなく自分のために使うといい。」

クリスタルはそう言っただけ俺の顔に収まった。

「ぐっ」

俺はクリスタルが体に埋め込まれるような感覚を感じてよろめいた。

よろめきひざをついた瞬間、体に変化があった。

「あああつああ！」

俺は体の異変に驚いた。

俺の腕には豹柄模様が刻まれ、おまけに耳まで豹の耳に変化した。

歯も牙に変わった気がした。

・・・これが第二段階って奴か・・・？

俺ははあーとため息をついた。

力も殺気より格段に上がった気がしたのはそのせいだろうが、まさか、ここまで体が変化するとは思っても見なかった。

ああ”人間から遠ざかっていくぅ”

おれはそう落胆した。

能力が目覚めた直後人間じゃなくなってるのは分かってるけど

・元は人間だぞ？

少しは原型にとどまってるほしいぜ・・・

それにしても・・・

俺がクリスタルで作った剣を使って

真の力を発揮したら一体どんな体になるんだろうなあ・・・

俺はもうこれ以上、

異常な体になることはできるだけ避けたいと思ったのであった。

そして陽香たちの元へ戻ったのであった。

三十五章 帰還その1

陽香たちのところへ戻ると陽香もラルも驚いていた。

はあ。

俺はため息をついた。

「俺の額にこれが埋め込まれたせいだ。

不本意だが今の俺は全力を発揮できないらしい。

この姿に驚くのも分かる。

俺も驚いたからな。

さあ、かえるぞ」

俺は一方的にしゃべり、陽香をひょいっと抱き上げた。

それでも来た道へと歩く。

ラルは俺をまじまじと見ながら

「陽魔の本来の姿・・・もしかしたら豹かもしれない・・・」

と、小さく呟いた。

「ラル、それが本当だとしても俺をそんな目で見ないでくれ。
俺は人間なんだ。

と言うよりだったんだからな。

とにかくさっさと帰ろうぜ」

俺はそう言っ てラルをも抱えあげた。

「！」

ラルは何の抵抗もできずに目を見開いたままでいる。

俺はすたすた歩き洞窟の中を突き進む。

そして俺たちが倒れていたところにたどり着いた。

さて・・・こつからまた水があるわけだが・・・

同じ方法でやつちゃおうかな？

俺はさつきから一切何もしゃべらない陽香を見て思った。

そうするか。

陽香をいったん降ろして向かい合わせにした。

何の抵抗もしない陽香にするのもなんだか気が引けるが
これも陽香のためだ。
しかたない。

「陽香、わるい。」

俺はそう呟き、陽香の唇に自分のそれでふさぎこんだ。

「んっ」

陽香は俺を拒もうとした。

だが、俺は拒む力よりさらに上の力で押さえつけ、
触れるだけのキスから深いキスに変えた。

陽香の口の中で舌が絡まりあう。

「ん！・・・んっんう・・・」

陽香は声を漏らす但其の声で俺は理性を失いそうになった。

もっと、乱したい・・・

俺の中で欲情があふれてくる。

呪文を使うことを忘れ俺はキスに夢中になった。

触れ合う唇、絡まりあう舌・・・陽香の甘い声

それらが俺を狂わせる。

そしてそのキスに陽香は力を奪われたかのように俺に体を預けてきた。

俺はぐったりした陽香の体を支え、唇を離した。

「ん・・・はぁ・・・んんっ」

陽香は息を吸う。

そしてその後合った一瞬の隙に俺が口をふさぎつけた。

そして呪文を解放させた。

その瞬間、陽香は気を失い、立っていられなくなった。

俺は陽香の体を受け止め、肩で息をしながら泉へと向かった。

そして俺はラルに水を防ぐ粒子を纏わせた。

俺は指先で弧を描き、浮き上がった輪をラルにかぶせるように包んだ。

ウィン・・・ホワン

そのときに発した音は一瞬で消え去った。

「・・・ありがとう」

ラルは俯いて言った。

「俺や陽香のためにラルはここにいるんだから助けるのは当たり前さ。」

さあ、いくぞ、早くしないと陽香が目覚める。」

俺はラルと陽香をかついで水に飛び込んだ。

ザブーン

そして水面まで一気に突き進んだ。

そして水面から顔を出した。

そのときだった、何かつぶてのようなもので攻撃されたのは。

バシユシユシユッ

俺は風でガードし、二人を担いで浮き上がった。

「またおばさんか。」

俺はうんざり口調で相手に言った。

第三十六章 どこまでもしつこい邪神卿

「おばさん、いいかげんあきらめろよ」

俺はガードしながら言う。

おばさん・・・氷歌がまたもや現れたのだ。

しつこすぎだな。

俺はガードの強化をして防御を固める。

両腕がふさがってるから攻撃は不可能だ。

「だれが、あきらめるのですかっ。

さっさとあなたたちが倒されてくれればいいのよ。」

おばさんはそっぴいながら氷のつぶてを俺たちに向けて襲わせる。

パキキキキン

ガード壁に当たり氷が砕け散る。

「っ・・・おろして」

ラルが申し訳なさそうに言う。

「無理だな、ラルだって体力はほとんどないだろ？」

俺はラルに言う。

「・・・」

ラルは無言だ。

言い返せないのかもしれない。
事実なのだから

んーちょっときつくなってきたか・・

俺はひとりでにそう思いガードしながら地面のほうへ行くが
おばさんが邪魔にて降りられないし、地面も凍らされて立てない状
況にいる。

「んーこうげきしようにもできないなあ」

俺は呟いた。

すると、額から声が聞こえた。

「我を使え。」

と。

「！」

俺は目を見開いた。

「我がお前に力を貸してやろう。
鬼の能力を発動させろ。」

我の力で手にしなくとも操れるようにしてやるぞ。」

クリスタルは言った。

「ああ、助かる。」

俺は頷いた。

「剣よ!!」

俺は剣を呼び出す。

ウ”オン

剣は突如姿を現し、俺の前で浮かぶ。

「さあ、お前が操れ。」

クリスタルは俺を促す。

すると、疲労感は感じなくなり、
力が・パワーが体中を駆け巡った。

力が体にみなぎり染み渡る。

第三十六章 どこまでもしつこい邪神卿（後書き）

短くてごめんなさい。

誤字脱字があつたら報告してくださるとうれしいです。
感想お待ちします。

第三十七章 退散

俺は剣をあやつり、氷歌を攻めた。

キン！キン！！

氷歌の氷と音が響きあう。

俺は自分が剣を持つような感覚で動かし始めた。

「ちっ」

氷歌は舌打ちする。

そしてどんどん追い詰められていく。

いや、追い詰められているように見えた。

グイ

氷歌はこのとき、剣の柄をいきなり握った。

「俺の！！」

俺は叫ぶ。

ウ”オン””

するとその声に反応して剣から炎があふれ出した。

ブウワッアアア

「あっアチチチチ!!!」

氷歌は握っていらなくなり、手を離した。

その隙を見て

「スキアリ!!」

と、叫び、相手のみぞおちに剣を突き刺した。

グサッ

そして俺は剣を抜いた。

「うぐっ””・・・げほげほっ」

氷歌はうめき、血を吐く。

うわっ、赤じゃない、何だあの色っ

その血は赤ではなかった。

それは・・・青紫のような気味悪い血であった。

「ちっ、こんかいは・・・このへんに・・・しておくわ。
・・・おぼえてらっしゃい」

いつもより弱々しい言葉を吐いて氷歌は消えた。

「これでひとあんしんだな」

俺はそう呟くと、剣を戻して地に降り立った。

第三十七章 退散（後書き）

今回もすごく短くなってしまいました。
すいません。

第三十八章 帰還して待ち受けていたものは――

俺は陽香を抱えて、イールのいる倉庫のもとへ帰った。

倉庫が見えた先でゼレナルが現れた。

「・・・ようやく帰ってきたな。
手に入れたか？」

「ああ」

ゼレナルの問いに俺は頷く。

「ん――」

唐突に陽香が意識を取り戻した。

「だいじょうぶか？」

俺は顔を覗き込む。

「もう――ついたの？」

陽香は目を瞬きしながら聞いてきた。

「ああ。

それより――」

「大丈夫よ。」

それより、降ろしてくれる？」

俺の言葉をさえぎって言う陽香。

「・・・なんだかー」

俺に対して冷たくなったのは俺の・・・気のせいーか？

「・・・ああ。悪い」

俺は素直に謝り陽香をおろす。

「・・・ラルもよくやったな。
もどっていいぞ」

ゼレナルが言った。

「・・・」

ラルは何も言わなかったが、
ちらっと俺のほうを一瞬見た。

「・・・ラル？」

俺は戸惑った。

なんだか寂しそうな表情をしてたからー

「・・・」

ラルは何も言わない。

「・・・ラルがいたいのならそのまま続けろ。
・・・で、着いたところで休む暇もなく悪いがー
急ぎでしなければならぬことが発生した。
とりあえず、話はイールのもとでするからついて来い」

ゼレナルはラルに言い放ち俺等に言った。

そしてゼレナルは倉庫の中へ入る。

俺等も入った。

「やあ、久しぶり、二人とも。
クリスタルは持ってきた？」

久しぶりにイールと会った。

コクン

と俺と陽香は頷いた。

「じゃあ、悪いけど早速くれないかな。
急ぎのこともあるし何より時間がもったいない」

イールは言った。

「分かった」

俺は頷くと力を額に集中させた。

クリスタルよー俺の手に”

心の中でそう願い、

手のひらに乗せるようなイメージをする。

すると

スポンッ

と音を立て額から抜けた。

そして俺の手元にクリスタルがおちる。

俺がそれを握り締めると同時に
陽香もクリスタルを取り出した。

フラーッ

陽香の体が崩れる。

とっさに俺は陽香の体を抱え込むようにして支えた。

「大丈夫か？」

俺は聞く。

「平気よ・・・」

クリスタルを抜いたから・・・だと思っから・・・」

そついう陽香だが顔色が悪かった。

「顔色が悪い・・・。」

俺は呟く。

イールが

「こんなときに無理をさせてごめん。
だけどほんとに急ぎなんだ。」

陽香はゆっくり休んで。

ゼレナルは陽魔に話してくれ。

僕はクリスタルの改良するからー」

と、言つて倉庫の奥にさつていった。

「こつちだー」

ゼレナルはそう言つて、

陽香をはじめて寝かせた部屋へと向かった。

俺は陽香を再び抱えてその部屋へ足を踏み入れた。

懐かしいー

部屋の中を見て思った。

そして陽香をベットに寝かせた。

「私は――」

「平気じゃないだろ？」

頼むから、休んでいてくれ」

俺は言った。

陽香はいつも無理をする。

水のことで体にも精神的にも負担をかけた。

できれば今は休んで欲しい。

「・・・・・・」

陽香は俺を見て黙ってしまった。

唐突にゼレナルが――

「陽魔、部屋を変えるぞ。

陽香はそこにいろ」

と、言つて、部屋を出た。

「分かった。

ラル、こつちにおいで。

陽香・・無理はするな、休めよ?。」

俺はそう言つて、部屋を出た。

陽香の寝ている隣の部屋に移動して俺とゼレナルは話した。

「急ぎつてどういうことだ？」

「・・・龍蛇が大きな行動に出た」

ゼレナルは静かに言った。

「なーそれはどういうことだ？」

「木々たちによれば巫女を一人手に入れられてしまったと判明した。」

「・・・分かるように話してくれ、ゼレナル」

俺は無残な思いで口にした。

何が何やらで意味が分からない。

巫女を手に入れたってどういうこと??

「・・・」

以前、龍蛇がこの世界を滅ぼそうとしている、と
はなしたよな？」

「ああ」

「この世界を滅ぼすと口で簡単に言えるが
簡単にはずがない。

滅ぼすにはそれなりの力が必要。

そこで目をつけたのが巫女の力なんだ」

「……」

巫女の力ってそんなに強いのか？」

「当たり前だ。

巫女は神の愛娘。

神・・・天を支配する強大な力。

それを巫女は加護として譲られている。」

天は地上をも支配し、二人の巫女を地上に配置した。

一人は、白銀の巫女、もう一人は、漆黒の巫女。

その二人を配置したのだ。」

「龍蛇は・・・どっちの巫女を手に入れたんだ？」

「・・・漆黒の巫女だ」

「それまたなんで？」

「さあな、俺にはわからない。

ただいえることは俺たちには時間が無いことだけだ」

「そうはいうけどさあ、おれたちになにをしろと？」

「白銀の巫女を探し出し、

漆黒の巫女を取り返し、龍蛇を滅ぼし、世界を元に戻す。」

ゼレナルは淡々と言い放った。

“し”の三連発じゃねえかつー！！

のど下まできたそれをぐつと抑える俺。

「・・・っ。」

で、その白銀の巫女はどこ？」

俺は聞いた。

第三十八章 帰還して待ち受けていたものは――（後書き）

久しぶりに書きました。

スランプ脱出！！

ほんとに呼んでくださる皆様に大変申し訳なかつたです。
これからも頑張りますのでよろしくお願いします。

第三十九章 巫女の居場所

「それは 水晶の洞窟の奥底 だ。」

ゼレナルが答えた。

「・・・、龍蛇たちより先に救い出せ・・・と？」

俺は眉ひそめ聞いてみる。

「そういうことになる。」

たとえば、龍蛇たちが先に来たとしてもおそらくは手に入れないだろうがな」

「どういうことだ？」

先に来たとしても手に入れられないって・・・

「今、白銀の巫女は封印されている。」

それを破ることは龍蛇たちにはできない。

だから漆黒の巫女を狙ったんだ。

漆黒の巫女は攻撃的で並ならぬ能力を持っていたが龍蛇には及ばなかった。」

ゼレナルは淡々と説明した。

「龍蛇も並ならぬ能力を持っているからか？」

「それもあるが、おそらく能力を使う時点では

龍蛇も苦戦を強いられるだろう」

「だったらー一体どうやって捕まえたんだよ？
何か汚い手をつかったのか？」

「おそらくは呪いをかけたんだろうな。
それか、邪気で蝕んだか・・・だな。

神の愛娘は天からのいわば最強兵器だからな、
邪気で操られさえしなければそんな簡単に手出しはできない奴だ」

「兵器つて・・・。

巫女も一応生きてるだろ？
道具扱いなのか？この世界で巫女つてもものは？？」

なんだか少し怒れてきた。

兵器つていわれたら道具扱い同然だろう？

それはそいつを侮辱してるようなものだ。

俺だって前世の記憶を持っているだけで・・・道具扱いされたら
それこそ、俺は激怒する。

・・・それでも少し抑えていられただけマシだと思う。

ここで声を張り上げたら陽香に迷惑かけちまうし、な。

「道具扱いなんかしていない。
もつとも、そんなことがいつてられたのは
幽魔がいたころの話だが。」

死んだ後からはそれなりにいろいろあったから
手助けしてくれるさえ怪しいものだ」

ゼレナルは呟くように言う。

「それなのに、巫女のところへいかせるのかぁ!？」

俺は目を見開く。

オイオイ、絶対やばいぜ。

俺、そこで殺されかねんぞ。

「お前が行けば白銀の巫女も手を貸すはずだ。
漆黒の巫女の方がつかまったからには助けると言い出すはずだから
な」

「俺が??」

「お前の前世は幽魔だろう。

幽魔は巫女とも面識がある。

それと同時に幽魔は巫女に借りがあるからな。

とにかく、陽香が回復したら出発だ。

俺もついて行くから、それなりにお前も休めよ?」

「あ、ああ」

その言葉に俺は頷くことしかできなかった。

はつきりいつて、俺は、宿命がありすぎと思った。

前世が幽魔だからってこんなに大変な目にあうとはな。

・いや、幽魔もそれこそ大変だったんだろうなー

第三十九章 巫女の居場所（後書き）

ちよつと短い・・・かな？

すいません、遅くなりました。

次も頑張ります！

第四十章 休息

俺は陽香のいる部屋に戻った。

すると、陽香は目を覚ましてしまった。

俺は陽香の寝台の傍のいすに座り・

「起こしたか？悪かったな」

俺は謝る。

「陽魔は悪くない。

その前から起きていたわ。

だいぶ回復したし」

陽香は上半身を起こしながら言う。

顔色・・・悪いじゃないか。

「そうか。

だが、顔色悪いぞ？」

俺は陽香の頬に手を伸ばし、触れる。

「っ・・・。」

ピクンと陽香が震えるが・

何事もなかったかのように俺の手に陽香は手を重ねる。

「!!」

俺のほうが驚いた、跳ね返されると思ってたから。

だって、このごろ冷たかっただろ？陽香は俺に対して・・・。

「平気よ、・・・それにしても陽魔の手は大きいのね。」

「え？あ、そ、そうかあ？」

戸惑いが声に出してしまう俺。

手のことじゃないぞ、陽香に手を触られたからなんだ。

「そうよ。」

陽魔の腕に・・・何度も救われたわ。」

なんだかいつもより優しい口調の陽香。

そのことに慣れているはずもない俺はどう反応したらいい？

「だ、だってさ、守ることに必死だし、

そ、それに、俺、何度も救ったか？陽香を。

俺、陽香が傍にいただけでも救われてる気がするのに」

うろたえる俺は何とか言葉をつむぎだす。

「陽魔が傍にいただけで私だっていつも救われてるわ。
安心できるし、頼れるし、守ってくれるし、

なにより私を心配してくれる優しさに、救われてる」

陽香の口調は優しいを通り越して俺を褒め称えてる気がする。

「よ、陽香あ？大丈夫か？
いつもとなんか違う気が・・・」

俺は陽香の額に手を当てようとすると、陽香は俺の手をつかんだ。

陽香の表情はなんか火照ってる。

「大丈夫よ、・・・陽魔の手、冷たい・・・。
ひんやりする、安心する・・・陽魔、傍にいて、こうしているだけでいいから」

俺の方へと身体を陽香が寄せてくる。

「お・・・おいつ」

陽香が落ちそうになったとき、俺は陽香の肩を抱くと・・・熱かった。
ぴたっと、身体が密着する。

すると、陽香のぬくもりが・・・いや、熱が伝わってくる。

「よ、陽香っやっぱ大丈夫じゃないって、おとなしく寝よう、な？」
俺は子供をあやすような口調で聞く。

こんな態勢だと、俺・、心臓バクバクでどうにかなっちゃいそう。

「だいじょうぶ・・・だわ・・・で・・・も・・・っああれえ・・・え？」

俺に身体を預けてくる陽香。

自分で自分を支える力はないようだ。

「大丈夫じゃ、ないだろ。」

熱あるし。俺、ゼレナルに解熱剤もらってくるからさ、おとなしく・
」

「よう・・・ま、そばに・・・いて。」

いつしよに・・・いて。薬なんていらない・・・陽魔が・・・
そばにいてだけで・・・いい」

陽香は熱で浮かされていた。

それでも必死に俺に言葉を伝える。

陽香・・・。

俺、自分を抑えられなくなりそうだ・・・。

「陽香、分かったから、力を抜け。」

俺も添い寝してやるから」

俺、今そうとうやばいこといわなかったか？

「ん・・・そばにいてくれるなら・・・」

「ああ、」

俺は陽香を寝台に寝かせ、その中へ俺も入る。

すると・・・

ぎゅうっ

陽香は俺に抱きついてきた。

「っっ！？」

今日の陽香はぜったいおかしい！

普通こんなことしないはずだ。

熱のせいかな？？そうだな？陽香の本心じゃないかな？
違うかな？

違ったら違ったらで悲しいけど、思い切ったこと普通はしないもんな？

「陽香・・・」

俺は毛布をかぶって、陽香の背に腕を回した。

なんか、熱下がった後に何か言われそうだが、
このさい、そのときはそのときだ。

「ん、あつたかい・・・」

陽香は気持ちよさそうに俺の腕の中で眠りにつこうとしていた。

うつとりしているその顔が俺を興奮させる。

「熱なんて俺が吹き飛ばしてやるからな・・」

そっついながら俺は目を閉じ、眠ろうとした。

陽香とこうしていてなんか罰が当たりそうだと
いまさらながらに思う俺の休息だった。

第四十章 休息（後書き）

えと、熱で優しくなった陽香ちゃんでした。

そしてそれにうろたえる陽魔くん。

はつきりいつて現実ではこんなことないですよねえ。

小説だからこそその展開？かな。まあ、そんなこんなでまたの機会に。

第四十一章 いつものイール？

陽香が熱を出して早数日。

意外と遅く感じるが・・・。

ばたんっ

イールが倉庫から出てきた。

「できたよーお～～～お、」

「イール・・・！？」

よろよろとイールが出てきた。

傍にいたゼレナルですら目を瞬く。

ばたんっ

扉を開いた音と同じくして倒れるイール。

よっぱど、無理して作っただらしい。

倒れたのにもかかわらず改良品はしっかりもっていた。
・・・そこだけはしっかりものだな。
そしてなんてすごい奴。

いきなり現れるのはこれで何回目か。

「イール、大丈夫か？」

目に隈ができてるが・・・？」

俺はイールに手を指し伸ばす。

「はぁーっ、・・・」

ゼレナルは何故かあきれるようにため息をついていた。

「ゼレナル・・・？」

俺は半ばゼレナルに目を見やる。

「こいつにとつて、それは日常茶飯事だ。
隈なんていつでもできる。

ないほうがおかしいといえる。」

ゼレナルはそうイールを見下ろし、述べた。

「は？・・・初対面のときはなかった気がするが」

俺はそれを思い出しながら言う。

「あのときは実験どころじゃなかったからな。」

「ふーん、そんなもんか」

「そんなもんだ」

俺はいまだに不満を持つがいつまでもゼレナルと話して
イールを起き上がらせるのに手間をかけたくない。

「ほら」

「陽魔・・・たすかった・・・あんがと」

あんがとって・・・普段こんな言葉づかったやつか？

「で、改良し終えたんだな？」

ゼレナルはイールの片手にもつ袋を見てそう聞いた。

「改良したから・・・きたにいい、決まってるじゃんっ・・・はあー、
僕だってなあ・・・いろいろとかんがえてるんだよっ」

イールはなんかムキになってた。

「で、改良品は？」

ムキになったイールVS^{バイサス}冷徹なゼレナルだと、
いつまでたっても言い合いは治まらない気がしたから俺は先を促し
た。

「・・・そうそう、これだよ」

そういつてイールは袋から俺と陽香の分を取り出した。

第四十一章　いつものイール？（後書き）

少し異なったイールになってしまいました。

世の中人はこうも変わっちゃうのかなと、思いそう。

世界は自分で書いてるから少し口調が変わるだけでだれなのか何を言いたいのかとかわからなくなっちゃいます。

書き終えたあとでも自分で読み直して確認はするけれどね。いいいたいことをいえないキャラ、

てれてムキになるキャラ

いじっぱりなキャラ

くーるなキャラ

人・・・個性溢れる人って書くのは難しいー！

――

セールスやってる人とかも案外書くのは簡単そうで難しそう。

ツンデレは案外書きやすいかも。書いててタノシー。

ネコみたいなどうぶつキャラも書くのは楽しそうかも。

この物語に合わないキャラも考えてこれからも登場人物ふやします。

ではこのへんで

第四十二章 改良品、その名も――！！

「こ、これだ――！！」

イールがやけにテンション高く叫んで
取り出したのは・・

「腕輪・・か？これ」

俺はもつとすごいものが出るかと思ってた。

まあ・・いまさらこの時代に
俺を驚かすものはないだろうが・・。

その腕輪は腕にはめる部分に
梵字に似た魔界の文字が書いてあった。

おそらくはなにかの召喚術とかだろう。
そんな気がした。

俺のは紅いクリスタルがはめ込まれていて

陽香は蒼いクリスタルがはめ込まれている。

「そうさ。」

武器もその中から取り出せるよう
いろいろ改造したんだからっ！

召喚術と意思開通の呪を刻むのはそうとう時間がかかったよ。」

「ふうーん」

熱く語るイールをよそに俺は、
本当にソレがしっかり力を発揮するのか
疑問に思ってた。

ていうか、興味がない。・・・アタリマエだが。

「その名も・・・クリスタル装着輪!!」

「そのままかつ!!」

俺は熱く叫ぶ・・・いや暑苦しく叫ぶイールに
即座に突っ込んだ。

「・・・」

なんかゼレナルも微妙にあきれてるような・・・。

実は慣れてないのか・・・コイツも・・・？

「・・・つまだ鎧^{メイル}も、イヤリングも
作り途中だからそれまでこれで待っててくれ!!
もっといいのだから!!」

バタンッ

と強く閉めて彼は行ってしまった。

俺の突っ込みにも負けず（・・・いや、へこんでる？）
そう叫んで去っていった。

「・・・俺・・・どうすればいいか
イマイチわからないんだけど・・・？」

ゼレナルに助けを求めるように言うと・・・

「・・・俺に言われても、・・・なあ。・・・」

ゼレナルはなんだかいつもと調子がずれてた。
よっぽどこたえたんだな、イール作のコレが。（名前）

何も分からぬまま、俺はソレを利き腕にはめた。

ピカーーーー！！

そう輝いて俺の腕にしっかりと馴染んだ。

と、・・・とにかく、イールが完成させるまで
体力回復、特訓にいそしもうと、

気長に待つことにしようと思う。

・・・次は・・・名前聞きたくない・・・なあ。

そう内に秘めた彼に対する思い（願い）を抱きながら。

第四十二章 改良品、その名も――！！（後書き）

はい、今回短かったですね。

でも、スランプ抜け出しました。

これからも頑張っていこうと思います。

もし、キャライメージ崩れたらごめんなさい。

では誤字脱字あったら報告を。

よろしければ感想ご意見くださるとうれしいです。

第四十三章 悪魔の憑くこのオトコ（前書き）

ついに登場、悪役龍蛇！

ということで、これから敵の事情を話します。

第四十三章 悪魔の憑くこのオトコ

完全なる秩序を生んだー“無”

そこから歪み生まれた二つの存在がー“神たち”

一人は、生命を司る神、もう一人は秩序を司る神。
生命を司る神を、聖神 と呼び、秩序を司る神を、
理神 と呼ぶ。

秩序それは、狂いのない輪を意味する。

生命それは、生まれ死に行く魂を意味する。

生命があるから生まれる秩序、
秩序があるから流れる生命。

一つかければ狂うと誰もがそう思った。

だが、神を生んだのは“無”という完全な秩序。

その理から、ー・・・乱れが起こった。

聖神が創り出し細胞に与えた魂はさまざまな生物を生み出した。

植物や動物、空や海。

その中でも魂が異様に力を得た者、妖幽鬼がいた。

誠心誠意、正義、生きること全うする彼らがいれば
邪心もち、支配をたくらむ者も生まれた。

それらは出会い、争いを生んだ。

それが生命と秩序の歪んだ乱れ。

ソレに哀しむ二人の神は、

聖神は天使を、理神は悪魔を生み出した。

天使は、この世を正義という名の道に生きることだけを全うさせることを誠心誠意込める彼らに憑いた。

悪魔は、全てを支配、統一させる悪しき心をもつ者に全てを統一という目的に、彼らに憑いた。

天使等が全うする時代があれば
悪魔等が全うする時代もあった。

生命と共にある感情という名の心。
秩序の輪にある魂。

ヒトに憑いた魂が、ヒトの死によって解き放たれる。
解き放たれた魂は次の生まれるものに憑く。

そうして秩序は流れていった。

神は創ることに大きな代償を払わなければならない。
それが、昏睡。

長い長い間、眠っていれば、自分の創った世界を
見守ることができない。

天使の憑いた者が世を治めれば
世は生命溢れる世界となるう。

悪魔の憑いた者が世を治めれば
世は滅びに向かうだろう。

悪魔は統一だけでは飽き足らず
滅ぼし完全な秩序を求めてしまった。

それが乱れ。

生命のない世界は世界じゃない。

流れる秩序を乱してしまふ。

乱された秩序は完全な秩序をも揺るがし
神の終わりを告げる。

神が終わるということは
与えられた魂が解き放たれ、
騒動を起こす。

神はあくまでこの世界を作るための神だ。

他の世界にはたくさんの神が存在する。

他の世界まで乱れた秩序は影響をもたらしてしまふ。

それは、神たちの戦争にもなりかねない。

だが、神にも創りだした悪魔を滅ぼすことはできない。

滅ばせば滅ぼしたで乱れが生まれるからだ。

天使が憑いたからといってもそれが悪魔となりうる可能性はあってもおかしくないのだから。

*****龍蛇視点

これは神話に語り継がれているものだ。

余は、この神話で言えば悪魔に憑かれてるのだろっ。
心から支配をもくろんでるのだから。

つい前の話、余は幽魔という男に負けた。

力の差はないに等しい。

だが、信頼、友情、余が捨てたものがあいつにはあった。
そのせいで負けたと言っておかしくはない。

余はそれで深く傷を負い、重症だった。
傷が癒えた頃、幽魔は死んだ。

余は再び、仲間を集めた。

余のチカラをもってすれば自我のない獣や
チカラで魅了されるやからは多い。

そしてこの世界を地盤から揺るがそうと
大地のチカラを吸収していった。

余は空に浮かぶ無数の島のひとつに拠点を置いている。

空から大地を監視していたのだ。

余は徐々に台地を支配しはじめていった。

それからだ、大地が騒がしくなったのは。

なにごとかと思えば強力な能力を持つ奴が増えている。

仲間を放ったが殺されたり失敗の繰り返しだ。

いい加減、島の宮廷にいるのもあきてきたくらいだ。

「龍蛇様、いい案がございます」

敵となるう相手に放った奴が、余に相談してきた。
氷歌だ。

*****氷歌視点

龍蛇様は私の恩人。

全てを捧げてもいいと思える相手。

だからこそ、龍蛇様のために

敵を葬ろうとした。

でも、幾度となく失敗する。

だから信用を取り戻すために私は、宮廷に戻った。

煌びやかな地下屋敷。

屋敷は宝石で飾られており、大広間には龍蛇様の玉座が。

今日もそこで座っていた。

*****龍蛇視点

「いい案とは？きかせてみよ、氷歌」

死にそこなつた雨女、それがこいつ。

余が新たに生まれ変わりを果たさせてやったんだ。
使えるところもつてな。

「はい。」

私が思うには、漆黒の巫女を手に入れることが
支配力の増加に繋がるとおもうんです。」

漆黒の巫女・・・か。なるほど、な。

見つければ手に入るも同然だが
見つからなければ・・・な。

「ほおう、いい案だが、居場所が分かなければ
無理であろう？」

「この氷歌、事前に調べはついております。

場所は・・・この空島の真下の海洋でございます。

私の放った密偵が、黒い髪をした羽と尻尾のある者が泳いでいたと」

やはり、水を司るこの女、使える。

「そうか、よくやった、褒美をやるうぞ」

俺は玉座から立ち上がり、氷歌に近づき口付けを落とした。

「んん・んむ」

甘い声が余を震えさせる。

なんとも柔らかい唇に我を忘れそうになるぐらいだ。

「んう・うんっ・あん・っ」

口付けを深くしていく。

一度離して――

「――満足か？」

と妖艶の笑みを浮かべれば

「え、ええ・私、にはつもったいない、くらいですわ^^」

と、頬を朱に染め、誘うような笑みを見せてくる。

これ以上、ここでそんなことするのももったいない。

「余が自ら出向こう。

氷歌も来るがよい」

「はい、龍蛇様っ」

余はそうして真下にある海洋に向かった。

屋敷を出て、空を飛ぶ。

数人の仲間を呼んだ。

「今からどちらへ？ 龍蛇様」

そう聞くのは雀^{スズメ}。

茶髪の髪に鳥のような翼。

右目は眼帯。

全身闇色の服をまとう男だ。

「漆黒の巫女のところだ。

お前には力を借りることになる。」

「それはそれは光栄です^」

雀はにっこり笑った。

その笑みの下は残酷な笑みが眠っているのを
余は知ってる。

「ミーもヒツヨウなのか？」

自分をミーと呼ぶ少年は

くすんだ紫色の髪を持っている。

瞳は輝かしいばかりの黄金だ。

夜になると光って見えるソレは猫のようだと思う。

コイツの名はオブシディアン。

「ディアンも必要だから龍蛇様は
お呼びになられた、そうでしょ？龍蛇様」

そう問うのは金髪の女、ティラミ。
純粹そうに笑顔振りまく彼女は策士だ。

「そうにきまつてるわ、ディアンのチカラは
魔力を奪うことですもの、ねえ？龍蛇様」

こう問うのは氷歌だ。

「ここにいるお前たちの
チカラはすべて必要だからだ。
世界征服のために、な」

雀、オブシディアン、ティラミ、氷歌

この四人が余の配下において強い四人集だ。

水でも息が吸える術を氷歌にやらせて
海洋の中へもぐりこんだのだった。

第四十三章 悪魔の憑くこのオトコ（後書き）

やっと登場しました。

はやく陽魔にあわせたいですね・・・。

というか、エロくなりそうだが、龍蛇にキスシーン任せると。
陽魔はまだ初心だけどさ・・・。

ねえ！少女漫画の少女って何歳までが少女！？
かなり危ないのがあるきが・・・。

危険が区別できない無知な作者ですいません。

第四十四章 漆黒の巫女を捕まえに（前書き）

龍蛇視点です。

第四十四章 漆黒の巫女を捕まえに

じゃぼんっ

ぶくぶくぶくゝ

漆黒の巫女は深海に潜み暮らしているらしい。

深く深くどれだけでもぐったであろうか

長い間、潜り続けると、

黒い髪に深緑の尻尾、背中には黒い翼がある人魚を見つけた。

「皆のもの、よく聞け。」

余が巫女の注意を惹きつける。

その間に四方を囲むのだ」

余の言葉に

「仰せのままに、龍蛇様へ」

「はいンゝかしこまりましたわゝへ」

「御意に」

「ワカッタ」

皆はそれぞれ頷き気配と共に姿を消した。

余は世に背中を向けたまま気づかない巫女と距離をとり、

「巫女よ、久しぶりだな？」

と、妖艶に笑ってみせる。

「き、貴様は――！？・・龍蛇っ！！」

巫女は振り向いた。

振り向き側に長い黒髪がゆれなびく。

漆黒の巫女の眼は見開き、驚愕した。

「ほおう？名前を覚えてくれてたとは
光栄だな。そう、余の名は龍蛇。

お前の名はなんだ？」

不敵な笑みをしながら徐々に近づく。

巫女はじりじりと後ろに下がる。

「お前なんかにつかまるか！！」

そう叫んで彼女は余に背を向けて
泳ぎだした。

「余の配下よ、今だ」

余がそう言ったまさにそのとき、

ヴァアアアンッ”

黒い霞が・・・もやが巫女を取り巻いた。

「っ！？」

いきなり視界が悪くなり、
それにともなつて身体も動かなくなったのだろう。
彼女はうめいた。

黒い霞が、鎖のように巻きつき
巫女の身柄を拘束する。

配下の四人が姿を現した。

黒い霞・・・闇を生み出したのは、ティラミだ。
黄金の髪は、闇をも秘めた光の髪なのだから。

「ふふふ、やったわ^」

くいつと指を動かせば
それだけ闇の鎖で拘束するチカラは強まる。

「っ・・・くそっ・・・は、はなせっ！！」

漆黒の巫女はもがいて暴れる。

「あらあら、これだけじゃダメエ？」

くいくいつと指を動かすティラミ。

「っ”うっ”、・・・は、はなせっ！」

まだもがく巫女。

「オブシディアン、魔力を奪え」

余は命を下した。

魔力を奪えばおとなしくなるだろう。
そうでなければ連れて行けぬ。

「ウン、ワカッた。」

ディアンは、暴れる巫女に手をかざし
魔力の中心を探った。

半身半漁の巫女は一体どれだけの能力があるのか・・・。

「・・・ココだ」

ディアンは巫女の背中・・・。
つまり、翼を差したのだった。

「よし、奪え」

ディアンは、翼に触れ、

「魔力ヨ、我ガ手ニ」

そう呟いて魔力を奪い始めた。

シューウウウー

黒く清い魔力があふれ出す。

「う”うああああああ”」

巫女は叫んだ。

チカラが抜けていくのを感じるだろう。

しばらくすれば、がくと巫女の力が抜け、
ディアンも

「ほとんど、ウバツタ。
モウないハズ」

と期限が良い。

「そうか、ごくろう、オブシディアン。
・・・雀、翼に闇を込めろ。」

「御意」

「や、・・・やめ・・・ろ」

巫女はまだ話せる元気があるらしい。

まあ、そのくらいは許してやるか
あとの楽しみがある。

雀は巫女に近づき、翼に手をかざして
闇を翼に込めた。

「うあああああ」

闇がどつとあふれ出す。

ティラミは攻撃型、拘束型だが、
雀は、精神を病む、世親攻撃型が多い。

「つ　う　・・・　」

巫女の翼がやみに染まる。

翼は本来、出さなくてもいいものはず。
それを出し続けるほど、魔力はたまる。
・・・それは翼が清いから。

闇に染まった翼は・・・しまえばどうなるか
巫女も分かっているのだろう。
あえて、出したままにいる。

「龍蛇様、翼をしまっただけなければ
・・・通用いたしませんか・・・」

「余もそれは分かる。
どれ、余がやってみよう」

余は、巫女の背中に近づき、
背に触れた。

「・・・あっ!?!」

何か、感じたのであろう。

余はそのまま、翼のないところを
指で触れ続け、円を描いてやる。

スウィーツ

「う”・・・!うあ”

や、・・・やめ・・・ろ”!」

巫女はうめく。

そう拒絶する割には

しゅうう・・・うう・・・

翼はもの見事に小さくなって背中にしまいこまれていくが。

「っ”・・・!!」

完全に闇に染まった翼がしまわれると
巫女は力を失って、その場に崩れる。

ぐいっ

余は巫女の身体を引き寄せた。

「う”・・・うう・・・」

巫女はうめき続ける。

「・・・連れて行くぞ^」

「御意」

「ワカッテルヨ」

「おおせのままに」

「わかってますってばぁーっ^」

余は巫女を抱き上げて、海面へと向かった。

海から上がれば、巫女の人魚の尻尾は、ヒトの足へと変わった。

そのまま地下屋敷に余は巫女を連れ去ったのは言うまでもないだろう。

第四十四章 漆黒の巫女を捕まえに（後書き）

巫女の活躍がなくてすいません。

圧倒的な力を持つてる龍蛇様には敵わない！

巫女は・・まあしぶといことは

次回も分かるかと。

龍蛇「巫女は図太いが弱い。

余より強いものはもうこの世にはおらぬのだ！」

珍しくご機嫌です、龍蛇様

配下「そうですわ！龍蛇様が一番の、お・か・た！」

「龍蛇様、ミーより強い！」

「絶対服従を誓えるのはこの方しか！！」

「ティラミーン、龍蛇様、ダークスキ！」

このように配下もご機嫌。でした。では、また！

第四十五章 巫女（前書き）

漆黒の巫女視点です。

第四十五章 巫女

神々に愛されし、二つの存在。

心に憑くとされる天使も悪魔も及ばない存在、

それが巫女。

別個にして同一の存在であり、欠けてはならないもの。

巫女は互いに愛し合い、互いの存在を共有していた。

天使が憑くオトコは巫女に協力を要請した。

悪魔が憑くオトコは巫女を滅ぼそうとした。

白銀の巫女は力尽きて、誕生した己の居場所に封印された。

アタシ、漆黒の巫女は、海へと戻った。

もともとは巫女ではない。

ただ、海で生まれ、神との融合により
巫女と化した。

白銀の巫女は完全なる神の遣い、
白銀の巫女がいなければ漆黒の巫女の子カラなど
発揮できない。

アタシも身を海に隠し、平和に過ごしていた。
憎き敵に捕まるまでは。

気づけば、私は鎖につながれていた。

ガチャンガチャンッ・・・ガチャン！

「っーっーっー！！」

はやくはやくはやくっ！

逃げなければ・・・こいつたちから・・・！！

「あらあ？龍蛇様、彼女、この期に及んで
にげだそうとしておりますわ？」

憎き敵の配下の一人がアタシをあざ笑うかのように呟いた。

第四十五章 巫女（後書き）

うわっ！短っ！！

と、思った方には本当にすみません。

スランプがなかなか治らないので・・・。

うう・・・やる気が・・・。

気長に書いていくので、どうぞ温かい目でよろしくいおねがいます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3261m/>

前世の記憶

2011年10月7日11時10分発行